

演劇会議

発 言	1
なかまの素顔 12	2
■ 東西演・総会・ゼミナール特集	
停滞を破る胎動がここに	黒 沢 参 吉 4
健在なり東演	谷 辺 康 浩 10
総会に参加して	太 田 明 子 11
東演総会の感想	石 川 ひ さ し 12
東演ゼミの感想	坂田 真生 藤原 浩平
	秋沢このみ 香月 良 13
第10回西演総会を終えて	猿 渡 公 一 16
ゼミナールめも	佐々木 従 19
ゼミナール報告補遺	森 本 景 文 22
西演ゼミの感想	
	国司 等 勝呂 勉 向井 義秋
	毛馬幾代 斎藤睦子 24
関西における戦前プロレタリア演劇の研究〔6〕	
	大 岡 欽 治 31
■ 劇団通信	38
■ 劇 評	
「獅子」(福演)	土 屋 清 46
「銀行の中のそと」(大阪金融)	大 塚 雅 春 47
仙台小劇場再建に拍手	作 間 雄 二 50
「京浜」はぐるま「協同」のしごと	萩 坂 桃 彦 52
演劇状況を現地にみる	
— 中国・四国の労演めぐり —	
	小林ひろし 55
感想・評論活動へ中堅層の参加を	黒 沢 参 吉 71

少ない予算で大きな安心



入会の手続

原則として個人会員は受けませんが、5人以上で団体扱いとします。初回400円と署名捺印で会員になり、左記の行事のときに必要な物資、準備を格安な費用でまかないます。

なお、会員には下記の特典もあります。

営業種目

- ☆ 結 婚 式 ☆
- ☆ 葬 儀 ☆
- ☆ 出 産 ☆
- ☆ 入 学 ☆
- ☆ 節 句 ☆
- ☆ 成 人 式 ☆
- ☆ 金・銀 婚 式 ☆
- ☆ 旅 行 ☆

会員の特典

ショッピング・レジャー(映画ポロリングその他)など、日常生活のいろいろな分野で、5~20%の割引でご利用になれます。

詳しくは下記へご連絡下さい。

神奈川県総合サービスセンター

横浜市中区翁町2-8-7・熊谷ビル・TEL 045 (681) 5412 (代表)

言 飛

国民救援会の呼びかけで、労働、農民団体、政党や民主団体などで、「曙事件対策委員会」が生れ、東京や静岡の仲間も加わって、事件の真相究明と犠牲者の救援斗争が行われた。しかし、遂にそれは、関係者のまわりの

この斗いの中で、運動の先頭に立った一人の青年が殺され、数人の農民が獄につながれた。松川事件は無罪になつたが、曙事件はそうでなかった。山梨の一寒村で起きた、いや起されたこのデッチ上げ事件は、当時の権力機関の発表と、それをうのみにした新聞の報道によって恐しい強盗殺人事件として県民に印象づけられた。捕えられた村人たちは下獄し、殺された青年の死因も、加害者が権力の手先であったために、今日に至るまで明らかにされていない。

いま、私たちは、二十年前に山梨の一寒村曙村で起きた「曙事件」（農民民主化、農民運動への弾圧事件）に取材した「あけぼの」にとりこんでいる。

急傾斜の山村、曙村の山道を上りつ、下りつしながらぐっしょりとした汗の中で、不思議と東り演の仲間たちの顔が浮んだ。
あの顔、この顔、暖かい顔、きびしい顔、一つの顔があるいは暖かく、あるいはきびしく、一緒に山道を歩く劇団の仲間の顔と重なり、曙の村人の顔と重なった。

運動にとどまり、松川のような広がりを持ち得なかったが、この斗いの経験は、それ以後の山梨の数々の斗いの中に、いろいろのかたちで引継がれている。
曙のような事件は、当時の情勢の中で全国無数にあつたに違いない。
苦難な斗いの中で生きた「あけぼの」のいのちが、いま私たちの中によみがえった。沖縄、安保、ドル問題、日中問題や米国防総省の秘密報告のバクロなど、日本や世界の動きが急激な転回を示している時期に、私たちの中に「あけぼの」がよみがえったのである。

そして、私は考える……。私たちの中に、それをよみがえらせてくれたものは何かということ……。
それは、私たちを生み、育ててくれた山梨の民主的な斗いの伝統であり、私たちに、そのなかで生きることと教えてくれた東り演の仲間の連帯のころであった——と

いま私たちは、浜松での交流の中で得た数々の思いを胸に、山梨の斗いの歴史ととりこんでいる。私たちの活動を支え、はげましてくれる、暖かい顔、きびしい顔々の一つ一つを思い浮かべながら、この山梨の地に、東り演の統一の思想をしっかりと根づかせるために。

一九七一年八月（梅津幸三）

映画シナリオ

郡 上 の 立 百 姓

¥ 200
〒 65

原作・こばやし・ひろし 脚色・山形 雄策

解 説

映画化の呼びかけをかねて

詩 り

一つの要求から新しい文化を

郡上の立百姓の映画と劇団と私

脚色にあたって

丸いばつかじやだちかんぞ

対 談

私たちのふるさと郡上

いつまでも生きとるもの

農民のいぶき

映画化に期待して

宝暦騒動と郡上の立百姓

山 本 薩 夫

平 野 三 郎

美 濃 部 亮 吉

こばやし・ひろし

山 形 雄 策

高 橋 碩 一

杉 村 春 子

修 治・鈴木 義 秋

杉 村 長 棟 准 教

黒 沢 参 吉

仲 武 司 夫

山 田 和 夫

滝 沢 修
野 田 直
千 葉 稔

お求め先 映画郡上の立百姓製作委員会

岐阜市西野町1丁目 劇団はぐるま (☎ 0582-62-1652)

東京都港区高輪 3-19-31 全国労映内

東京事務所 (☎ 03-445-0761)

取次所 演劇会議発行所 川崎市小田 4-28-17 (044-33-0775)



村谷三枝子さん

— 劇団若者座 —

で終わらせるということにはならんのかな
いだろうか。

司会 若い人からも古い人からも信頼されて
いる様ですが、その辺どんなですか。

岡田 全くその通り。職場の仲間や経営者か
らもずい分頼りにされちよるようなね。

大迫 積極的に行動しているし、フアイトは
あるし、責任感はあるし。

加藤 人に頼まれてでなく、自分から率先し
て引き受ける。気がついたら直ぐ実行する

山田 それと明るさ、楽天性でしょうかね。

司会 人生のクッションとも云える彼女の恋
愛感、男性像は客観的にいってどうですか

山田 やっぱり一緒に劇団を続けていける人
を探しよるんじゃないかね。

加藤 村ちゃんは恋愛のことより、この劇団
を通して自分の道をもつめる方が大事なつ
て言いよったがの—

大迫 特に異性に対しては自分の感情を外に
出さんような気がするな。

岡田 サークルを大切にするね。そのため
自分の感情を非常に殺している。

司会 彼女は見合いたしことがありますがね
一同 イヤー、ないじゃあろかね。

劇団の若者？（気持だけ）が数人集まり、
秋の夜長を延々と、村ちゃんについて語って
もらいました。その中の一部を載せて紹介に
代えたいと思います。

村谷三枝子。昭和24年生れ。劇団歴3年半
身長一米六二。独身！愛称「村ちゃん」。

司会 早速ですが、始めて会った時、どんな
印象でしたか？

岡田 劇団に対して、変った考えを持つちよ
ったね。皆は働らきながらやってるが、私
は仕事をしないで、劇団一本でやりたい。

加藤 第一印象は引っ込み思案のような気が
したが、入団したとたん、チャ目気のある

活発な女性と思った。だけどその反面、何
か影をもった人のような気もしたの—

山田 すごくおとなしそうだけど、黙って地
道に努力する人だなと感じた。舞台の袖で
一生懸命練習していたのを思い出します。

司会 演劇に対する見方は、当時より変って
来たと思いますか。

岡田 やっぱり働きながらやる事が如何に大
事かということが始めの言葉とは変ったね
山田 働きながらやっても、甘いものだけ

司会 最後に、これから彼女にどういうこと
を望みますか。

山田 演技の面からいうと、最初の頃よりも
随分、変わって来ている。個人の巾の広さ
がやはり最近の役作りに表われている様に
思う。

岡田 まだ若いし、これから、女性の中心と
なってやっていってほしい。

加藤 彼女には、若い人と古い人とのパイプ
役になってもらいたいね。

大迫 たしかに今の劇団のチューターとして
活躍しているけど、若い人と古い人との隔
たりは年々ふえていくと思う。本人もその
事は経験して来た。だからパイプ役になる
だけでなく、次のパイプ役を育てる様に努
力してほしい。（ここで浜田氏登場）

司会 今、ひょっこり、劇団の中で一番の年
長者である浜田さんが来られましたので、
村ちゃんについて、どうぞ一言。

浜田 彼女は非常に感がいいし、ねばり強い
これは劇団にとっては貴重な存在ですが、
もう少し、創造面における大胆さを出して
欲しい。

大迫 体を大切に酒を余り飲まない様に
してもらいたいな。

山田 西リ演でも、のんだくれの女房ってあ
だ名をつけられて帰ったそうですよ。

（ここで村ちゃん登場）

司会 理想の男性像を一言お願いします。

村谷 性格からいうとやはり抱擁力のある人
司会 ただそれだけですか。

村谷 外見はないが、やはりいっしょに演劇
をやれる人がいいですね。（註。若者座に
はすでに四組のカップルが有り、二世はた
だ今、四人半）

司会 貴女は何に対して、あまりに慎重す
ぎるのではないですか。

村谷 ハイ、でも小さな事は全て一人で解決
したいし、最近はなるべく相談したりする
様には心がけていますけど、でもやはり明
るい気持で皆んなに接したいですから。

司会 では、これから先も長くやっていくと
いう願望はあるのですか。

村谷 ハイ。最近特にそう思う様になりました
た。というより、ただ、今の劇団を自分が
少しでも支えていかなければいけないので
はないだろうか、という責任感が先に立ち
ます。

司会 これから若者座を前進させる為にはど
うしたらよいと思いますか。

村谷 やはり去年の西リ演の参加がきっかけ
で、又今年事務局に選ばれてから非常にか
わりました。それと団員の気持をつかむ事
によって団を向上させる事につながるの
ではないかと思えます。

司会 では、ここでママさん団員の方にも一
言づつどうぞ。

岡田 彼女の、生き方に対する情熱に魅力が
ある。是は結婚しても変らないと思う。

加藤 村ちゃんほど小さな小さな事でも真剣だ
し、私達でさえ相談したくなるような雰囲気
気を持つている。

大迫 私達のカップルが必ずしも村ちゃんの
手本になっているかどうかは疑わしいが、
あまり結婚に対して、劇団の事のみ考えず
また、理想ばかりに走らないでほしいです
ね。幸せは、結局、本人が開拓していくも
のだと思えます。

司会、どうも有難うございました。（嗟哦ひろみ）

「停滞」を破る胎動がここに……

—— 東リ演総会 セミナールのまとめ ——

黒 沢 参 吉

東リ演の総会、セミナールがおわって旬日が過ぎると、どっと秋の気配がくる。二ヶタの人命を奪った(腹だたくも恒例の)台風何号とかのその余波の驟雨に窓をたたかれ、すでに部屋は寒い。

自然の炎暑と人間の熱気のムンムンするつぽで、語りあいたしかめあったのもろもろを大切にかかえて散っていった仲間たちをおもいうのも、急速な秋冷がよぶ感傷の故か。

—— 一かかえて帰った収穫で、一年間喰いつないでいくんだなあ——と、妙な感慨がおこる。とくに、北海道からはるばる来てくれた仲間へのそんな思いが強いのは、米の凶作をつたえるテレビ、新聞報道の印象とダブったせいらしい。

喰いつなぐかどうかは別として、しかし、八月の総会、セミナールを節にした考え方、活動のやり方が、身について私たちのものに

うではないかという方向で、問題が提起されさまざまの計画案もだされました。」

総会直前の運営委員会でもそうだったが、論議はこの停滞というおさえ方をめぐって出発した。

—— 議案には総括が欠けている。全体の劇団の具体的な活動状況をつかまず、一部の劇団の経験で停滞と判断している傾きがある。過去一年の活動の主要な側面は、停滞ではなく前進であり、それを洗いだして七〇年代のたかいたすすめる方針にするべきだ——という意見と、一個々の劇団のそれぞれの地域での活動の活発さを組織的な観点で評価するだけでなく、東リ演全体の創造水準、とくに創作劇の振わない現状など、明らかな停滞とおさえ、それをどう打破するか考えていきたい——という意見が、全体の討論をさそいだした。

それが主要な側面ではないが、停滞の現象はある。劇団によっては主要な側面になりかねない質と量で、たしかにそれはある。

しかし同時に、それに挑戦し停滞の打開を積極的にはかるエネルギーも、またある。代議員の多くの不服は、運動方針案が、そのエネルギーよりも停滞現象をおもくみていることにむけられたし、劇団ごとのエネルギーを

なったのは事実だ。かりに東リ演がなかったら、こんなことはおこらない。東日本三一もの劇団から、一七〇人ものロートル、若者と娘、母親(おまけに子どもまで!)が集まって、自然の炎暑と人間の熱気のムンムンするつぽで、語りあいたしかめあう、このよう

なことは、あたり前だがおこらない。—— 一年喰いつなぐに十分な収穫を、もって帰って来たかなあ。

そうおもわない訳にいかない。

※

第九回総会が、ここ数年の総会に比べて、格別活気にみちていたのはどうしてだろう。

セミのレクリエーションの中ひらいた、短い運営委員会で、セミに先だって二〇——二一日を総会にあてた、今度はじめての試みは成功だった、と話合われ、私ひとりの感想でないのでわかった。

ただしく吸いあげ、集中的に効果的にたたかう東リ演としての指針に煮つめえていないことにむけられた。

—— 東リ演は、われわれとまわりの劇団から導きの星といわれている——ある代表のこの発言に、笑いがおこった。テレビを含みながら、そうとも願く笑いだ。その中で——だから——とかれば言葉をついだ。——しっかりやってほしいんだ。

今年はじめから半年ちかい劇団総会をくぐって、観念的で不純な逸脱の方向を正し、劇団の第二の幕あきを迎えた青年劇場代表も、そのにがい経験にそって、今総会の補助報告である作問、こばやし、萩坂の三論文の内容の高さ、七〇演劇行動の今日にひきつぐ意義等を引例しつつ、東リ演の存在価値を訴えたが、熱っぽいその主張が私たち全体に沁みこんでうけいれられたところにも、運動の柱としての東リ演の、今日的な必要性を再確認するイキイキした意志が感じられた。

そして、二日間の討議のすえ、この討議の内容を反映させるため、方針——計画を書き改める、いわば異例の処置がきまっていた訳だが、そこには、多くの劇団が地域のたたかいの中で、殊に地方選挙——参院選挙の勝利——前進に

セミが終って、仲間が去って、ひき潮とりのこされたようなわびしさと疲れからはじまる例年とちがって、総会のけじめがついたところへ、西から東から、オッス、オッス、と仲間が増え、新しい活動の第一歩としてセミナールがはじまる。一足早くできていた代議員やオプザーバーの諸君も、セミが終れば仲間といっしょに帰路につける。合理的なこのやり方は、今後の定例になるだろう。

だが、総会に活気があったのは、単にそのためではないようだ。

運動方針案(第一次)のトップに、こう書いてある。

「本年度の第九回総会を準備するにあたって、中心的な討論の対象になったのは、この二、三年創造に組織に停滞傾向がみられること、当然それは東リ演の運動面にまで言及されて、何とかしてそのような現状を打開しよ

大きく励まされながら、停滞をひらく糸口を手にした明るさが、——東リ演、しっかりしろ——という形であらわれたといえる。

※

停滞はむしろ、東リ演を牽引する機関車——運営委員会・事務局にありはしなかったか。方針——計画を書き改める作業は、その反響からはじまりそうだが、殊に、(総会発言にもあった)東リ演結成を準備し、結成後は機関車の役割をになつてきた、はぐるま、演集静芸、京浜の四劇団がここ数年来、それぞれ内外の矛盾をかかえて創造普及活動のトップにたてなくなり、同時に東リ演役員でもある劇団指導者と劇団との間に、また劇団総ぐるみの四劇団同志の創造的連帯にも疎通を欠きそこから、かつての積極性にかわる運動の形骸化、マンネリ化をおこしてきたのは見逃せない。

そして一方で、現実認識と創造方法の転換をよびかける小林論文「複雑な状況と一五周年」の示唆、「七〇演劇行動」の全国統一実践をめぐり、さらに地方——参院選挙を軸に地域を変えるたたかひの渦中でたくましく成長した多くの劇団は、東リ演を従来の四劇団率引型から平等互惠、責任分担型の組織に変え

ることをぞみ、またそれに相応した力量をもつにいたつた。

その前提でいま、東リ演の指導性ももっとも期待されるのは次の三点だと思ふ。

(一) 創造活動をたしかめひろげるための運動の理論を、全体の実践―総括を集中するなかでつよめ、発展させること。

(二) 創作戯曲を生みだすこと、その質をたかめることを、作者―劇団―東リ演が一体になつてとりくみ、保証すること。

(三) 東リ演の機関が劇団の実情を正しく具体的につかみ、その要求に基づく方針計画を必ずやりとげる体質をつくること。

これが総会の討議の要約であり、停滞マンネリ化を克服する不可欠の条件であり、従つて運動方針の柱になる。

活動計画は、(一)にそつていえば、劇団間の創造上の学びあいを部会、B活動、機関紙の中でどう保証するか。(二)では、作家会議の設置とその活動。(三)については、運営委員の任務設置、事務局の体制と機能の強化等で、従来に付加する仕事ももちろんあるがむしろ重点に、定めたことをやりきることにおきたい。しごくあたりまえのようだが、この辺が私たちの盲点だった。やりきれない方針―計

からだ。

それだけに、成功の意味はおもい。

第一会場―浜名郡新居町の青少年センターは、外観設備ともに立派であること、それが町立であることで、私たちがビックリさせた。地元劇団として受入れに万全を期してくれたからつかぜの熱意にこたえて、町長さんがとくに提供してくれたという。そういういきさつから、モデル上演の「獅子」は、町の人たちと肩を並べての観劇となり、まことに楽しい。

舞台は、この劇団そのものように若い。演技者の大半が現在の期生だとはあとで書いたのだが、この晴れがましい上演にかけた初々しい一図さが、もっと自由に発散していたら。一定のワタぐみをおいて、そこへしめこむ態の古い概念的な芝居づくりから、まず演出者自身が解放され、私たちの芝居、あたらしい芝居づくりをはかるところへ、私たちはきていよう。

このあと議長あいさつに次いで、井岡事務局員によつて(たのしい恒例の!)参加劇団の紹介が、はるばる来てくれたねざらいをこめて、北海道からはじまる。拍手。拍手。そして最後にとつておきの、東北は青森の劇団

面は、運動をストップさせるだけでなく、運動の精神を腐らせるから、こわい。

さて、改訂の運動方針と活動計画は、九月一日岐阜の四役会議で検討、若干の修正を加えて「東リ演ニュース」三八号に掲げ、一〇月初旬全劇団に郵送する。詳しくはそれによつてご承知いただきたいが、役員人事については副議長の複数化、事務局員の昇格、「演劇会議」編集部の参加などによつて、機関の基礎である運営委員会の強化ははかられた。

議長 ○黒沢参吉(京浜)

副議長 若尾正也(演集)

山崎欣太(静芸)

事務局員 ○こばやしひろし(はぐるま)

鈴木喜三夫(北海道Bさっぽろ)

作間雄二(東北B・弘演研)

○塚越松雄(関東B・埼芸)

梅津幸三(甲信越B・やまなみ)

深沢大助(東海B・からつかぜ)

谷辺康浩(中部B・名芸)

後藤陽吉(専門G・青年劇場)

○萩坂桃彦(演劇会議編集部)

島源三(事務局・はぐるま)

西撰太(〃・静芸)

細田寿郎(〃・京浜)

(〇印は「演劇会議」編集委員)

ここでぜひ書いておきたいのは、創立以来事務局を担当してこられた山崎さんと井岡栄二君の長いご苦勞のことだ。欣太さんには引き続き副委員長として活躍して頂くが、井岡君は劇団と職場へ活動のウエイトを移す必要からの辞任を認めざるをえなかった。年々大きくなるセミナー、苦しいやりくり財政、まめにだした続けた東リ演ニュース、どれひとつ、かれの稼の下の方にたよらぬものはなかった。八月三日、男子誕生のよろこびをえたことだが、今後いっそうのご多幸をいのり、八年にわたるご尽力に感謝したい。

※

ことしのセミナーが、ますます成功とおわつた今いえるようなものになるという確信は、正直なところもてなかった。

私と劇団というテーマは、それをきめた常任運営委員会のかなりつこんだ討議の所産だが、そのテーマを地方―参院選挙と創造課題を統一させてたかつている全劇団の要求と結びつける努力は、運営委員自体はげしい闘いの渦中にいたこともあつて、よびかけの時期、内容とも十分とはいえなかった



支木、東京は三多摩の民衆劇場がステージ前にならび、あらたな東リ演加盟劇団として紹介される。紅潮して決意をのべる六人の代表を喚声と長い拍手がつつむ。

第二会場の清風荘へバスで移動。なつかしい笛太鼓、器量いっばいのかからつかぜ歌舞班

のうたとおどりが、私たちが熱烈に迎える。わらび座がこの人々に教えたものが単なる技術でないことをみていて痛いほど感じる。

(例によつて)酒脱な秋さんの問題提起とリードで「獅子」の合評会。内容の問題として戦争そのものの把握、表現におけるリズムとテンポの課題。深沢君はじめ、からつかぜの諸君は全身耳になってきき入り、観たばかりの皆ももつと喋りたそう、だのにやつと嘸みあつたとたん、ちょうど時間となつてしまふ。それでも今までもつとも目的にかなつた、つまりモデル上演のモデルを今回につくられたといえそう。

そして最後は、これではなくてゼミの名に値いしない―とまでいわれる部屋別交流会。男は海に近い東部地区、女ははるか西部地区へといたん分けられたが、その不満はやがて、たとえば桐の間におしこめられた私たち八人のところへ、たんぼほの間の女性六人が訪ねてくるという、たいへん優雅な事務局の生活の知慧的配慮によつて解消し、各種飲料の消費量は払暁におよんだ交流のみのりのパロメーターとなつたととき。桐の間の男性はそろつてフェミニストであつたため、女性に必要な睡眠時間を保証したのであくまで

きくと書く)

閑話休題「ゼミ第二日午前の「私と劇団」を主題にした分代会は、乏しい四時間の枠内でどれだけ有効に話合いか、参加者全員の私と劇団の相関関係に新しいいきいきした循環がおこせるかが狙いだったから、チュータ諸氏のご苦勞は並々でなかったろう。

分代会は、劇団歴一〜三年、四〜七年、八年以上の三層を一二にわけてつくられた。チュータのまとめは現在半分の六篇が届いているが、全部揃ったらニュースを通じてでも発表したい。四日市の森君は第四班(一〜三年)の参加者が優等生なのかと疑問をおきながら、若い人々の劇団への積極的な対し方を、発言を例挙してのべているが、これはどの層にもほぼあてはまる。

生甲斐のある正しい生き方をまず劇団によって発見し、ついでその中で各種の矛盾にふかく悩みながら、しかも仲間との連帯をよりどころに劇団をつよめ、自身をも充実させたという切なる願望である。

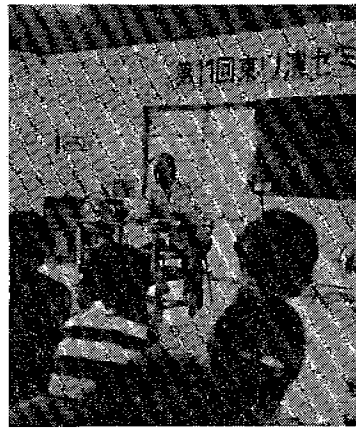
ただ、指導層、中堅、新人の三者には抽象的なコトバでかりに願望といっても、その内容に微妙なちがいがあがる。本来同一のものを求めながら齟齬している現実のもどかしさを組みいれられた弁天海水浴場でのレクリエーションが、文字どおり皆の裸の交流の仕上げになったこと、鬼の笑う来年は東京で、一つとびこした一九七四年は北海道でのゼミ開催をきめたこと、の二つをつけ加え、採択された決議を紹介してまとめよう。

第一一回東リ演ゼミナールは、三一の集団、一七〇人の仲間のもえあがる熱意をあつめて、今年も成功をかちとりました。私たちは同じこの日、広島でひらかれた西リ演ゼミナールが、これも大きい成果をおさめたであろうことを確信し、共通の目標をめざす兄弟のかたい連帯の握手をおくります。

私たちをとりまく情勢は、七〇年代に入っで厳しさと複雑さをいっそう増しています。最後までアメリカと大独占に奉仕し、戦争と反動化に活路をもとめる政府自民党の政策は国民の生活ばかりか、その生命すらむざむざに奪いつつあります。しかし、この中で国民のたたかいかいも発展し、とくに春の一連の選挙戦は革新勢力の大きい躍進を生んで、私たちに明るく壮大な展望を与えてくれました。

日米安保条約を破棄し、祖国の平和独立民主主義を要求する「七〇演劇行動」は、七〇

どこで切り結ばせるかといえは、それはやはり、舞台をつくる手づくりの共同の作業の中でしかあるまい。芝居への愛とは、しよせん作業をともしする仲間への愛だ。見方によれば、演劇というのはもっとも人間くさい、夾雑物の多い、めんどくさい芸術である。気に入らなくても、劇団集団がなければ芝居はできない、という自明のことが私たちにとって、負の論理なのか。それとも、ちょうど自分の顔かたちのように一生をともしする仲間と仕事か、ここを除いて他にない、そこに徹して、(キザっぽくいえば)私たちの愛をそだて、発酵させるのか。



このことと関連して、午後の三島雅夫さん年代をきりひらく私たちの運動のプロログでありました。そして今私たちは、この行動を地域でひきつぎ発展させる課題をもっています。創造の質をよりにたかめるといい、劇団の団結をよりにたかめるという、その必要性もこの課題にてらしてこそ、正しく認識できるものです。

今回のゼミナールでふかめあつた「私と劇団」の主題は、私たちひとりひとりが真に創造的で主体的な人間に変革すること、いうところの停滞をうちやぶり、十分腹にこたえしかも魅力あられる演劇を生んで国民の信頼にこたえる、そのための原点のたしかめでありました。この原点にたつて、経験ゆたかな古い仲間、情熱をたぎらせた若い仲間の、劇団を軸にしての創造的な団結―すぐれたアンサンブルをつくっていきましよう。

ここで学びあつたすべての仲間のエネルギーが全劇団のいきいきした活動を生み、その成果が第一二回ゼミナールの太い柱になるよう、この一年を励ましあつて進みましよう。

おわりに、このゼミナール成功のため大きい力になってくださった、講師の三島雅夫先生、受入れの劇団からつかぜの皆さん、また事務局担当の皆さんに心からお礼を申しあげます。本当にありがとうございます！

一九七一年八月二日・浜松

東日本リアリズム演劇会議

の講演は腹にこたえた。

俳優であること、組織人であること、そして(自由な!)人間であること。そのみごとに統一体などと書いたら、お叱りをうけそうだが、その統一へむけて目下只今も歩きつづけるたしかさが、ヒシヒシ伝わってくる。

芝居との出あい、築地のこと、土方先生のこと、歴史をみとおした目に加えられた(今も復活を窺っている)あいつらの弾圧、戦前から戦後へ辛じてひきつがれた琴線のような「新劇」のたましい。若い人たちが、よく笑う。私も欣太さんも頬をピクつかせて泣いてるというのに。たしかに、笑っていいことなのだ。でも、その笑っていいことのために、どんな沢山のからい涙が流されたか。

辛じてひきつがれた琴線のような「新劇」のたましいを、純潔な自分のたましいに重ねて、孫悟空の分身のように全国へちらばっていく一七〇人の仲間。その明るい顔へ、三島さんの結びのことはがずつしりとどく。

―あなたの方の中から、本当に人生を感動させ世の中を変える力になる新しい芝居が生まれる、ぼくはそう確信しますよ。

※

紙数も尽きた。今年はじめでプログラムに

待望の……

「演劇会議」の別冊(2)の予告

本年度の東西リ演の総会では、ひとしお創作劇への渴望が問題の焦点となりました。70演劇行動作品集の別冊(1)に統括して是非とも第二の戯曲集という声か、広汎に起きています。

なんとかこの要求にこたえたいという編集部が、どうやら、やっと、実現の朗報としてお伝えできそうです。

こんどの企画は、東西リ演作家作品シリーズの第一弾ということになると思いますが、活を入れる意味もあつて、ほぼ現役の「書かねばならぬ作家」に白羽の矢をたてました。快諾、内諾、しぶしぶ、いろいろですが、ほぼ、次の執筆陣が確定しました。

黒沢 参吉 小林ひろし 作間 雄二
小島 真木 栗木 英章 土屋 清
和田 澄子

目下12月中旬の刊行を目標に準備をすすめてます。いづれ具体化次第ご案内しますどうぞ、ご期待下さい。 (編集委員会)

健在なり東リ演

— または、書けないことはいいことだ —

谷 辺 康 浩

(劇団 名芸)

今年も東リ演の総会とゼミナールが、やってきて、去った。どうも、年中行事の感がないでもない。というのは、参加するまでのこと。参加して、討論に加わるにつれて、さめた気持ちに熱が帯びてくるから不思議である。

そんな気持ちになっていくとき、東リ演運動は、創造的にも、組織的にも、停滞しているなど、総会の議案書にいわれて、ハッソとする。発展だ、成功だといわれるより、説得力があるからだ。成功だ、発展だ、ノン気にかまえないから、「健在なり東リ演」と、うれしくなる。うれしくなった気持ちで、まてよ、と考える。なるほど、停滞感はある。あるけれども、どんな組織的停滞なのか、どんな創造的停滞なのか、ハッキリしてこない。それは、個々の劇団によって、かかえていく問題がちがいが、停滞感の質と度合に差があるという、劇団の不均衡発展のあたりに由来しているそうである。それから、総会としての

東リ演の現状認識と、個々の劇団の現状とが必ずしも、すっきりと、最大公約数的に、あるいは、本質的に結びつかないところがあるのだろうか、と思われる。

70演劇行動のような共通の課題がとりくまれたり、評価の高い創作劇が生まれたりすると(創作劇は印刷されて、各劇団にゆきわたるから)、東リ演の総体が、具体的に、イメージ化されて、ハッキリしてくる。しかし、それがないと、東リ演がどこにあるのかかわらなくなると、停滞感が出てくるのではないのか。東リ演が、一つの組織、運動体であることは、自明としても、それを構成する、個々の劇団の停滞感と、発展の芽が、もつとつと、集約されていいし、それが一つの組織としての東リ演の総体を形づくるものとして自覚されよう。これらが、東リ演指導部と個々の劇団双方の責任においてなされるべきことは云うまでもない。

総会に参加して

太 田 明 子

(劇団 さっぽろ)

総会とゼミが、三日目で終わった時は、「助かった」と思いました。もう一日続いたらダウンしたかもしれないと思います。体の調子が良くなかったからか、旅の疲れがあるのか、その上に寝不足となれない暑さ(少なくとも札幌とは十度以上のちがいはあると思います)それに初めての参加で、少し欲張りすぎたのかとも思いましたが、でもほかの方々は、けっこう元気な所をみると「年のせい」などと云うと笑われるでしょうし、あまりくたびれた事は言いたくないのですが、でも正直なところ、くたびれました。

総会の中で出された三つの報告は、帰ってからも何回か読み返しています。しかし、残念な事は、この報告が総会の前に各劇団へおりにていかなかった事です。作間さんの報告は、事前の演劇会議に載っていましたが、これらの報告は、三つをそろえて考える所に一つの意味もあるのではないかと思いますし、方針

名古屋から浜松へ車を走らせながら、総会とゼミへどんな問題意識をもって参加するか話し合ってみた。僕は、東リ演の代表的な作家が、なぜ書けないのか、又は、なぜ書けないかといわれているか、そのあたりを知りたかった。この点についての、先輩たちの討論をきき、それに参加しかったのである。

もしも、この討論が、単なる現状認識にとどまらず、私達のリアリズムを洗いなおし、現代が要求する創造方法をつくりだすものになるなら、「書けないことはいいことだ」と思ったからである。作間氏や萩坂氏の論文を討論の中で深めることは、不発だった。時間が少なすぎるのである。ともあれ、書けないことが、作家とその集団、ひいては、東リ演全体にとつて、小林氏の問題提起のような鋭い、現状認識への問題意識となり、それにとどまらず、私達のリアリズムを、現代の観客に鋭くくひ込みうるものにしてゆく、討論と実験の契機になるなら、「書けないことはいいこと」になるだろうと思う。

ゼミ初日の交流会での、指導部ではない人々との討論は、彼等に停滞感はないということ、したがって改めて東リ演の健在さを教えてくれた。

団のフットウの中から、東リ演に対する要求をひっさげて来なくてはなりません。

それが活動計画に結びついた時、初めて生き生きとした魅力的な活動計画になるのではないでしょう。

一年間の活動計画を立てる総会の当日において、この様な報告を、パンノと並べて、現状は停滞だと云うのでは、何だか、いなおられた様な感じがしなくてもありません。

劇団の中に、大きな問題をかかえ、ぎりぎりの所で、集団を、個人を、創造を考えざるをえない状態の中で、役員の方々や、萩坂さんや、報告を書いて下さった方々の、さまざまに困難を考えながらも、あえて、きまきりきった様な事を書きました。それ以外に、東リ演の、いや自分の集団の突破口がないのではないかと思うからです。

最後にお願ひがあります。静芸の山崎さんの話を、分科会で少し聞かせてもらいましたが、方針案の中にある「たかかうにふさわしいアンサンブル」を勝ち取った、又は勝ち取ろうとした体験として、「克服した仲間達の典型」を集団の財産にするために、山崎さんの体験を何らかの形で伝えていただきたいと思ひます。

東り演総会の感想

石川 ひさし

(劇団からっかぜ)

今年の総会は、創造と組織の側面から、この二、三年の運動の反省と、打開の方向をさぐるという立場から、こぼやし、萩坂、作間の三氏の報告で始まりました。報告で提起された課題は、私たちが当面する諸課題を打破して行く上で、また地域に責任を負う創造集団としての姿勢を問いたす上で意味深く受けとることが出来ました。

今度の総会を振り返ってみて思うことは、総会の主要な課題が方針案にも盛り込まれた通り創造の停滞をどう打ち破るか、という点に主にしぼられたため、私は、そうした問題の進め方では東り演運動の評価が一面的になり、「創作が生れていない」から停滞だということになりかねない危険があったように思われます。たしかに秀れた創作戯曲を生み出すことは、私たちの演劇運動を進展させる柱として重要な課題には違いないとせし、東り演のトップ級の作家の創作上つきあっている

壁、それに続く作家たちの不振など、「作家の個人的問題としては看過できず、東り演全体の問題ではないか」という萩坂さんの意見に頷けます。萩坂さんの、ここ三、四年間の上演レバ概括での、五つに分類されるレバトリの傾向の指摘は、それ自体としては当たっているように思います。今日の私たちをとりまく情勢は日々刻々変動し発展しており、この変動と発展にこたえ得る創造姿勢の確立の不十分さ、創造内容として、それにこたえ得る創作が生れていない現実など、たしかに創造上の停滞とか、混沌とかいわれる要素はあります。

私たちは、地域の働く人々の生活と斗い、要求に学んで創造のエネルギーを生み出すことをして行かねばならないことを繰り返し強調して来ました。ところが、いざ創作劇を生むということになると、一年、二年の演劇活動の経験ではなかなか生れてこないし、上演

にたえ得る作品を生み出すなどということには、それこそ望むほろが無理です。一方五年以上の活動経歴を持つ人は、大体が劇団の中でも中心的な働き手であり、劇団経営においても、創造面においても、複雑で多様な任務を受持つており、気持はあっても中々足が前に出ません。停滞を強調する前に、各集団の持つている、たとえ些細な問題でも、それを共通の課題とし、そこから展望を拓いて行くような討議が欲しかったのではないかと、思われるのです。運動方針案では「東り演の場合、作家は劇団活動の中から生れ育って来たことに特徴がある。地域の働く人々を源泉に創作と普及の汗の中から、切実な要求をくみとるエネルギーとなつて作品は生れ、上演され影響をあたえて来た。」「東り演内で新しい作家を養成する場合も、劇団の創造普及活動の渦の中で、作家たちが発酵して行く姿勢を主体的につくりあげてもらう援助が大切である。カンパニア、小形式の構成をつみ重ねることで、その人に書手として、手なれてもらう……」と述べられています。この点での深めが必要だったように思います。

各集団の具体的な活動の中からの議論の不十分さが、萩坂さんの言っている「創造にお

■ 感想

ゼミナールに参加して

からっかぜ 坂田 真生

東り演ゼミの参加は二回目。今回は私たちの地元で開くことになり、ゼミの準備、モデル上演などにとりくみました。

私は事務局の仕事を受けましたので、残念ながら、多くの仲間と語り合い、交流を深めることは不十分でしたが、ゼミを成功させるためには、どんなに大へんかがよくわかりました。

昨年の大津での東西合同のゼミの時、少ない事務局の人たちが、夜も寝ずにがんばっていたことが、思い出されました。

今回も、分科会の分け分け、ニュースの発行など、不自由な時間の中でしたが、充分な話し合いと有意義な交流がもたれるための分科会の組み分けには苦心しました。

互いに名前も、顔も知らなかった仲間たちが、自分たちの取組んでいる活動について、

生き生きと話し合ったこと、この年一回のゼミナールが、私にとって何だったのか、事務局の仕事の中で、ほんとうに肌を通して感じられたように思います。

演劇を続けることの困難さ、大変さを感じながら、それでも、からっかぜで三年目になった私、気持だけは不動のつもりですが、東り演の仲間たちと話し合ったことが、これからの浜松での活動の中で生きると思っています。自分が何をやりたいのか、自分の未来をどう位置づけ、具体的に演劇活動の中でどう展開させてゆくのか。一つ一つの具体的な日常活動、観客との接点の中で身につけていかなければならないことが、今度のゼミナールで教えられたと思います。

劇団支木 藤原 浩平

青森から浜名湖までの距離は、私にとってたいぎなものではなかった。汽車の中、顔も名前も知らない人達ばかりなのだけれど、久しぶりの友達に会うときのように、心は、はずんでいた。それは、幕が開く前から、「よかった。よかったな。」と、一番前の席で云い合っている地方公演での「コマに似ていた。まして、東り演に加盟することを劇団の

ける地域劇団の責任と確信をもう一度詰め直すこと——地域劇団としての明確な創造姿勢の確立」ということが、具体性を持って明らかにされなかったことに繋がるようです。例年、総会での討議より、それを終えての交流会で生き生きとした話がとび出し、お互い面白い合いものを覚える訳ですし、楽しみの一つでもあります。こういうスタイルの定着はあまり芳しいことではないように思います。交流会で語られるような具体的な内容が、本来は総会の席上で語られなければいけない、ということを感じます。それぞれ二日酔するほどの純情さは持ち合せてはいないし、深夜までの水入り討議によって総会に支障を来たすようなことはありませんので、そのことに分別良くケチをつける気持はありません。また総会は、時間内で決めることは決めなければなりません。議長団の大変さも分っているつもりです。

来年は、私たち自身、もっと具体的に、しかも建設的に総会に加って行けるよう、反省をこめて記します。

中で確認し合い、「まだ入らないの?」「何をしてるの?」と会う人ごとに云われる肩身のせまい思いをしなくてもいいということだけでもそうだった。普通なら気になって眠れない夜行のゴトンゴトンという響きだが、快よいリズムで子守歌をうたってくれたのだから——ブラックニッカを一本空にしたせいかもしれないけれど——。

三島さんの講演もよかった。帰ってから、テープを何回聞いてもやっぱりいい。でも、私にとって、一番印象に残っていることは、夜の部屋別交流会のことだ。はじめは、モサモサ、話題がとぎれがちでバツとしなかったけれど、そこはそれ、栓が抜かれ、まわるものが体の中を走りまわると、出てきた出てきた。「ところで、働きながら芝居をやるということはどんなことなんだろう」「労働感覚を持ってないようになっていって、労働感がないから芝居をやる」ということは。たしかに、私にとって、わかっているようでいて、はつきりそれは未整理の問題だった。何かあると、「働く者の」とか云って、安心しているところはよくあるし、この現実を変えられないと云われると、居ても立ってもいられない気持ちで、「そうだ」と思っていたし。

し合いたかったのですが、分散会の時間が短かった事や、今皆んなが、抱えている問題と、かみ合わなかった為か、何もつかめず終わった事が非常に残念でした。

ゼミに参加する前の期待が大きかったせいか、あまり感激はしませんでした。各地から集まった仲間と接して、改めて自分と劇団とを一步離れて見つめられ、増々演劇への意欲がわいて来て、ゼミに参加しとても有意義だったと思います。

劇団協同 香月 良

東京三多摩から車で、約七時間、早く、ゼミ第一日目の、からっかぜの公演を見ようと心はあせるが、いっこうに着かない。やっと八時すぎになって到着。受付をすませて観劇しました。

浜松のからっかぜの仲間たち、よくやっているな!と思った。ただ私が感じたことは、やはり全体としてテンポがおそいことと、装置のカガミはつけた方がよいと思えたこと、また役者が奥へ入って出てくるのが不自然だと思った。途中から見たので、筋の方は、あまりわからないままでした。でもあとでおじいさんをやった人が若いにはお

この現実の矛盾を変えるのは、政治活動がスレートに結びつくはずだし、演劇はそうはいかない。私たちは、なんで、苦勞しながら演劇をやっているのか——。

やっぱりそこところがしつかりつかめないと、劇団から、組合活動やなんかで抜けていく者にとつても、残って演劇を続けていく者にとつても、お互いの分野に責任を持つことにはならないのではなかつたかと思つた。

交流会の中でも結論は出なかつたし、残念。帰りの汽車の中でも考えた。今も考えている。

運動をすすめるカギは、やっぱりそれではないのか、劇団支木にとつても。今も考えている。これからも、公演をくぐる中でも、やっぱり、それは、考えていかなくちや。

脚本がなかなか決まらず数ヶ月を脚本選定に費してしまつた今、支木にとつて今何が必要なのか——。

劇団新芸 秋沢このみ

今回初めてゼミに参加しました。集まった仲間の中に若い人達はもちろんの事演劇歴二〇年以上という、おじさま達も沢山参加してびびくりしました。

どろきました。

第二日目では学ぶところが多く、稽古場建設での京浜協同劇団の体験にふれて、自分たちの要求と未来にかけて、よしやるぞというファイトが新しくわいて来ました。

部屋別懇談会では、私の組では、主に四年ぐらいの人が多く、それぞれ劇団の中での堅い役割の人で、そうした立場での悩み、古い人をハッパをかけて、どんどん若い人を育てていくのがなかなか出来ないなど、また働きのながらの演劇が、結婚やいろんなことのある中でつづけてゆくことのむつかしさ——しかしつづけていかなければならない大切さが、ひしひしと感じられました。

実行委員の皆さん、ご苦勞さまでした。

★編集部より

このほかに、民衆劇場、岡崎演劇集団が予定されていましたが、送稿の協力が得られませんでした。企画の不備をお詫びいたします。

私は総会から参加しましたが、討論の中からも、先輩達の多くの積み上げられた貴重な経験がじかに伝わって来る思いがしつぱ倒されてしまいました。私は劇団ではや新人の方ですが会場で各地から集まった仲間と交流する毎に、劇団での自分の姿勢の甘さが、つくづく反省させられ、又それと同時に私だつて劇団を支えている一人なんだという新たな自信がわいてきました。

分散会では「私と劇団」というテーマで話し合われましたが各劇団の状況報告から話しがあまり発展せず、折角、良いテーマと思つて期待していたのですが、深く話しが煮つまらなまま終つてしまつたので大変残念です。

普段、働きながら芝居をやつて行く事に、いろいろ疑問を持っています。

いくらプロとちがつて、本当に大衆に根ざして働きながら芝居をやっているんだとしても、芝居の為職業を幾つも変えたり、単なる経済的なもので片付けている人が多くいる中で、どうしてアマチュア劇団の意図する良い芝居が作れるのだろう。これではプロの劇団と、ちつとも変わりないのではないのか? この様な私の疑問も、ゼミで仲間と一語に話

☆学習テキストの伴侶(予約受付中)

大橋喜一 リアリズムに ついてのノート

—西リ演劇学校講演要旨—

十一月中旬頃発行

内容

- (一)「テーマの精練」ということ
- (二)作劇は観客の意識との闘いである
- (三)勉強は比重しく
- (四)リアリズムについてのノート

久保栄とマルクス・エンゲルスの芸術論 唯物弁証法の創造方法から社会主義リアリズムへ アイデアリアリズムとリアリズム 社会主義リアリズムに就て テーマと形象「典型的な境遇における典型的性格」の問題 久保栄のリアリズムをどう高めてゆくか

発行 西リ演劇中国プロダクション制作学校 運営委員会

頒価 二〇〇円(送料三五円)

申込 前金で左記へ

広島市八丁堀二一四三 広島地裁内

全司法労組書記局 沖 信子

第十回西リ演総会を終えて

猿 渡 公 一
(福岡現代劇場)

西日本リアリズム演劇会議は、第十回総会を、八月二十二日、二十三日の両日、広島県湯来温泉の湯来ロッジで開催しました。

昨年の第九回総会は「70演劇行動」を「東リ演」の仲間たちと共にやりあげ、全国から五八集団、三一七名が参加した東・西リ演合同ゼミナールを成功裡に終了した直後開催された総会でしたが、今年度の総会は、春の統一地方選挙、参議院議員選挙の二大選挙を闘い、それぞれの加盟劇団が、そのなかでの新しい展望と矛盾をかかえて参加したところにその特色がありました。

総会にさきだつて、八月二十一日、二十二日には、西リ演演劇ゼミナールが、一二六名の参加者で開催されましたが、このゼミナールのテーマが「地域に責任をもてる劇団をつくるために」ということであつたのでゼミナールの討議は当然総会に引き継がれました。

出す源泉があります。「地域の人たちに責任を持つ」という私たちの視点もここにあります。私たちは第十回総会のなかで、新しい「創作活動」「創造活動」は、強固な「創造思想」を支えられた集団によつて始めて可能であることを確認しました。

私たちは、さらに具体的な創造的力量を培うために、各ゼミナール、研究会の質的な充実をはかり、組織運営においてもブロック活動を重点に、運営委員会の責任を明確にしながら、有効な運動の展開を図り、体制側の進める、文化イデオロギー攻撃に対し、国民の文化要求を労働者階級の観点からくみとり、運動を展開していくようではありませんか。

- ① 状況を確認し、観客に創造者としての責任を果せる集団にきたえよう。
- ② ブロック活動こそ、運動の生命である。連帯を強め、組織を拡大し、西リ演の思想を広め、強化し、地域の文化、民主的諸組織との統一行動を発展させよう。
- ③ 「演劇会議」の普及と発展をめざし、私

二日間の討議で「西リ演」は次のような活動方針を決定しました。

一 今年度の活動方針

私たちは、第十回総会において、昨年度の活動方針、その中でも「地域の観客に責任をもつ集団づくり」地域における共同活動（ブロック活動）― についての経験交流の中から特に「今日の状況をどうとらえるか」「創作活動について」の論議を交しました。

私たちは、これらの論議を通じて、私たちの「創造思想を高めること」がきわめて重要な時期にきていることを確認しました。

今日、日米独占資本を核にその支配体制間の矛盾と対立は国際的な資本主義の危機となつて現われ、国内的にも自民党政府の独占資本擁護の政策は、必然的に国民のくらしと諸権利の破壊をますます強め、国民の怒りの前にきわめて明瞭な形でその反動性を露呈しつ

たちの強力な武器としての活用を進めよう。

- ④ 「東リ演」との連帯を強め、全国的な「リアリズム演劇」の運動と展望を開こう。
- ⑤ 「運営委員会」「事務局」へのよっかかりをやめ、集団指導の体制をつよめよう。

一九七一年八月二十三日

二 活動方針を具体化する体制

昨年度の体制の弱点はなによりも事務局体制にあつたという反省の上に立って「西リ演」の運動を具体的に進める体制を次のように決定しました。ブロック活動に運営委員劇団が責任を持ち、仕事を分担して「西リ演」の運動を進めていくことと「演劇会議」を真にわれわれ自身の機関誌とするための運営委員会の責任が確認されました。

- 議長 長 仲 武司 (関 芸)
- 副議長 土屋 清 (月 曜 会)
- 事務局長 森本 景文 (劇団未来)
- 運営委員劇団 関西芸術座 (大 阪)

つあります。さらに、階級的対立の自覚と激化は、さきの二つの選挙においても佐藤自民党からの国民の離反、革新政党の躍進となつて現われています。

京都につづく、東京、大阪における革新首長の誕生、その他多くの自治体での革新首長と民主勢力の進出は、新しい日本、民主政権への道筋を具体的にさし示す状況を生み出しました。

しかし、これらの状況に対し、独占資本を中心とした体制側は、危機感をもつて彼等なりに弱点を自覚し、企業、地域、自治体と広範な体制を駆使しながら、政治的、経済的、思想的支配体制の再編成を図ろうとしています。そして脱政治という状況をさらに進めて新たな帝国主義、軍国主義の復活を許し助長する方向に国民を組織することをめざして狂奔しています。

今日、体制側の諸政策が国民の諸要求と鋭く対立する状況にあることを私たちは確認しました。まさに状況は一つの勝負どころにきたといえます。

西リ演の運動が、この対決点を鋭くみつめる中にこそ、より深い、より広い創造を生み

- 劇団未来 (大 阪)
- 劇団いこら (和 歌 山)
- 劇団四紀会 (兵 庫)
- 劇団月曜会 (大 阪)
- 福岡現代劇場 (福 岡)
- 「演劇会議」編集委員
- 新木 祥之
- 藤沢 薫
- 栗原 省
- 猿 渡 公 一

三 総会でのいくつかの討論について

① われわれをとりまく状況について 各地の加盟劇団の報告は「未来」「息吹」等に代表されるように統一地方選挙と参議院選挙を劇団毎にはげしく闘った報告が多く、そのなかで、新しい時代への展望の道すじをより明確にしていることが特徴的でした。選挙戦のなかで地域の住民のなかに、小型形式の作品をもつて深く広くはいり込むなかでこの確信は一層強められています。

同時に最近の体制側の攻撃の巧妙さと根深かさについても各地の劇団から報告がなされました。ナチスと同様にストライキ切くずしのため暴力団の組員を正規の社員としてやと

いれて恐怖をおおる北九州のタクシー会社、人間の回復をスローガンとした会社のQCサークルのなかで巧みに労働者を会社のペースに組織する神戸の大会社、文化庁移動芸術祭を軸とした与える文化と地方自治体の芸術団体丸がえの政策等が具体的に明らかにされました。

② 創作活動について

「未来」からわれわれの劇団は、はじめから完成した形の創作劇を持つことはなかなか困難ではないか。いまだのような観点でどのような芝居をしたいというところで劇団全体が燃え、それが作者をばげましていくという形でない創作劇は生れないのではないか、その創造活動のなかで創作劇はねりあげていくべきでないかということが劇団の経験を通して提起されました。

「月曜会」の土屋氏からは、現在重要な問題は数多くあるのに、劇団は現実の世界のそのことをぬきにして//いい作品はないか//と探している。劇団がこの問題をいまこそとりあげてやりたいのだと燃えなければ、作家も書けないのではないかと発言があり、四紀会からは、ともすれば名作路線を歩むが、劇団が、作者の第一稿を完成度のみを問題にし

て、書こうとする内容について本気で問題にしない態度からは創作劇は生まれないのではないか。しかし、同時に素材で感動しても、本で感動しないことはあり得るのだと問題提起がなされました。

このような問題提起のなから、作者だけがなぜ完成していなければならないのか、劇団と素材の対しかたはどうあるべきなのかという点でまず議論が展開されました。このことは、創作活動を創造の問題、自分自身の問題として全参加者が捉えるに適當な討議になりました。

近代以降の演劇のありかたのなかで、俳優は受身となり、本をもらって演ずるといった状態で、現実の社会、歴史に対決しないで、現実への態度がとぎすまされていらないのではなか、安易に現象的素材にとびつくようなすなわち劇団が創造的にとぎすまされていない状態では本当の意味での創作活動も展開されないのではないかという発言もなされ、作者と劇団の関係についても、単に劇団が上演を前提とするというようなことではなく劇団と作者の関係(それはいろんな形態があり得る)が密接であれば、作者は創作活動を展開できる。作者はその創造的信頼関係のなかで

燃えるのだ。作者にしても、作品にしても個性的なものではないのかと、少しずつ問題は深められていきました。

このような討議のなかで、創造者としての自己変革の課題と状況をどう変えていくかという課題をどう押えるのかということが問題にされ、これは運動の地域的独自性と普遍性の関連としても、つまり、自己の内部での斗争(単的に感情、感覚と言ってよいのか)と斗いの展望との矛盾、劇団の発展と自己の発展とがどう結びつくのかといった形で問題は提起されました。

われわれ自身の力をどう強めるのか、われわれ自身をどう高めていくのか、そのこととわれわれの運動をどう掲げ、どう高めるのかということはまさしく同一の問題であります。そのことは、「われわれは民主運動のなかにべったりであってよいのだ」という意見と「われわれは民主運動にべったりの弱さのなかで創造的でなくなりつつある」という意見が同じ問題なのだということの確認のなかで、まさに今後のわれわれの問題として残されたのではなからうかと思われまます。

71西り演ゼミナールめも

佐々木 従

(劇団 京芸)

① 悪戦苦闘ということ

前回のゼミナールとそれにひき続く総会では劇団いこらと劇団未来を筆頭にして創作活動の成果が交流された。それに、あのゼミナールは東・西り演が一堂に会する場であり、日本縦断70演劇行動の実績を交流しあう場であった。七〇年代の初頭、安保条約の廃棄通告をする政府の樹立を日程にあげた闘いの、演劇戦線での統一行動がともかくにもそこにはあったのである。

今回はどうか。

ゼミナールのスローガンは「楽しくリラックサして知りあい学びあおう」ということであつた。これは何も西り演がはじめて単独で取組むゼミナールだから「まずは気楽に交流しあいましょうや、そこから目途もつかめるだろう」などという意味合いではないだろう。七〇年代を闘い残る演劇の使命は何かを「学びあおう」というわけに違いない。

というような眼で、ゼミナールを振り返ると、西り演加盟の各劇団、サークルが痛々しい程悪戦苦闘している、という感じが強い。正面切って「これこれの成果が」と出てこない。当ゼミナールの8/22付のアピールも

『米年のゼミナールには、さらにたくましい劇団に、そしてその一員となつてあらわれることを、今日私たちは誓ひあつたのです』という。お互いの今後の悪戦苦闘の覚悟の程を確かめあい、前進を誓つた。そういう処に今回の71西り演ゼミナールはあつた。

その事を総会の内容に幾分ひっかかりながらみていくと――

福岡現代劇場は一年間の開店休業の後「女の長英」構成詩「生と死」1970「人斬り以蔵」「ベルナルダ・アルバの家」「スカパンの悪だくみ」を小劇場シリーズと銘打って三ヶ月に一度の割合で追求して来た。驚嘆と同時にその疲れの程をひしひしと感じ

る。酷薄な条件を乗り切ろうとし、果敢事蓮の敗北を経た今、『劇団の力不足が痛感され、新しい前進のため劇団活動の総点検、劇団の未来像の確立のための努力を続けていきます。』(活動報告)という。

関芸は従来の給料制を改廃し、いわゆる出演料制に舵をとり直した。ジャーナリズムの書きたてる解散や崩壊の危惧は問題外としても質的な変化の過程での相当の苦難が予測される中で、今、創作劇「てのひらの詩」の公演にかかっている。

地元広島島の月曜会は劇団いこらの「のんだくれ」を単に借り物ではなく創作の全体験を教訓にして取り組み、6ステージで一五〇〇名動員し、この後、出演依頼が来ている。しかし、土屋さんは「何で本だけが完全でなくてはならんのか」と座付作者の立場から、劇団の創作活動のあり方に多少の憤懣を交えて問題提起した。

演劇集団「息吹」は劇場公演、小型形式と文工隊の二本足の活動を原則としながらも、府知事選の輝やかしい勝利と裏腹に数名の退団者を出した。「息吹」の劇団報告にもいうように「二大選挙は国の進むべき二つの道の闘いであつたが、私たちにとつても劇団の針

路を決める闘いになったといえようか」というところで、『劇団の伝統の』徹底した総括をしようとしている。』それに付いても、活動報告に立った日さんの元気のよい発言、なかでも「二本足の活動を原則とした劇団の路線は正しいと確信しています。」と断言した姿が印象的であった。そこから「息吹は前進していく」とも感じられるし（事実、民謡の振り起しや大和川つけかえ工事を素材とした創作の準備がされている）、と同時にまた、劇団の十五年の伝統の『徹底した総括』がどこまでやり切れるか、一つの不安も感じた。

これら各劇団の悪戦苦闘ぶりは西リ演の劇団員の多くの中に——分散会のテーマの一つでもあるが——「自分にとって劇団とは」「演劇とは」「自分とは」という原点への問いかけがされていることと呼応している。またこの意識をこれからの各劇団の活動の中で一つの柱として追求していくか否かは劇団の存亡に関わってくるし、また、このことはアピールにいう「一日も早く、真に地域に責任をもてる劇団をつくりあげ」る内容と密接不可分な関係にあるのではないか、という思いに駆られる。

② セミナール風景

りモデルすぎて」という平直な意見が出て、みんなもどうやらそうらしい顔付であった。あとの交流会の中でモデル上演ちゅうのはちとおかしい言葉じゃね、という声も出ていた。小レバに一定の完成をみせたことで「ああいう風に自分たちもやれそうだ」という触発や刺激をうけた仲間もいた。劇団京芸は下村正夫脚色でチェホフの「悪党」。幕のところでできっかけ通り電動の綴帳がしまらずバブニング。つづいて劇団生活舞台のタカクラテル作「つるの巣ごもり」、舞台を鶴の如く縦横無尽に飛び交い音楽が織り込まれた構成。アンブがなく折角の音楽の効果が生かされなかったのが残念だったろうと思う。最後に峠三吉の「墓碑」という詩を関芸の榎本さんが朗読した。「斎美小学校戦災児童の霊」の墓碑に見立てた下手の白い箱型の装置に、西リ演議長仲さんがフォークスを合わしていたのは微笑ましい光景であった。これも、等しく十年選手の役者連が、揃って異常な緊張に見舞われ、岡目八目には相当な楽屋おちを楽ませてくれたことと思う。

「墓碑」の詩について感想をもとめられたオプザーヴァ参加の広島海田高校演劇部の女生徒が「浅い経験で芝居のことはよく判らな

西リ演の総会は、いつも劇団の頭株だけが中心に残り、拡大運営委員会じゃないか、とよく悪態をついていたが、東リ演の教訓に学んだセミナール形式の企画は、昨年の合同セミナールにつづいてみごとに実を結び、多くの未加盟劇団やオプザーヴァが参加し、汽車賃も馬鹿にならぬ当節、一、二六名もの民主的自主的演劇運動をやっている仲間が六名の劇団二世を引きつれて、水内川のほとり、湯の香ただよう国民宿舎湯来ロッヂに参集した。総会形式のみをとっていた一昨年までとは違い飛躍的な参加数だ。己むを得ず欠席した劇団と活動できていない劇団、計四集団以外は全部参加している。こういう状態にはやはり力を得るし、また、スケールの大きい全交流会は少くとも西日本規模で我が劇団と、劇団に於ける自分とを見直せる絶好の機会である。二日目の全体のまとめの場で十人の分散代表から述べられた卒直な感謝の中にも、その成果は感じられた。「劇団と自分との間に今まで距離があったが、みんなの明るさに打たれ、これからどうにかうまくやっつけていこう」という福演のKさんの感想、「自分にとって劇団とは何か、政治活動と劇団の関係について疑問があったが、これからは確信を

いが」と前置きして、「原爆はおとしはけないし、おとさせてはいけない、でも、それに対して何も出来ない自分に無力感を感じます。」と、さして能弁ではないが気負わず淡々として心情を吐露した。それを聞いて月曜会の一人名前は覚えないうい女の人が、あおむきかげんにした目に涙を光らせていて姿とが印象的だった。

蛇足乍ら、この高校生は第二分散会の報告者にさせられ、集った「御年輩のみなさん」の前むきの姿勢と若さを失なわぬ精神をたたえ、「おとなに絶望しかけていましたが、皆さんのような大人も居るのだと少しは希望がもてました」会場のみんなを爆笑させた。

京都文連会長の安永先生はセミナール二日目の午前の基調講演の中で、マスコミと教育の両面から現在の文化の特徴を明確にしつつ、特に教育の面では、池田・ロバートソンの会談から現在の中教審の答申に至る中で一貫して追求されている体制側の思想動員と軍国主義復活を支える精神文化がすでに弱年労働者の中に蓄積されている点を指摘された。戦後の読書サークル・生活記録・うたごえの、三つの日本の文化を支えて重要な役割を果してきた運動を挙げて、ついで、「日本国民

もって活動していく」という若者座のOさんの決意。「今まで何となく劇団について来た。自分より劇団歴の浅い人でも、自分より上を行って居るのでガンバラナクッチャ」という福岡現代劇場のFさんの発言などを聞くと、多くの仲間と出会える場を提供してくれるセミナール形式は是非とも必要だという気がしてくる。

劇団歴による分散会の構成の点もそうだが今日のセミナール事務局の企画の中にはいろいろ工夫があつて楽しかった。二日目、朝食後の散歩よろしくロッヂの車寄せ近く万博会場からこの湯来町に移構されたベトナム館の傍で、関芸の人から野口体操を指導してもらったり、大阪府知事選挙の副産物ですと披露された劇団未来の太鼓の熱のこもった打ち込みように感じ入ったりした。この太鼓を劇団いこらの仲間が是非自分達もやりたいと経験交流する話がまとまった由である。

何とも報告しにくいのが「モデル上演」である。上演が終った後二〇分程、合評の時間にもたれたが、寂として声がない。「セミニユース」には「自分のことはタナにあげてベテランをこきおろす時間」と書いてあるのだが——やっとして「プロだなあ……でも、余

の諸感情をよりよく表現でき、その中に国民が自分の問題を見出す国民演劇運動をおこす必要がある」と提案された。

③ 最後に

冒頭で今日のセミナールは悪戦苦闘の態と書いたが、そこには何があったのだろうか？それは実は、いま焦眉の急務である創作活動に関して全体としての西リ演に、現状に対する眼の据え方とその表現方法への切実な肉迫が底流していた事に他ならないのではないだろうか考えてみて思い当る事がある。「うたごえ新聞」が創作曲の課題について、自分をみつめるとき歌えるうたを、全体を働き動かしていくうたと共に相関的に追求する事が必要だと一昨年あたりから連載しているが、その事と、東リ演ニュースでこばやしさんが情況認識の変化とその観点を抑えようと提起している事と、これらは一つの問題ではないかということだ。

これらの創作上の課題について、セミナール総会報告を兼ねて先日開かれた京都ブック会議でも、労働者や劇団の眼が今何を求めているのか、新しい労働監視の中での労働者の階級的自覚の変質や民主自治体としての京都の特質など、その具体例が引き合いに出されたながら創作劇の内容が検討しはじめられている。

西リ演ゼミナール報告補遺

森 本 景 文

(劇団 未来)

一九七一年度の西リ演ゼミナールは、八月二十一・二十二日と、のびやかな山あいの温泉町、広島県湯来ロッジで開かれました。

参加者は、生活舞台(福岡) 4、現代劇場(福岡) 10、若者座(宇部) 13、月曜会(広島) 13、木々の会(広島) 7、国鉄演サ(広島) 2、高校生(広島) 5、福演(福山) 2、職場演劇集団(岡山) 1、四紀会(神戸) 5、いこら(和歌山) 8、和歌山 4、関西芸術座(大阪) 8、南大阪演研(大阪) 2、息吹(大阪) 2、大阪協同劇場4、劇団大阪7、劇団民青(大阪) 7、未来(大阪) 14、京芸(京都) 4、人間座(京都) 1、橋(京都) 1、湘南アートシアター1、福岡演劇1の合計一二六名(プラス二世六名)でした。

二十一日のご七時すぎより、熱っぽい雰囲気の中で、仲議長のあいさつ、参加者紹介と続き、広田恵美子(いぶき)、芦田鉄雄(人間座)、多田井淑代(四紀会)、高尾豊(生

活舞台)、竹内順子(未来)、藤本昂二(いこら)、坂本浩二(福演)の皆さんによる「地域とわたしの劇団」という、自分の体験を通じての活動報告がありました。

続いてモデル上演は、劇団京芸のチエホフ作「悪党」——藤沢薫、小沢文也両ベテランの織りなす風刺は観客をよく笑わせました。生活舞台内田成美さんによるタカクラテル作の「ツルの巣ごもり」は燃焼度の高い、爆発力のある詩の朗読でした。一方朗読のベテラン関西芸術座の梶本潔さんの「原爆詩」は基本をきっちり押えてみごとな構成でした。

そして、3本のモデル上演を中心にしての一時間はかりの合評会——「これだけが楽しみでゼミナールに参加した人もあるという」交流会へと続きます。白熱した交流の輪は、延々と続き、最終は翌日の明け方四時頃となります。

第二日目は、関芸の河野・和泉両嬢が指導

する体操・劇団未来の豊年太鼓の披露にはじまり、同志社大学教授・京都文芸連会長安永武人先生の「今日の文化状況」という基調講演は、西リ演の運動と展望に確信を与えるものでした。

続いての分散会は、「地域で責任のもてる劇団になるには」「あなたにとって劇団とは」の統一テーマのもとに、劇団活動歴順に10に分かれ、熱心に討議・交流しました。

チューターは、

- 第一分散会 藤沢 薫(京 芸)
- 第二分散会 山本惣一郎(南大阪)
- 第三分散会 大塚 雅春(未 来)
- 第四分散会 尾津 訓三(広島国鉄)
- 第五分散会 山崎 喜正(いぶき)
- 第六分散会 梶 武士(四紀会)
- 第七分散会 諸鹿 芳英(生活舞台)
- 第八分散会 富原 智一(現代劇場)
- 第九分散会 栗原 省(いこら)
- 第十分散会 小松 徹(関 芸)

の方々に担当していただきました。

今年度の一せい地方選挙、参議院選挙を経て、高まりつつある文化要求にどう応えるか。資商家側の総攻撃の中で、地域に根ざした劇団が、ほんとうに力量をつけ高めるとは

どういうことか。——という、今年度のゼミナールの方向に則して討論されました。

若い人の分散会では、

○自主的な創造活動の価値をどうみるか。

○劇団指導部との関係をどのようにつくっていくか。

○芝居をつくるよろこびとは何か。

○職場と演劇活動の望ましい関係とはどのようなものか。

○家族をどう説得していくか。

などが中心に話され、地域や職場に根をおろした演劇活動という点について深まりました。

中堅の分散会では、劇団指導部と若手の間の断層を中堅が中心となつてどのように埋めていったらよいか。それは、両者の間にあって橋渡しをするというだけでなく、自分達が積極的に劇団の中心であるという自覚を持ち、卒先して劇団の矛盾を解決していくことが大切である——というようなことが話しあわれたことが印象的でした。

経験を豊富につんだ人達の分散会では、創造の中でこそ劇団の団結が強まるといわれるが、その創造論をもっと具体的にしようというようなことが話しあわれ、私達をとりまく

文化の階級性を、単に政治的側面からとらえるだけでなく、文化自身の問題としてとらえることが大切である。

自治体が、文化政策を先どりしていく中でそれに対抗して私たちの文化をどうつくっていくか、今こそ真げんに考えなければならぬのではないか。

創作を中心にした私たちの創造をどうふくらませていくか、劇団の周辺の観客とが手をつなぐにぎって創りだしていこう。というようなことが話されました。

今回のゼミナールには、六名の二世が参加していたことにも象徴されるように、ママさん俳優をどう育てるか、育児をしながら俳優としてどう生きるかなどの意見が、あちこちの分散会ででしたが、そのことにぶち当たっていない仲間には仲々解ってもらえなく、そういう問題での特別分散会設置の要望がでていました。

今年度の西リ演、ゼミナールでは、特別新しい問題が論議されたのではなく、話されたことは日頃各劇団で、イヤという程論議をつくされている問題でしたが、そのことがゼミを終った今、新鮮な感覚で受けとめ直され、実践の中で確かめられようとしています。

只、来年度への課題としては、運動論としての側面ばかりでなく、創造の問題として、より深い研究会やゼミを開いていくことの重要さがいわれています。

最後に、ゼミで採択された「アッピール」を紹介して、報告にかえます。

アッピール

世界中がうなりをあげています。輝かしい未来をめざすときの声と、どん欲に私腹をこやそうとする者たちのなりふりかまわぬ殺りくと破壊の声。

ベトナムで、朝鮮で、沖縄で、ヨーロッパでそして私たちのすぐそばで世界中がうなりをあげているのです。

東京、京都につぐ大阪での革新首長の実現。地方選挙、参議院選挙、原水爆禁止世界大会へと、たたかうことに統一の輪はふくれ、進むごとに団結の味は深さを増してきました。

七〇年代、私たちの日本は、革新統一戦線への方向が今はつきりとみえはじめてきたのです。だからこそ、私たちの演劇への期待、私たちの創造への要求が、今ほど高まっているときはありません。

それにどうこたえていくべきか、そこにどのように責任を負うべきか、そのことを私たち

はこの二日間真剣に討議しあいました。たたいがが進み、敵が孤立すればするほど、私たちの創る仕事は、喜びも増すと同時に、苦しみも深まります。しかし、私たちは、一時の成果にうぬぼれたり、一時の挫折にくじけたりすることは決してしないでしよう。

一九七一年八月二日・二日、ゼミナールに結集した二六名の仲間たちのあいだにかわされた熱い友情と、胸ふくれる思いの心はふれあひでしよう。私たちは生涯決して忘れることではないでしよう。そしてこの思いは、今心が傷つき、劇団の存在を見失いかけている仲間がいたとしても、その仲間へ手をさしあげることも決して忘れることはいらないでしよう。来年のゼミナールには、さらにたくましい劇団に、そしてその一員となつてあらわれることを、今日私たちは誓ひあつたのです。そのための努力を、今日、ただいまからはじめることを確信しあつたのです。

一日も早く、真に地域に責任をもてる劇団をつくりあげましよう。西リ演の旗の下に、いつそう団結をかためましよう。西リ演の旗を戦場に、地域に、学園に、西日本の隅々にまでうちたてましよう。一九七一年西日本リズム演劇会議ゼミナールの成功万々。

一九七一年八月二十三日

西日本リズム演劇会議ゼミナール

力を挙げて集まつた仲間を、客席にしっかりとしばりつける、そんな全力と、それを支える日常活動のために、演劇集団にふさわしい、ドラマチックな活動の重要さが、どんどん伝わってきます。時に応じて、エネルギーに活動のできるそんな、集団の態勢の確立をいそぎながらも……ふつと集団の日常活動に思いを馳せるのです。日常茶飯事のごとく、活動が定着すれば……と思ひながら、公演間近にしか燃えないその弱点が、一層明確に日常活動にあることを痛みとして感じるので。

その地域にふさわしいその地域だけの、今日の、今の時間にピッタリのその活動、さけて通ることのできない問題を、そんな素材が余りにも多すぎる、そんな時代にありながらと思ひは思ふほど、その課題は鮮明になつてくるのです。

夜は華やかに更けてきました。交流会の花は大きく開き、四つの輪は、なごやかに、そしてむずかしい話に揺れ動いています。

明日の分散会があるんじやけ、もっとビールを飲まにやあ……と交流会担当者泣かせることしきり。寝る時間が惜しいかのように、話は佳境に入る。タフガイは、とうと

西リ演

ゼミナールに参加して

岡山劇場演劇集団

国司 等

短い時間だけど、思い切り吸収し、大いに学ぼうとする、そんなエネルギーな若者達(皆んな若者でした)の息吹が、満ち溢れている、そんなゼミナールでした。

はじめ、私たち岡山劇場演劇集団からは、たった一名が参加しました。一名、そのこと自体、いかにも残念なことだったかもしれせん。だけど、三週間後に、私たち集団は、「鷹鷲」公演を控えていました。それも、遅れ馳せながら、やっとこさ燃えはじめた集団員にとって、私をゼミナールに参加させたことは大変なことだったにちがいない。……

事務局からの便りには、たびたび私たちの岡山劇場演劇集団の、西リ演加盟を呼びかけそしてわざわざ、広島にゼミの開催を企画したことを知らせてきました。

それに対して、期待に添えなかつたことは残念でした。けれど、形の上で添えなかつたう夜明けまで続いていました。やや二日酔いのまなこは、起床ラッパならぬ、事務局の号令でバッチリ、そして体操に大いにショボショボと。でも皆一生懸命でした。厳しい仲間の指導に……日頃のサボリをジワリと味わしてくれました。一本足で支える体は、たえず、地球の動きに追いつけず、柔軟体操が、緊張の連続でした。

やとと救われた劇団「未来」の仲間のうち鳴らす豊年太鼓は、湯来の谷間をどろろきわたり、一瞬、蟬の声を止め、さつと緊張をほぐす……と同時に明日からの活動への緊張をかきたててのでした。文化活動への基調講演は、誰もが真げんでした。いま私たち岡山劇場演劇集団は、教育問題に取り組んで二年になります。講演の内容は、私たちの「鷹鷲」公演に大きな確信と、誇りを与えてくれました。日本の教育の歴史をひっくり返しなが、高校教育の問題と取り組んでいます。現代の文化の状況をとらえる大きな手がかりを学んでいます。

時の権力者が、どんなに文化の欲求をへし曲げようとも、労働者がいる限り、それを、正しく発展させることに一層の確信を深めさせてくれます。

としても、それはあくまで形の上のことだと報告申し上げておきます。

さてゼミの開幕。湯来の山なみに囲まれた会場は、続々とつめかける仲間によって、なごやかに、そしてきびしい目で埋まり、ゼミナール一色に塗り潰されてきました。

またま転動で休団中の仲間を広島に訪ね、話し込んでる間に夕飯を食べそこなつたわたしは、いささかグロッキー。期待と不安が同居しながら、活動報告をきいていました。

若手が……古手……が悩み、苦しみ、二本足をしっかりと大地に踏みしめて、七〇年代の文化活動を担う、その意気込みが誰の顔にも漂よっています。仲間の目は厳しく追っかけているのですが、ただ、空きっ腹に、ずしんとこたえるドラマチックな活動報告が……わずかな時間により多くのものを求めていた仲間の顔を満足させていなかったのが、チョッピリ残念でした。だけど……セリフにならなかつた。蔭に秘められた多くの地道な活動がそこにあることを、強く強く、感じるのです。そんな雰囲気でした。

モデル上演のはじまる頃には、夏の夜も更けて谷川の流れが大きく響いていました。全尋常小学校から、国民学校へ、そして小学校に学んできた各々の世代が、各々に振り返りながら、現代の文化を支える私たちが、いまの教育をとらえるとき、教育に対する無関心さをふつとばし、「鷹鷲」公演の意義は、それ自体ドラマとして発展し、誇り高い自信となるのです。

期待される人間像……時の権力者が、文化支配の長期対策として抜本的な教育制度の改革を推進するとき、差別と選別の教育ははんらんし、異常なまでの教育ママが生れる一方、無関心を最大の美德とする思想が醸成され、選別機にかけられた、上等、中等、下等の頭が、人間工場からはき出されてきます。自分の進路が、へし曲げられ、無気力な労働者がどんどん出現する。そして「断絶」がニュースとなる。マスコミは一方的に、繰返し、労働者を教育する。消費文化がはんらんし、生産のよるこびは、やもすれば、マイホーム主義と称して、ささやかな日曜大工に終始するのである。

生産の欲は消されてしまいました。そこにあつて、私たちの演劇が、文化活動の重要さが、さらに、さらに浮かびあがってきます。そして日本の土壌にふさわしい演劇が、

我々の手で創りあげられなければならない、ということなのです。

一週四十数時間の労働……多くの犠牲をもって斗かいた余暇を、百多創造に転化させる課題こそ、その手がかりとなつてくるのです。

分散会は、世代を分けたように十の課題を追いかけてきました。十数年の経験を持った仲間に分散会に参加をさせて貰いました。そこに加わった若いママさん俳優たちがあり、若手の、古手の断絶をめぐって話はずみませんでした。//もう大分、古くなつちやつて、くたびれて来たんですね、だから、若手に運営を任せようと思つてね……//ガ然、若い人たちが、//老化学現象////失望しちゃうなあ//と。そこには、交流がないことです。結論は簡単でむづかしいことでした。

//これからは、敬老の精神で行きます// (こりゃあひどい)。皆んな若いんです。)

//若い人たちを正しく指導する義務がありますからね、もっと理解を……//と結論らしきものから、現実には、明日からの活動にかけられて来るのでした。

若いママさん俳優が、産休明けから、車に布団を積み込んで古い古にかけた話を聞いて六時、大阪協同劇場の勇士たちだけと相なつた。各劇団のその道の豪傑陣の眠りの早かつたのも西リ開びやく以来。

朝、関芸による発声体操の指導で骨の髄までリラックスしたとたん、その髄の髄まで響きわたらんとする劇団未来の太鼓。男にまじつて未来の女性の響かす太鼓の音、それは心を叩き込めと教えられた太鼓。職場での労働条件改善の斗いから革新府政実現にも参加していった太鼓、そして田舎で失対をやっているおじいちゃんにとどくと太鼓を叩く事が、全国の仲間への連帯へと結びついてゆくすばらしい彼女の太鼓だ。

眼気を振り切つたところで、京都から安永武人氏を迎えての講演は、急速に進む教育、司法、労組への反動的攻撃にメスを入れたもので、七一年の今日を判断する上で意義深いものだった。「演劇のすばらしさ、その運動の重要性を考える時、そこに一歩踏み込めば最後、もう抜け出るなんてできない。京都で私たちは演劇やっている人のこと//極道//と呼んでいるのですよ。」これを聞いていた芸芸の人達の表情を見るまでもなく、全くその通りと自分自身を振り返って見たものでした。

た。これまた若いママさん俳優が、その感動を発散させながら、フアイトを燃やしている姿は、やや老化学現象をおこしている私を、ほのぼのさせてくれました。

各分散会の報告は、明日からの活動に、全力を誓い合っていました。若いエネルギーと豊富な経験が団結し、一せいに花開くとき、八〇年代をめざす、文化活動が、大きく前進することが確信となつてきます。拍手とカン声のなかに、来年の再会を誓い合いながら、ゼミナールは終わったのです。

明日からの活動への期待に満ち溢れた顔はやや、疲れを見ながらも、湯来の町を、元氣一杯、活動の本拠地をめざして出発して行ったのです。

私たちが岡山劇場演劇集団から、はじめて一名参加したこと。

結論は出ていました。来年は、明日に公演を控えても、多くの仲間の参加でできる態勢を、どうしても確立したいと思うのです。その活動は、はじまっています。同時にそれは、八〇年代をめざす、文化の大きな課題をはっきりとめざして。

四 紀 会

勝 呂 勉

西リのゼミが広島島の温泉で開かれるぞ。だが、劇団のスケジュールは、残念。ゼミは公演の一週間前に開かれる。またしても代表メンバーだけの参加になってしまう。可能な限り全員で参加したいものだ。結局、公演が迫った中、五人のメンバーで西リへ向う事と相なった。劇団員から多額のカンパ(四千円ボツキリ)をひっさげて。

会場へのバスの中、西リへ向う女高生と会う。演劇部の人達だ。高校生が参加するという事、考えもしなかった事でピンとこない。とにかく今回のゼミ、多彩な物になりそう。着いた会場冷房完備、これまでの会場(古ボケた山寺)からすると、まさに別天地。

夕暮れの中、メイ調子朗読、メイ演技に感動し、さて交流会が始まる。ところが困つた事に酒を飲めども、ビールを飲めども、朗読論、演技論ばかり、ついには世代の断絶の話しへと飛躍してゆき、出足の鈍る事、限りなし。耐えかね、未来の森本氏もつと碎けてゆきましようとなつて入るオソマツ。西リ開びやく以来かな。ねばりねばつて夜明すの

劇団若者座

向 井 義 秋

私は昨年十二月二十五日に入団し、団歴は浅いのですが、演劇とは何か、という問題に対し自分自身現在までに考え続けて来ました。その中から演劇とは、社会の矛盾を追求し、観劇された人達と、その公演の内容を共に考え見つめていく場ではないかと、脚本や劇団の姿勢で感じていました。しかし、その問題は自分自身の頭の中でしか考えられなかつた為、西リ演というものがどういうものか? また、どのようなことを見つめるのか? 私にとって疑問のままに興味も相まって、この度の西リ演ゼミに参加することを希望しました。夕方字部を出発した為遅く目的地へ着いたこともあって、その日のゼミは納得のゆかぬままに終わったことが残念でなりません。この21日の交流の話し合いの中で感じられたのは、年配の方の意見が集中し、私には難しい問題だったということです。あくる22日日曜日、七時に起床し朝食を済ませ九時から朝の体操でこの日のゼミは始まりました。朝の体操では、脱力体操と発声の為の体操が主体で充実した体操でした。私達の劇団をより

大きく、より素晴らしい舞台を創りあげるので、欠くことのできない体操であったように思います。又未来の太鼓の迫力に未来の文化への歩み方が窺えました。続く安永先生の講演が九時過ぎに始まりました。私は安永先生という名をはじめて聞くので、その日一番に注目した人でした。講義内容は、国民の根本的要求と伝統的感情をどのようにとらえ、それを新劇に結びつけ国民文化を創り出すか、などの具体的な講義でした。そして現在では文化が権力によって統制され、国民全体が権力の要求する文化の中で、自分というものを形成してゆく危険性があると話されました。この講義の中で、ゼミに来る以前、演劇に対する一つの見方を持っていましたが、それが間違った方向でないことを感じました。そしてもっと地域に責任を持って市民の中に根を張り、市民と共に社会の矛盾を考える、そしてこの考える課程でいつも一方的な見方でなく、本当に市民の根本的要求が何なのか具体的に掘り下げ、劇団内で話し合い討議しながら演劇を創造してゆきたいと思いました。

次の分散会は、第十分散会に別れて討議になりました。私は第一分散会で、職場生活と劇団生活、演劇活動と政治活動など五つの課

題で話されました。この中で職場生活と劇団生活、演劇活動と政治活動は自分が直面している問題でもあったので、大変興味を引きました。会社の矛盾や不満があっても労働することによって作り出す喜び、それは演劇を創造する時の気持と変りないと考えます。そして会社の矛盾は演劇をする者にとって、より効果的な創造を深めてゆくことが出来ると考えます。私は、やはり職場で働いていることが演劇をする上にも、もっと感銘の深いものを観客に与えるのではないかと思います。職場と劇団は切り離して考えられないと思います。演劇活動と政治活動も、やはり私自身切り離しては考えられません。演劇とは何かと考えた私は、演劇の歴史を少し勉強してみました。そして分散会の内から演劇と政治は、屋と夜との関係には成り立たないことを改めて掴みました。

私は第10回西リ演ゼミナールに参加して他の劇団との交流や話し合いの中から連帯、仲間を強く感じ、そして演劇の見方を深く認識することもできました。この成果を地域で責任の持てる劇団となる為に頑張っていきたいと思えます。

劇団未来 毛馬 幾代

劇団未来に入ってからまだ五月月たらず。ちょうど4月に職場も転職になり、新しい職場の生活における自分の位置と、新しく劇団で活動していく中で自分の位置を見つめる上でも悩んでいました。特に劇団という一つの、同じものを目指して進んでいっている集団の中でいいたい私はどうなのか、何なのかということに対して不確かなまま毎日進んでいってしまいました。職場がしんどくつけないに行けない日が何度かありました。「古い人達はなんてつよいんだらう」と思い自分自身を否定してしまいたくなくなることが何度もありました。そんな時に西リ演ゼミナールのちらしをもらい、「何かとつかかりを」とわらでもつかむ思いで広島に行くことにしました。

参加者はみんななんて生き生きしているんでしょう。それにくらべて、私は。少しはすかしい気がしましたが、討論にはできるだけ積極的に参加するようにとめました。一番に残ったのは、分散会の討論です。私達の分散会若くは劇団員ばかりで構成されていきました。そこでは「自分が今の劇団をどのよ

うに見ているか」「今後どんな劇団にしたいか」ということを中心に、働くことと劇をすることのつながりなどを話しあいました。その話し合いの中で印象に残ったことがたくさんあるのですが、一つは西リ演に結集している劇団が今日本にとって必要なかどうかということについてです。もし今仮りに日本の国から、私たちのような自主的に文化を作っている集団や仲間が全部なくなったらということを考えて、そのあとに残るものといえは資本家が作り出している腐った文化でしかない。資本家や一部の反動的な政治家で思うように社会が動かされるということを考えて恐ろしい。労働者階級自身が、自からの演劇を創っているということだけでも、資本家が作っていることと社会に対する歯止めになると。西リ演加盟劇団で劇をしていくということは、一個の人間のたたいだけではなく、文化という場の闘いでの大きな歯車の一つなのだなということ痛切に感じました。

それからもう一つ。白状しますが、私は常に、美しい若い劇の中心人物のキャストにつきたいという欲望もっている虚栄心の強い女なのです。その個人的欲望をどのように

解消していくのかということ。自分がそのような感情を持つということと悪とせず良い方向に向けていけばそれではないのではないかと、そしてそういう欲求がなければよい役者にはなれないということ先輩から聞き、安心すると同時にもう一步深く切りこんで役のことを考えねばと思いました。たくさん収穫の中でこんなことしかかけません。ともかくゼミに参加して劇団未来に対する考え方が一まわり大きくなったように感じると同時に、自分にかかる責任の重さをあらためてかんじているこの頃です。

福岡現代劇場 斉藤 睦子

裏盆も過ぎてどうやら早い秋の訪れを思わせるかのように、山峡いを吹き通る風のひんやりした冷たさが何とも心地よい広島湯来温泉で、西日本リアリズム演劇会議のゼミナールが開かれました。何しろ初めての参加なので、胸はドキドキするし、顔はつっぱるし、とに角緊張の連続、自分が何をしゃべりどのような返事をしたのか今は唯そのことをいかに思い出し、反芻するかのいっばいです。でも覚悟をきめて私なりの拙ない感想文を書いてみることにしました。

まず印象として残ったものに、モデル上演でやられた詩の朗読がありますが、これは個人の関心が強かっただけに、朗誦術とか表現術というか、そういったところに非常に興味を抱きながら鑑賞しました。詩(言葉)を誦(よ)みあげる。正確に分り易く、しかも芸術的に高く、ということ演劇を創造する者にとってはやはり避けられない一つの課題であるうし、私自身、日常茶飯事の中で言葉を正しく伝えるということがいかにむづかしいか、コミュニケーションとしての言葉の意味、位置づけといったもののむづかしさを痛感しているだけに、興味以上のものでも観たわけです。そして、ややもすれば理屈が先走りがない現況にある中で、私としてはもつと原点に立つ、原点に還る、という基本的な姿勢を守っていきたく思いました。次に、劇団の活動として印象に残ったものにやはり「未来」のあの勢力的な活動をあげずにはいられません。「あなたにとって劇団とは」というテーマが、正にここで迫力をもって迫ってきたという感じ。自分が現代劇場の劇団員であるという自覚と尊敬を、最後まで責任をもって発揮できなかったという弱さと歯痒さを反省する中で、じゃあ、私自身自分に対す

に諸君の激怒をおそれている。否そればかりではない。奴等は眼前に迫った帝國主義的××に労働者を肉弾にしようといんボーしている。だからこんな生っちょらしいゴマ化しをやろうとしているのだ。諸君！ だまされるな！ そんなみえすいたゴマ化しにちょるまかされる俺達でいいぞ！

戦旗座はこの彼奴等の企てに対して「演芸大会」を持つのだ！

労働者農民諸君！ いくら無料でも彼奴等の芝居・活動をみるな！ この毒ガスをまこうとする資本家の地主共の呆れたたくらみをけつとばせ！

諸君演芸大会へ！ デモで参加しろ！

諸君の演芸大会を諸君の手で守れ！

(編集部付記——本号締切までに入ったレポートによれば、この演芸大会は、弾×(庄)のため二日に延期された)

(校了間際に入ったレポでは、この大会は遂に失敗に終わったレポでは、然し戦旗座同志諸君により猛烈に前進を試みつつあるのだ)

私の持っている。この大会の一枚のピラに印刷されているのは、次の如き内容である。

にもならぬことが解った。で、早速「プロレタリア演芸大会」をそれに代って演ることにしたのである。

労働者農民諸君！ その後一ヶ月間、我々がどのような苦斗を続けて来たか。併も結果は、マザマザと諸君の前に横たわった無惨な姿でしかないのだ。諸君の憎しみに燃えたその眼で、ガムシヤラに突きまぐられ、蜂の巣のように穴だらけにされた演芸大会を見て呉れ！ 六日、十三日、二十一日と三度も押しかけた諸君。デモで彼等をベシヤンコにするまで抗議した諸君。堺、神戸からまで少なからぬ金を捨てて来た諸君。諸君に答える言葉を俺達は持たぬ。だが、真実の姿を見て呉れ！ これは何も俺達が悪いのじゃない。みんな彼等の仕業なのだ！ 諸君、此の姿の中から——奴等に対する憎悪から勢力とエネルギーを作れ(レーニン)——を現実生かしてくれるなら我々の努力も無駄ではなくなるだらう。

七月六日、芝居も映画も不許可にした理由はこうだ。「出願期日が短かい」「書式が揃ってらん」この二つだ。成程、それはそうかも知れない。然しこれ位のことでは、他の小ブル劇団にはいくらでも見逃している。

『プロレタリア演芸大会』

日時 七月六日 午後七時

場所 天王寺公園音楽堂

主催 大阪戦旗座

後援 ナップ大阪地域協議会・京都青

演劇 服劇場

「莫迦の療治」「地獄の審判」「荷車」「暴力五人男」「掃除」

詩 プロレタリア詩の朗読 教篇

音楽 独唱及合唱 数曲。ハモニカ独奏及プロレタリア行進曲

落語

「演説会」及「家賃下げ」

舞踊

「憎しみのるつぼ」「救へ」

映画 「一九三〇年・東京・大阪メーデー」

—その他—

☆工場、農村から労働者農民の演芸大会へ押しかける！

☆大衆の力で検閲制度をハネ飛ばして俺達の大会を守れ！

☆上演禁止絶対反対だ！ あらゆる集會に戦旗座を利用しろ！

☆工場・農村に諸君の「劇団」を作れ！

☆労働者券の配布網を直ちに工場・農村に作れ！

会員券 A券七〇セン B券五〇セン 労働者券二〇セン

署名人 大阪市港区新池田町一ノ七二

戦旗中央支局内 賀地利

しかし、この催は再び不可能となり、無期延期の声明を発表せざるを得なくなった。それを「プロレタリア演劇」九月号に発表された文章でみよう。

プロレタリア演芸大会(大阪)の失敗

大阪戦旗座は「プロレタリア演芸大会」の無期延期に関して次の如く同地の労働者・農民に訴へかけている。

「労働者農民諸君！ 時々刻々に昂りつつある現在の状況は、我々に移動劇場活動だけに止むなぐさした。そこで「太陽のない街」を諸君の白熱化した渦の中へ投げ込む為に準備を進めて行った。が、ニュース第四号(プロレタリア八月号「プロレタリアの旗の下に」)に発表されたような理由で今の戦旗座の力ではどう

労働者農民諸君！ ナップの催しに集まってきた多数の労働者農民諸君の力に震え上った彼等の態度はかうだ。即ち——1、我々から合法舞台をもぎ取るうとする。2、数回の延期で経済的にブツブツすること。3、それに依って労働者農民諸君の戦旗座に対する信頼を支持をモギ取り、諸君と我々を切り離すこと。だが諸君！ こんなことで諸君と切り離せると思うか。断じて否だ！ 俺達は今移動劇場をモリモリ持ち込んでいますぞ。

最後に我々は、我々の犯した誤謬を明かにして置こう。それは諸君との結び付きがまだまだ十分にやられていなかったことだ。前後三回行われた諸君のデモが、若し俺達ともしっかり繋がっていたならば、もっともっと役に立つたことだらう。では、これをどう立直して行くべきか。それには移動劇場活動をもっと活発にやって、労働者農民を先頭とするドラマ・リーグを組織しなければならぬ。そう組織された力があってこそ上演の自由を獲得し、戦旗座潰滅の陰謀を叩き潰せるのだ。

—戦旗座ニュース・第五号—

この報告で明らかな如く、この演芸大会は徹頭徹尾失敗に終わった。大阪戦旗座の良き意図と碎身の行為にも拘らず、どうしてかは

ヨシノ、やらせなければ俺達は他の方法でやると、直ちに演説会を開くことに変更した。が又しても「屋外集會」だからやらせぬと来た。理由にもならぬ理由でやらせぬとは何だ！ やらして呉れなければ俺達は勝手にやるのだ。処が会場に乗り込むや否や、数十名の本部、戎警員がトラックでやって来た、そして我々を会場付近から、みんな追い出し了った。

同十三日も、六日と同様の理由で、とに角二十日前後に延ばせばやらすと云うのだ(書式が揃わぬと云うのは、四日に四人の座員が戎警に検束されたために手違いが生じたからだ。)そこで我々は、涙を呑んで二十一日に延期することに今度は書式万端手落ちなく届けた。処がどうだ。十八日になって府特高課長は突然「戦旗座にはやらせぬ」と云って来た。理由はこれだけだ。只、戦旗座にはやらせぬと云うのが理由だ。そうして三度、諸君に無駄な手数をかけた。諸君！ こんな理由が何処の世界にあるものか。こんなことで戦旗座は断じてへこたれはしない。やらせぬ方針でやって行くのだ。この決意の下に、我々の行動は次から次へとなされて行くことだらう！

ど惨めに失敗したか。

それは主として、公演活動に於ける戦術の拙劣さに基因するものである。

現在、一般に公演的活動をする場合、一定の法制に従はねばならない。ブルジョアジーの統制下にある現在にあつても、近き未来に実現するプロレタリアートの××()下にあつても、この点に關しては変りないのである。然し現在に於つて、殊に我々の公演的活動の場合には、その一定の法制は單なる法制ではなしに一箇の有力な武器となつて、我々に差し向けられるのである。だから、我々はそれ等の武器に打ち挫かれぬ様に、あらゆる注意と技術を以て、公演的活動を闘い取らねばならない。それには、あらゆる場合に於ける活動と同様に、無計画的無組織的な行為は絶対に避くべきである。必然的に狭はめられつつある我々の公演の合法性を、飽く迄正しい態度を以て、出来得る限り広汎に獲得することに努めなければならぬ、徒に不必要以上に自らの演劇活動を非法法の分野に追い込むことは、ポリシエヴィキの線に沿つて演劇運動を押し進めてゆく我々の活動方針に反くものである。

今回の演芸大会に於て大阪戦旗座がとつた

連は団員を解散せしめ、暴力団を雇ひ、遂に戦旗座の持ち込みを無為に終らした様な事實がある。

この週間に大阪戦旗座は、少数のメンバーを以て困苦に耐えながら良く活動したが、同時に多くの痛手を被つた。先づ八月一日に、この週間の大阪戦旗座の活動を探知して当局は、戦旗座の合宿を襲ひ一名検束したのを手始めに、全員八名の内六名を奪つて了つたので、戦旗座の活動は三日朝を以て一時休止したのである。(中略)

主体的な斗争が表面上具体的になされなかつたこと、ナツプ各同盟のこの期間における斗争方針が区々であり、各自の活動が全く分散的であつて何等連繫がなかつたこと、及びプロット加盟劇団の大半が活動不能の状態に陥入つていたこと、並びにレバトリの不足等々の理由で、我々が所期した程の成果を挙げ得られなかつたが、本年度に入つて、プロットが有機的に結び付き得た最初の労働者・農民のカンパニーに於ける斗争であるという点に「八・一」斗争期間に於ける我々の活動の意義はあつたと云える。』

戦旗座は、これらの諸斗争を精力的にやっ

戦術に、勿論これは中央部との連絡が不完全であつたことにも依るが、幾分こうした避けねばならぬ行為が表われていることを認められる。

この点は、既に大阪戦旗座の認めている処である。「八・一」を中心に、勇敢に闘つてゐる戦旗座の秋期になされるであろう活動は、同地の労働者農民諸君の期待を決して裏切らないであらう。

そして、同誌は、プロット書記局の報告に於て「八・一」斗争の活動の内での大阪戦旗座の活動を次の如く伝えている。

『「八・一」斗争週間に於ける活動

日本に於て第二回の「赤色デー」を迎えるに際し、プロット常任中央執行委員会は××(革命)的プロレタリアートのこのカムバリーアの斗争方針に基いて、八月一日から向う一週間を我々の斗争週間と定め、全国加盟各劇団に対して直ちにこの斗争に必要なすべての処置をとることを指令した。

その指令に従つて、加盟各劇団はそれぞれ準備をしたが、種々の事情から大・小公演的活動は行われず移動的活動を以てした。だが、実際に劇団として強力に活動したのは、東京プロレタリア演芸団と大阪戦旗座だけだ

てきた。しかし、決して大きな成果を挙げることが出来なかつた点の自己批判を、自己の劇団の主体性の確立に向けるべきであると見るに至つてゐる。従つて、この年の下半期には、これまでのやうな事件は起らなかつた。むしろ自己確立のための劇団力の整備、演劇創造のための基礎訓練と、上演作品の拡充への方向に歩み始めたのである。

(私はこの時期から、大阪戦旗座の一員となつて参加することになった。昭和四年の東京左翼劇場の関西公演以後、東京での左翼劇場への参加から、学校を終えて翌五年春には上京、左翼劇場の活動に入った。松本克平、小沢栄太郎、信欣三などと舞台に出たり、演劇の仕事や、新築地劇団、大衆座などに劇団からの応援として出演したりした。しかし秋になつて、再び大阪に帰ると共に、大阪戦旗座に移籍、演出部員となつた。)

この下半期の期間に、大阪の新劇界には二つの事件が起つた。

一つは、雑誌「関西文芸」による文字グループが、この年一月から「関西小劇場」と名乗つて新劇に参加してきた。

前年の昭和四年は、築地小劇場がその主宰者小山内薫を前年十二月二十五日に失つて、

つた。

今年度の「赤色デー」は、現在の日本に於ける特殊な情勢に依つて、主体的な斗争が表面上具体的になされなかつたために、その斗争の線に沿つて幾分なりとも役割を果し得る確固たる見通しを持つていた我々のこのカムバリーアに際しての活動は、従つて必ずや何等かの形態で斗はれたであらう戦術的な斗争とは、全然別個に、だが飽くまでもその戦術的な斗争方針に結び付いた我々独自の演劇活動によつて行われたのである。行わざるを得なかつたのである。言葉を変えて云うと、実際に活動した劇団は、この週間で、特に「赤色デー」の爲の集合には出動出来なかつたので、その出動先に於ける集會の許す限り可能な範囲で、「赤色デー」に適応したレバトリを演るより他に仕方なかつた。

大阪戦座、八月一日朝から三日朝に至る迄約六回出動している。出動先は全部争議団。

「点呼」を主にやつた。

その中、石川伸鉄争議団へ出動した時は、この争議を題材にした「トラックのお土産」を朗読後「莫迦の療治」をやる筈だったが、この争議を指導している幹部の連中から苦状が出たので打ち切り、翌日出掛けた処、ダラ幹

その追悼公演を、大阪・京都(「夜の宿」)名古屋(「桜の園」)で行つて帰京したが、四月には土方与志を始めとする薄田研二、丸山定夫、山本安英、久保栄などが、築地を脱退「新築地劇団」を組織、残留組は「劇団築地小劇場」となつて分裂、共に左翼劇場の援助を求めつつ活動を展開してきた。両劇団ともに関西での公演も行つてきたが、その影響は、関西の劇団をも左翼化の方向に進んできた。そのような情況から、本誌前号所載の如く、プロット所屬の大阪戦旗座、京都青服劇場は、東京の如く新劇団の協力体制を作るべく、「関西新興劇団協議会」の結成を計つたが、それは時期尚早だったのである。

関西小劇場も、その情況の内から生れた小市民的なものだが、レバトリには一応、プロット系の「荷車」(佐々木孝丸作)「サム」(北村喜八改作)などをとりあげ、更に八月には、村山知義作「最初のヨーロッパの旗」を天王寺音楽堂において野外劇として上演したのである。前記の如く、大阪戦旗座は八・一斗争のために、この公演を見送つたのだが、プロット機関誌「プロレタリア演劇」

第五号(昭和五年九月号)には、次の批判がのつている。これは、プロットが他の新劇団

をどう見ていたかの一の証拠ともいえるだろう。

戯曲「最初のヨーロッパの旗」は、村山知義と江馬修の合作の形のもので、昭和四年八月、雑誌「新劇街」に発表されたのだが「阿片戦争」の題で、劇団築地小劇場により、八月三十一日から九月四日まで東京本郷座で上演されたが、のち全部を村山が改稿した。
〔「村山知義戯曲集・上」による〕

『関西小劇場の公演を評す』

立花十三

八月八日、関西小劇場夏期公演を天王寺公会堂に於て観た。研究的プロレタリアの演出を標榜して、本日の出し物は村山知義作「最初のヨーロッパの旗」であった。

観客は三百人は入っていたらう。だがどの面もどの面も運動不足で蒼白な会社員、指先でいつもニキビをつぶしている学生といったインテリばかりだ。

婦人（モガヤ、流行を追って見たがる女学生）の数よりも、われわれの仲間には遙かに少なかった。

以下劇の進行につれて批判を試みよう。
第一幕第一场「これが阿片窟か」と傍の男

をして嘆声を発せしめた程粗雑な舞台だった。

全場を通じて舞台装置は雑バクであり、照明は手につかず大事な場所で消灯して声ばかり聞かせたこともあった。

群衆の行動は幾らか訓練されていた。併し実験室から出た研究態度で演じたとしたら今回の演出はたしかに失敗だった。

その上、勝利に拍手を送ることだけ知って憤怒や激情に野次を飛ばすことを御存知ないインテリばかりだ。われわれの演劇がほんとうに解かる筈がない。

又プロレタリア演劇として演技上に多くの欠点を持っていた。併しここではその演技に対する一々の欠点は述べない。劇と観客層に就いて述べれば足りるのだ。

英国軍艦の士官達が自国の勝利に歓喜して「英帝国万歳」を三唱した時、何故野次を入れ、或はスローガンを生かす丈の意気がなかったのか。「馬鹿ノ」もある。「帝国主義をぶ××ぶせノ」「打倒軍閥ノ」もある。かかる場合に処して、われわれのスローガンを高唱するには訓練された観客を必要とする。最後の幕切れで、群衆が英国士官を倒し官×（憲）を追いつめて「今や支那のプロレ

タリアートは立ち上った」と旗を高く揚げた時、拍手するのみがプロ演劇のほんとうの観客ではない。プチブルの勝利感にうったへた小児病的叫びに過ぎないのだ。

要するに今回の公演演技の拙劣さによるが、観客層の甚しき反動性によって充分の効果を挙げることは出来なかった。

われわれの演劇は、インテリの研究対象でもなければ、プチブルの慰安のお役目を果たす玩弄物でもない。労働者大衆の組織の中に深く根を下し、××（共産）主義的意識を高潮したものでなくてはならない。』

ところで、これは八月八日に公演が持たれたのであるが、十日には、関西小劇場は、その主事である畑山茂を除名する声明書と理由書を発表した。

これは除名声明書、理由書を持っているが、ここではその全文を発表するのは別の機会に譲るが、内容は、関西小劇場を新興劇団とし階級的立場に立つものとし、畑山の行動は非階級的であり劇団員としての資格のない者であるから除名したというのである。

畑山は、劇団に計らず「関西文芸」八月号に「見よ甦生したる我等の陣容」なる一文で

十月公演の予告を発表、その構成員は従来の劇団員と異なり、上演脚本は反動的文学青年のものを発表しているのである。
声明書には二十名の劇団員の連名によって

関西小劇場は、この内紛のあと、劇団活動の記録を残しておらず、翌六年に至って、その内の数名は大阪戦旗座に参加してきたのである。

さて、もう一つの事件というのは、この年の年末、道頓堀の中座（松竹経営）において「全関西新興劇団連合公演」が持たれたことである。

（つづく）

〈補〉

「大阪地方労働運動史年表」の昭和五年の項の〈文化運動〉欄には

「演劇活動の高揚など」

1月 大阪戦旗座、他の左翼団体とゼネロ

ー争議に出動

2月 大阪戦旗座の争議応援の移動公演ま

すまず活発化（難波銅鉄工場・浪速染工場など）

3月 大阪戦旗座 盛文館争議に出動

4月 大阪戦旗座 東大阪バス・鈴木製帽
・妻田鉄工・キリンシヤツ・明星ホーロ
の各争議団へ出動公演
と出ている。前半期の移動公演の具体的活動の参考になる。

☆本稿の主な資料

- (1) プロレタリア機関誌「プロレタリア演劇」第三号（昭和五年八月号・発売禁止）
- 第四号（同年九月号）
- 第五号（同年十月号・終刊）

「編集ノート」欄の内に、二つのことがあったが、終刊のため実現しなかった。

① 過般大阪戦旗座及京都青服劇場の代表者が上京した折、機関誌部はこれらの同志諸君と懇談会を持ち、有力な意見を聞くことを得た。

② 次号は××（革命）記念のための特集記事を満載する。

なお「プロレタリア演劇」は昭和五年六月創刊、同年十月廃刊したが、その理由は「当時プロレタリア演劇運動全体が大衆的基礎の



劇団又通信

青年劇場

◇九月一日 稽古場びらき
稽古場が中央線信濃町駅より5分。6間×4・5間の広間を、労音よりおかりすること出来ました。これで念願の都心進出が実現。

◇九月二九日～一〇月三日。日本青年館ホールで、シエイクスピアの「ロミオとジュリエット」(演出瓜生正美)の公演。

◇一〇月七日～一〇二三日。「ロミオとジュリエット」の富山県巡演。一〇月二五日～二日四日。九州巡演。二二月八日～二二月二三日。関東地方巡演。

◇一九七二年四月一三日～一七日。日本青年館ホールで、原作・霜田正次 脚本・勝山俊介「日本兵」を上演。

◇一九七二年四月開所青年劇場付属養成所(第四期)。研究生募集中。

(東京都新宿区信濃町二五)
劇団いこら(有田演劇サークル)

に理解したいのです。

(青森市新町バスセンター内)

青森労演事務局 川越晴美)

名古屋芸術劇場

東リ演の総会とゼミナルからの数々のことを学び、今新しい意欲に燃えて活動にとり組んでいます。

当面の活動計画は次の通りです。

◇一月二八日 第八回南部青年劇場
熱気に満ちた青年劇場をつくらうと、実行委員会の核として活動中です。名芸はプレヒトの作品をもって参加することを決定、現在話し合いを進めています。演出は柘植洋にきまりました。

◇二月初 第三回小劇場公演

青年劇場でとりあげるプレヒト作品を引き続いて小劇場として上演する予定です

◇二月一九日 第四回南子供劇場

児童劇で参加、その準備に入りました。

◇その他 九月一日より、第3期生の養成教育を開講しました。

(名古屋南区汐田町三十四〇)
劇団なき

近況

①西リ演の総会・ゼミナルで先輩劇団から学んだことを整理中。

②伊藤貞助作「村の保守党」栗原省作「伝説・姥が滝」を九月末から公演。

③資金あつめ。

(和歌山県有田郡湯浅町大字湯浅 一二五九一)

劇団権兵衛

いま私達は「若者たち」の稽古に全力を注いでいます。この劇は、映画や青年劇場で上演され、現実の厳しい社会の波の中でゆらゆらゆれ動きながらも、力強く生きぬこうとする青年の姿を描いたものです。

登場人物が直接私達です。それだけにやりがいがあり、頑張りたいと思います。十月末公演を目指しております。

本年は、既に二作創作し、発表してききました。一作は、職場の悩みや合理化をあつかった「仲間たち」。二作目は、沖繩の厳しい現実と生活をあつかった「沖繩」。

私達は、働らく者、しいたげられたものであり、一日も早く国の主として生きられる日を目指して、基本であり、その日を

かちとるために、小さくとも頑張ります。

(長野県上伊那郡箕輪町一〇七〇)

青森労演

◇地元劇団と労演とのかわり

青森県労演の一員として、青森労演は、例えば、「弘演研」との提携を具体的につよめてきました。そうした観点でみると、今年七月に開かれた第9回全国労演総会でも、「劇団との連帯」という問題提起の中に、地元劇団との「連帯」についてふれられていないことは、いまの労演運動の不十分さの一つといえます。

私たちが、地元劇団との提携を大切にするのは、地元劇団の公演成功、労演の組織力が一定の役割を果たすこと、いうだけではありません。労演活動家の文化性と民主主義の思想を豊かに高めていくために、地元劇団の演劇創造の現場に直接かわりあったり、またそれらに関心を新鮮にもつことが大事な意味をもつからです。

労演活動家が、職場の仲間の複雑な感情のヒダのすみずみにまで影響をあたえているようになることが、サークル活動の分野が必要です。演劇の魅力、芸術性をゆたか

◇八月二〇日～二二日。東リ演総会・ゼミに参加。議長団梅津、劇団代表河野。事務局として小沢。ほかに9名参加。

◇一〇月一〇日劇団員笹本元美と山岸英子の結婚式。

◇一〇月二六～二九日。県民会館小ホール小谷道雄作、梅津幸三演出「あけぼの」イソガンクにてイソガンクにて、泣き笑いしながら毎日すごしています。来年は、泣くヒマもないくらい忙しくなることでしょう。ガンバリます。

(甲府市青沼一八八五 梅津幸三方)
福井劇の会

二年前に、創作上演した「エリーゼのために」を、福井自由舞台の坪川健一氏(「逃散」の作者)や原作者加藤忠夫が更に手を加え、改稿の脚本をもって、福井劇の会福井青年劇場、福井自由舞台の三劇団統一公演を行います。また、民芸の宇野重吉氏が約一ヶ月間福井に滞在して、演出指導をして下さいます。全ての福井の演劇活動家と福井出身の専門演劇人との一体となった演劇運動の統一公演となります。

宇野重吉氏は、私たちの願いを快諾して下さい。

ございました。その経過については、いづれまたの機会に御報告します。

創作劇上演運動を、演劇分野だけでなく文学分野と共にすすめて来た福井ではその実りも大きく、観客動員においても、この秋は二千名を予定して取りこんでいます。今まででない、大きな、又、深い創造活動を展開しています。創造理念の違った三劇団が統一して、七〇年代の福井での演劇運動をどうすすめるか、私たちはこの公演に期待をこめて頑張っています。

公演日。十一月二十五日、二十六日、両日とも夜六時より。福井市文化会館にて。
(福井市宝永町一三七六 江頭方)

劇団未来

◇七月二日より五日間にわたって、私達は大きな喜びと決意をもって、第9回総会を成功させました。その余勢をかって、大量? 14名が広島での西リ演ゼミに参加、勇んで帰阪した次第です。(広島のみなさん、お世話になりました)

◇第8回公演を「日本の公害1970」に決定。創立9年目の歩みをはじめていきます。創設も急ピッチになってきました。

ころ。皆頑張っております。

田中澄江作、大岡欽治演出「つづみの女」
(近松堀川波鼓より)

時 十月十八・十九・二十日

所 大阪郵便貯金ホール

なおこれは、(大阪文化祭参加作品)になります。

(大阪市南区上本町四一六二五蔵ビル)

金融演劇サークル

いよいよ劇団「大阪」として発足を決定しました。現在事実上合同している二つのサークル、「金融演劇サークル」「全損保地協演劇サークル」は、準備中の劇団化を銀行の中のそとを終えて、正式に決意しました。十一月三日・七日の総会で、劇団「大阪」を発足させます。

すでに一カ月強の総括を終えて、現在劇団化と総会の準備にとりかかっています。

創造活動は、三班に分れて、①チエホフ「熊」堀江博之演出 ②新人を中心に熊本一演出 ③創作を一本生み出す班 の三つの公演をやりあげます。また、春には創作劇で創立公演を、中谷絵氏にお願いし、準備しております。

◇うれしい話題は、創造面での質的な向上を目指さなければならぬ現時点で、関西芸術座の波田久夫氏を客演に迎えたことです。劇団員一同はりきってとりこんでいます。

◇第8回公演

ふじたあさや作「日本の公害1970」
寺下保演出
とき 一〇月二三日(金)六・二〇
一三日(土)二時、六・三〇

ところ 大阪郵便貯金ホール
乞うご支援、ご期待、ご観賞を!

◇太鼓を中心にした民族的小型作品も、相変わらずとびまわって公演しています。

大型公演と小型公演を二本足の活動と考えている私達はこれからも精一杯ガンバリつづけます。

(野田)

(茨木市駅前一九二二 森本方)

劇団虹の会

東リ演、演劇ゼミナールに当劇団員2名参加し、東リ演参加劇団の活動報告や、東リ演今後の方向などの話し合われた中で、私たちも、学習をかさね、近い将来に是非同じ道に進みたいものと念願しました。

いよいよ「劇団」として、大阪の観客に責任のもてる活動をしよう、各自、自分の生活を再点検し、ひきしまったおもちで、劇団化をうけとめております。皆様のご支援をお願いします。

「銀行の中のそと」に対する皆様のご支援ありがとうございました。今後ともよろしく。

(情宣部 水谷雅子)

(大阪市都島区中野町五一二八)

京浜労演

京浜労演は発足してより5年の歩みを経て、いま新しい発展期にさしかかっているが、この間に、川崎及び横浜の文化情況に大きな影響をもつに至ったと思っている。二年ほど前に、京浜協同劇団と連携して「明日ぼくらは」の自主企画例会にとりくみ、いろんな批評を得ながらも成功している。

京浜労演は、規約第4条4項に、職場演劇、学校演劇、地域劇団との協力とあるように、民主的な地域劇団との協力をたえず考えている。そこで、少し意見めいたことになるが、地域劇団の中に、ややもすると人間を規格品のように、てんけい的に取扱

今年の十二月にはアルグゾフ作「私のかわいそうなマラード」を上演の予定。正劇団員で練習にはいっております。それと平行して、新人教育(期生第一回)を来春二月、〃はだしの青春〃を卒業公演にとはりきっております。今後とも御支援、御鞭撻のほど、お願いします。

(銅路市貝塚町一の一四 加藤猛春方)

演劇集団息吹

現在、東大阪市会議員選のさ中。昨年の革新統一市長が誕生後、初の市会議員選。革新市政をさらに発展させるかどうかの大切な選挙です。共産党は九名(三倍増)の議員という府下最大の議員団を目指しています。私たちは、文工隊をもって奮闘中。この選挙が終了しだい、「のんだくれ」の創造に入ります。12月13日に3ステージ一八〇〇名動員を目指しています。

(八尾市堤町一の一四〇)

劇団潮流

先日、九月十四・十五の両日、京都初公演「うばすて異聞」を終えまして一段落。つづいて次回公演、劇団総力をあげて、近松の時代物になかばとりかかっていると

うきらいがあることについて、もっと人間の持つ心の動き、内面を大胆に表現する芝居の生まれてくることを期待したい。

(佐倉純一)

(川崎市本町一七七八)

劇団月曜会

ゼミナール、成功してよかったですね。あのときはみんななごやかにニコニコしてましたが、帰ったとたん、火がついたようにケンカしいしい追いまくられています。

今劇団では、「呑んだくれ」再演に先にとりかかるか「武一揆百年祭」の企画を先にするかで、すったもんだやっています。

「武一揆」の方は、明治四年の広島県内一円をゆるがした農民一揆で、三年前に一度やっています。その拠点になった地元からの要請で、書きなおして、なんとかやれんかということ。本当は嬉しいことなんです、なんせ力がないので。

大勢としては、「呑んだくれ」再演を来春に延期して、そっちにかかることに落ちつきそうです。決まれば十一月中旬、広島県山県郡千代田町という農村で。

(広島市庚午北二丁目一二の二八)

群馬中芸

私共は本年十一月で10周年をむかえることになり、演劇センター建設運動、研究所活動、親子劇場運動など、私達を囲む地域での活動は一定の前進をみながら、一方地域専門劇団としての創造の「質」やその方向の問題、又、創造集団内における民主主義の問題、創造教育を含む教育活動の内容の再点検、劇団経営における前衛性の問題など、いままでの劇団体質に関する重要問題が山積し、その解明に具体的実践をふまえて、取組まなければならない状況です。

特に地域専門劇団として私達が果たすべき任務とその役割については、日本の政治文化状況の中で「われわれは今の場においていかなる役割を持ちいかにしてその任務を遂行せねばならないか」という問いを自らに課して、日常的活動の中で一つ一つ明らかにしてゆく事に取組んでおります。そうした意味からも、東リ演劇協会資料に揚げられた問題提起は、私達の胸の内に深く落ちこみ、「是非参加したかった」という思いが響いてきます。

では、最近の活動について概要を記します。

- ①第7回こども劇場「三郎と山猫」は、6月23日部内発表の形式で仕上げ、7月より活動に入りました。群馬、長野、埼玉の小中学校での公演活動で現在までに62公演を終了、12月までの目標40公演中、すでに26公演が確定しています。
- ②第8回高校巡演劇場は、ギンター・ヴァイゼンボルン作(加藤衛訳)「天使が二人天降る」。関東地方及び新潟地方を11月より巡演。年内目標を35公演とし、普及活動に入っています。
- ③研究所の活動は現在専攻生を含め30名。特別公開講座ももうけ、教師、労働者、市民と共に、「演劇を語る夕」として意義のある活動を持つことができました。特に俳優座の三島雅夫さんを招き、「天使二人天降る」の稽古を見ていただき、具体的な指導をうけたことは、中堅演劇陣にとって大へん有益でした。「演劇を語る夕」のカリキュラムは次のようなものでした。

④群馬文団連の仕事としては、幹事、事務局団体に再選され、群馬における公害資料の編集、又、関越高速道路開発などにもなる史跡破壊に対する闘いなど、文団連外の文化団体、市民と結集して「郷土破壊の実体と文化の闘い」のセミナーを企画。その外にも、県民会館の不当な使用料金、群馬会館を文化団体に開放させる運動、官製下の団体に對する優遇処置の差別の問題(一例でいえば群馬交響楽団は三〇〇〇万近い国費・県費の補助と稽古場は高崎市から提供されている)などにとり組み、文化的要求として自治体につきつけ、対県交渉の請願運動も10月から展開する準備に入っております。(中村欽一)

(前橋市昭和町三一五一―)

四日市市民劇場

仲間間の急速な減少と、中心になるべき劇団員の欠席などで、劇団の体質が、めっきり弱まっていました。

しかし、東リ演、三劇協の中で、学び、経験したことを軸に、体制を強固にしよという全劇団員のきびしい自覚の上に立つて第四回三劇協(三重県地域劇団協議会)総会に向けて、きめ細かい討議を重ね、具体的目標も決め、明日に明るい展望をもって頑張っている所です。

新しい仲間も増え、発表を来年二月末とし、目下、作品選択に懸命です。

三劇協総会の報告

九月十八日(土)十九日(日)にかけて第四回総会を、三重県の北部、四日市の西方、湯の山温泉近くの尾高高原で行ないました。天気晴朗であれば、伊勢湾が一望できる高台ですが、生憎の雨で残念でした。

前夜は、フォークダンス、歌に二時間、つづいて部屋別交流会、翌日、午前中に総会を、午後は、やや小康状態となった空模様の下、戸外で、ゲームを楽しみました。これは、過去三回が、新人、中堅、幹部

に分け、テーマを別に持った分科会に開始したのを、今回は、総会を除きリクレーンを中心と考えたためのもので、実に和氣に満ち、楽しい交流が生まれました。前夜の部屋別交流会に、ひとつのテーマが与えられました。それは、七〇年 演劇行動で全県一つにまとまった公演が出来たその積重ねの上に立って、七二年度は、一つの作品に結集する合同公演をしようという事です。

これは翌日の総会に、特別提案として出されましたが、結局、この総会に於ては、その意義、具体的内容や問題点を掘り起す準備会をつくり、その集約を検討し、全劇団員が燃えてゆく中より、実行委員会を作ってゆこうという方向に落ちつきました。

(総会参加者四名)

役員は左の通り決まりました。

- 会長 森 賢郎(四日市市民劇場)
- 理事 今中敏文(津市演劇集団MU)
- 杉森正美(上野市民劇場)
- 竹中 亨(名張演劇サークル)
- 岸 武男(劇団津演)
- 伍藤和義(桑名市劇団がお)

(群大医学部助教授) 現代の演劇 入江洋佑(東京演劇アンサンブル) 古典芸能と文学 根岸謙之助(万葉研究者) ぐらしとことば 上野勇(日本民俗学会会員) ヘスタインベックの文学 大浦暁生(中央大学助教授) 現代に於ける演劇の問題 三島雅夫。

④群馬文団連の仕事としては、幹事、事務局団体に再選され、群馬における公害資料の編集、又、関越高速道路開発などにもなる史跡破壊に対する闘いなど、文団連外の文化団体、市民と結集して「郷土破壊の実体と文化の闘い」のセミナーを企画。その外にも、県民会館の不当な使用料金、群馬会館を文化団体に開放させる運動、官製下の団体に對する優遇処置の差別の問題(一例でいえば群馬交響楽団は三〇〇〇万近い国費・県費の補助と稽古場は高崎市から提供されている)などにとり組み、文化的要求として自治体につきつけ、対県交渉の請願運動も10月から展開する準備に入っております。(中村欽一)

(前橋市昭和町三一五一―)

山本淳子(四日市市民劇場)

会計監査 若林一博(劇団津演)

四日市市民劇場 四一九

アンデレセンター内)

劇団協同

七月二三日、立川社会教育会館ホールでの第15回公演「三年寝太郎」「多摩のとらやん」「おとなのためのおとぎ話」は、昼夜計一千名をこえる観客の支持をえて成功をおさめました。

しかし劇団の総括では、これまでになく観客との交流はえられたとしても、演目に観客対称が不明確な点があり、創造的な弱さが出た。「寝太郎」の演出にも甘さがあり、財政上の赤字も手痛い。などが話し合われ、しかし、この公演で得られた三多摩に根をおろした演劇文化の基礎は、新しいちからを湧きたたせました。

「寝太郎」「とらやん」再演。一二月二七日(土)小金井公会堂。

市長選挙では、劇団でも、小型式出演、司会などで奮闘。ついに阿部行蔵革新市長の実現をかちとりました。

稽古場建設のカンパニアを展開中です。

◆九月〜十月は劇団員拡大月間。

(国立市北三二)

人形劇団京芸

総会の御成功おめでとうございました。例年総会時期に京都独自の「地藏盆」の地域小公演のため参加できなくて残念です。総会での中心課題であった「創作活動をどう発展させるか」私達にとっても切実な問題です。

今年には京都プロックの日常活動を活発にし、革新、自治体のとりである京都の民主府市政にふさわしい、質の高い創造普及を目ざしたいと思っています。

東西両演の作家、演技者、その他各部門の交流例会などもちたいものです。皆様の御健闘を祈ります。

土の会

(宇治市白川鍋倉山35-20)

九月二日、区民会場で第10期生の終了発表会を行いました。劇団では期生を新人会と呼んでいます。今までやって来た基礎訓練をそのままの形でお客さん、劇団員に観てもらい、同時に劇団員も何らかの発表を行います。いわば劇団にとって、日頃の

訓練を競う日です。くわしくは10回生の文集にのせました。実費百円でおわけししますのでお申し込み下さい。

さて劇団は、五人の劇団員を正式に迎え入れ、秋の公演(11月12日の東働演12月4・5日の自主公演)の取組み、矢野喬作「異聞お伽草子」の猛稽古におわれています。これは一昨年の「なまねこさま」に続く矢野さんの新作で、作者は、これまでになく張り切りようで劇団に新しい創造の質を求めて挑戦してきています。劇団もそれに答えて連日の稽古は火花を散らす熱気、まさに夏の東リ演総会で問題となった作家と劇団の関係が新しいつぼの中で実験されています。前号の通信でもご案内しましたが、現代と室町末期の下剋上の時代をつなぐ風変わりな芝居です。どうぞご覧下さい。

(岩田 稔)

(東京都港区西麻布四一五一九)
舞芸小劇場

参院選挙用に、豊島区の民主紙芝居サークルの作った紙芝居「春日さんと握手」をうたごえ、その他の文化活動家と組んで人物ごとにセリフをわけたり、歌ハミング

を入れ、通算十一回、動員数一〇〇〇名をかちとりました。(4・5人の小集会から大中集会)。どこも好評で、みた人が、これなら自分たちにも出来る、その人達を創意で無数の小集会に発展していきたい。日常的には、月二回、5・6人で戯曲読書会を開き、チエホフから始めて、タカクラテル訳の「ワーニャ伯父」、エルミローフの「チエホフのドラマツルギー」の「ワーニャ伯父さん」、「三人姉妹」にもはいり目下登場人物の研究をしています。このあとチエホフの一幕物、「桜の園」にすすめていく予定です。十一月初め、豊島区でい

ろんなサークルが集まって文化祭をするように組織中です。

(東京都豊島区高松二二〇今成方)

演劇サークル「土くれ」

事務局の皆さんのご奮闘に敬意を表します。先に、浜松で開かれた東リ演ゼミナールには、私たちのサークルから3名が参加貴重な経験を持ちかえってくれました。

目下、私たちは、10月30日の第6回公演山内久作「若者たち」にむけて全力をあげて頑張っています。

政治的にも経済的にも問題は山積。そうやすやすとは、明るい未来はやって来ません。それでもやらなきゃ、永久に前途はひらけないですからね。頑張らなくちゃ!

(東京都目黒区緑ヶ丘3-11-2)

(石塚方)

大阪協同劇場

11月17・18日劇団公演

プレヒト作「カルラールのかみさんの銃」と、「沖縄案内」(創作です)の二本立て「沖縄案内」—今回は、15分程度にまとめてしまいましたが、沖縄の全面返還を目ざして、一本でも十分上演できるものに仕上げつもり。10月1日は、第二期新劇教室の入所式。研究期間は一年間。若い層に期待しています。

(吹田市津雲台5-15D53-307奥井方)
上野市民劇場

広々とした会場で盛り沢山の企画と今年も大変充実したセミナーでした。からっかぜの仲間の皆さん御苦労でした。学ぶところが多々ありましたが、取り分け全国の仲間との報告や交流の中からややもすると内

点検することが出来たことは大収穫でした。集団民主主義(創造的・組織的・人間的)の確立を課題として今後の活動に多くの学んだ教訓を活して行く決意を固めています。

これからの活動計画!

◆地域のすみずみまで僕らの舞台をとどける方針に沿って昨年好評を博した「夕鶴」の移動公演。

◆47年に創立20周年を迎えるための記念行事と公演活動の準備として、創立20周年記念、総合5ヶ年計画(稽古場建設その他)を考えています。

御支援、御協力をお願いします。
(三重県上野市丸之内・中央公民館内)
人間座

全国のなかまの皆さん。御活躍をお喜び申し上げます。

わたくしたちは、昨秋以来、創作劇「人形師卯吉の余生」(府民劇場)の巡回公演を、地域の観客とかたくむすびつく方向でつみ重ねております。すでに、福知山、綾部を皮切りに、京都市内、舞鶴市、宮津市加悦町、野田川町で、計十回上演しこの秋

の十月末には、大江町でもとりくみます。いづれも地域のはたらく人たち、婦人、老人、教師の方たちと話し合いをつみ重ねてゆきつつ、地域の文化の問題をいっしょに考えてゆく姿勢をかたく持してオルグをします。それが座のささやかな矜持です。今年の十二月九、十、十一、十二の四日間、「府民劇場」には現下の「不況」そのものを劇化してみるつもり。

(京都市左京区下鴨東塚本町四四)

若者座

八月二二、二三日、広島での西リ演・演劇ゼミナールには一三名参加しました。特に新人の積極的な参加により多くの貴重な体験を持ち帰ることが出来ました。

十月二四日、第八回公演「若者たち」を天羽新平の演出で、宇部労働会館で行います。去年よりさらに団員が増加し、豊富なスタッフを有して公演出来るのがなにより強みです。春の第2回ちびっ子劇場の成功を土台に、今年の本公演も昼夜二回とも超満員の観客動員をめざして宣伝カーとポスターで普及しています。計三回の合宿を

(30頁に続く)

「獅子」——劇団福演——

土屋 清 (月曜会)

相当に類型的演技をふくみながらも、全体として好感のもてる、面白い舞台になっていました。私の劇団でも二度ほど上演しているせいか、どうしても自分のことと比較してしまいますが、農村の風土というか、匂いというか、そうしたものは、広島の人たちの舞台よりはるかによくできていました。人物のタイプづくり、衣裳、小道具、装置の隅々にまで、それはよく眼をくばってあるのに感心しました。ただ、それらの細かい工夫が、タイプ、風土の形成にとどまっていた、あの、戦時中の、押し殺されるような空気のなかで爆発する人間性——そのすさまじいまでの迫力にまで迫っていない、そこに結びつけられたものでなかったのが残念です。

後半の芝居のたみこみよりは、まことに妙を得ていて、ぐいぐいひきつけられるものがあったのですが、前半での、かんじんの「雪」と「圭太」をめぐる「吉春」と「お紋」

の関係が、底深くでいかなかったために、分厚い下敷きのある面白さにまでなっていないように思えます。

演出者が「郡六」という相当荷のかかる役者も兼ねていたせいか、その点ではやはり、やや近視眼的な演出になっていて、部分的形象に追われて、中心になる太い行動線をひきだし得なかったように思えます。

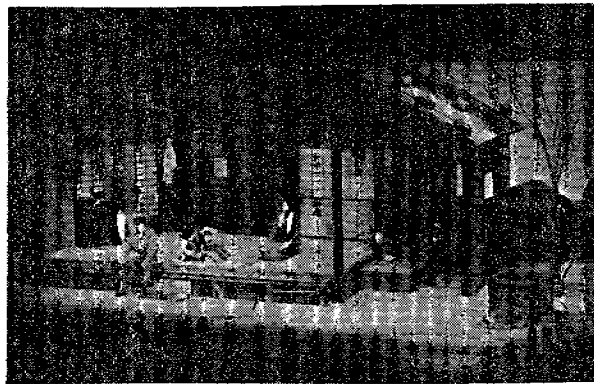
演技の問題では、古い劇団員の経験主義的なものと、新人の水々しくはあるがまだ定着していないものとの混合がめだち、ところどころに穴をこしらえていました。セリフのとおりにくさ、人物関係の不鮮明さなどという基礎的な問題も含めて。こうしたことは、私たちのまわりに共通してある欠陥ですが、福演の場合、すこし演出者も演技者にたいして手加減いうか、甘やかしていた面もあったのではないですか？ 正劇団員六名で、あとは全部新人の協力出演という事情はあったにせ

よ、まったくの外部の新人に対してもすこしも遠慮する必要はない筈です。演出の柏原武蔵という人物は、演技者に対して手加減をするような人にはまったくみえぬのですが、もし、私のみたような点があったとすれば、もっとほかのところでの原因——柏原演出が、若干でもあたりをおもんばからざるを得ぬような内部的要因、演出が存分に力を発揮しきれるように押しあげていく、劇団の創造的団結——劇団組織の問題、等も介在していたのではないかと、これは憶測ですが。(要らぬ世話)

劇団福演というのは、実に魅力ある劇団です。僅か六人といっても、その一人一人がうらやましいくらい芝居好きの、それぞれに独特のファンをもった劇団員なのです。劇団をとりまく観客層も、厚く、近い関係をもっています。こんどの公演でも、雨の中を、開演一時間前からお年寄りの客がかさをさして行列していたのには驚かされました。また福山市から約一〇キロ離れた鞆(鯛網で有名な鞆の浦)という人口一万数千の町での地域公演も、鉄工所のオヤジさんや、漁師や、学校の先生、映画館主やらが、かけずりまわって準備してくれたものだといえます。

そうした観客との関係を保っているからこそ、半分以上の出演者を、非劇団員の新人に頼ってまでこんどの公演を実現できたのでしようし、劇団の本格的な建設の問題も、本気になって訴えれば、ガッチリと受けとめてくれるに違いない、そうした頼もしい存在にどうかこまれていく感じをうけました。

事実、協力出演の「才」、「節」、「彦造」



(劇団福演 一獅子一 の舞台)

あるいは「源」といった脇役、小学生役の「春二」にいたるまで、初歩的な問題はあるにせよなかなかの好演で、よく全体の中にとけこんでおり、なんでこれらの人が劇団員でないのか首をかしげたくらいです。ごっつい劇団をめざしての、劇団福演の本格的な活動が、ここに始まったという感。その出発点としては、まことにふさわしい舞台であったし、またそれを支えるに充分な熱気

劇評

銀行の中のと——劇団「大阪」準備公演——

大塚 雅 春 (劇団 未来)

金融演劇サークルと全損保地協演劇サークルが合同して、劇団「大阪」が誕生するといふ。両サークルともに六年間の地道な活動を経ての合併である。金融に働く仲間組織され、金融の仲間を観せる事を土台に芝居を続けてきた両サークルも、今では他産業で働く中広い人達によっても構成されており、観客層もそれによって広がっている。

劇団化がそれは容易な事ではない。しかし平均年齢25才という若々しさはいかなる困難をも克服するであらうし、総勢40名の意気と情熱は、集団の相言葉である「大阪の働らく者の心に根ざした舞台創造を」保証出来るものと期待している。

その、劇団「大阪」結成の為の準備公演である「銀行の中のと」(井上満寿夫作・熊本一演出)が8月11・12日、大阪郵便貯金会館で催されたが、後に劇団未来(8名)と演出・出演者(7名)が参加して、合評会がもたれた。そこで出て来たいくつかの問題を、

ぼくの私的な感を含めながら報告したいと思
います。

演出・出演者側(以下●印)この作品は一九
六九年十二月に『銀行生活』としてすでに上
演しているんですが、その比較でも結構だし
今回の舞台の印象批評からでもひとつ。

劇団未来側(以下■印)一生懸命体ごとぶつ
かっている事に感動した。しかし観たって何
かしら物足りないを感じた。

■地域の仲間を根を下した活動を目指すとい
う点において、金融の職場の問題に取り組
まれた事はすばらしい。

■テーマがはっきりせず、モヤモヤしたも
のが残って、すっきりしない。ドラマの筋は
簡単で明瞭である。にもかかわらず、テーマ
がはっきりせず、モヤモヤとしたものが残る
のは、どうしてだろう。

■導入預金のカラクリがわからない。した
がって何故預金した自分の金が引き出せない
のか解らず、農協の役員が大声でガナること
だけが耳につく。

「私感」もし、農協のいうように預金が払
い戻されていたら主人公である瑞江は死なな
い。

■活動家新見の日常の地味な活動が浮いて
しまう。

■村谷がカッコ良すぎて、新見の行動がは
っきりしない。

■組合役員である迫川が、ダラ幹を類型化
しすぎて、薄っぺらい。

「私感」サークル活動を通して地味に活動
している新見はそれなりに解るのだが、問題
は村谷である。一見良心的に見える村谷が、
あまりにも前面に出すぎている。たとえ、
宗藤常務を迎えての職場集会の場で、新見は
瑞江自殺事件の本質を何んとかはっきりさせ
ようとすが、村谷が、スーパーマンになりす
ぎて、その事がはっきり出てこない。勿論、
企業のきびしいしめつけによって、バラバラ
にさせられている状況の中で、新見の行動が
ある程度浮いてしまうのは解るのだが、村谷
の行動は必要以上に新見を浮かしてやった。

さらに組合役員の迫川が、企業ベッタリのダ

くても済んだだろうし、(勿論この事だけが
原因ではないが)、支店長の首切り、藤崎の
逮捕はありえない、とすれば、ドラマが進展
するに従って、何故あの預金が預金者の手に
戻らないのだろうと疑問がふくらむ事は事実
である。さらに――

■瑞江が何故死ななければならなかったの
か、その必然性がはっきりしない。

■金融再編成による企業のおしこみ、権力の
大きさ、その怪物ぶりをもっと大きく描いた
方がより瑞江の死が観客につきささるのでは
ないか。

■瑞江を死に追いやったものがはっきりせ
ず、その者に対する怒りがこみ上げてこない
むしろ、かわいそうになアで終ってしまう。
●確かに死に対する必然性が弱い部分があ
る。しかしあの状況の中で死を選んだ瑞江は
少々異常である。

「私感」瑞江の死に対する必然性が弱い事
は僕もそう感じている。その一つに瑞江の人
物像がもうひとつはっきりしない。即ち、
万博用地買収に対して死をもって反対の意志
表示をし、菜の花でうるこの田畑を農民の

ラ幹をあまりにも一面的にとらまえてはいな
いだろうか。登場してきたとたんにその事が
解ってしまう。銀行面接にともなう合併問題
で、新見と討論するが、軽薄さだけが目につ
く。迫川のもっている思想性は、それなりに
一本筋が通っていないかならぬと思うの
だが。

■舞台の限りでは、自分は明日から何をし
たら良いのかわからない。

●方向性を暗示するためにこの舞台を創っ
たのではない、この現実のきびしさをはっき
り出す事の中で、瑞江の死を一人一人がどう
とらまえるかが問題だ。

「私感」瑞江の死を一人一人がどうとらま
え、どう乗り越えようとしたのが、はっき
りしていれば問題はない。しかし、主に演出
の問題であるが、あれだけ、ひつこく観客を
同化させてしまうのはどういう事だろう。効
果音楽といい、菜の花の処理といい、やはり
うなづけないのである。

■ずい分悪い事はかりをならべたようだが、
総勢40余名の、熱気あふれる舞台は、やは

手から取り上げるなど叫び続けた文を、瑞江
はどう見ているのだろうか。支店長代理であ
る神埜に、銀行の仕事は野良で百姓仕事を
しているのとはちがうんだからと云われて
キッと神埜をにらみ返す。或は、同じ村の銀
行の守衛をしている倉井に、なアおっちゃん
、夢みへんか? / 夢? なんの? / たら
んぼや菜の花の? /

一見、日常的に流されてしまう会話の中
に、根強く残る文の影響をはっきり見つけ出
さなければならぬだろう。つまり、必死に
銀行員になり切ろうとする瑞江が、どうして
も銀行員になり切れなかったのはどうしてな
のだろうかという事を、もっともときびし
く、深く、煮つめなければならぬのではな
いだろうか。瑞江はいう。銀行は、お金も
人間も食べてしまう――銀行の責任を個人の
責任にすりかえ、すずしい類をして銀行はま
すます太っていく。と。瑞江が必死に銀
行員になろうとすればするほど、この事が、
よりはっきりと見えてくるのだろう。

死をもって問題の自己解決をはかった瑞江
は、演出のいうように少々異常なかも知れ
ない。が、しかし、それでは瑞江を死に追い
やったものが何んなのかというかんじんカナ

り迫力があつたし新鮮であつた。さらに演技
陣の層があまり厚くなつた事は強みだ。
大阪にデッカと根を張り、大阪の働く仲間
と一緒に、組織的にも、創造的にも一まわり
大きくなるうとしている劇団「大阪」に、僕
は大なる期待をもっている。

第9回『東京働く者の演劇祭』

11月11日(木) 6:30より
全通・全電通合同

芳地隆介作「橋のある風景」
演劇集団がどう
プレヒト「白墨の十字」「職業幹旋」

11月12日(金) 6:30より
土の会 矢野喬作「異聞お伽草子」

11月13日(土) 3:00より
劇団泣断(理大II部演劇部)

麦の会 集団創作「阿Q謀反伝」
11月14日(日) 1:00より
るつぼの会 劇団創作「ある青春」

民衆劇場 相沢嘉久治作「風・雪・雨」
社会文化会館ホール(三宅坂)
参加協力券三〇〇円(全通し)

仙台小劇場の再出発に拍手

作 間 雄 二

(弘前演劇研究会)

六月十七日、十八日の両日、仙台市公会堂で、仙台小劇場再建第一回公演、早船ちよ原作、作間雄二脚色、瀬川龍夫演出「キユーポラのある街」が上演された。再建第一回公演とは、劇団が謳っている文句ではない、私が「東リ演」の仲間としても、強くそう印象した舞台であるからだ。劇団はチラシに書いてある。「仙台小劇場は劇団員の減少、劇団体制の混乱などで、ながいこと公演活動を休んでいましたが、昨年から活動を再開しました。これから七〇年代の働く者の劇団にふさわしい、演劇活動を著実にすすめるつもりです。ご支援のほどをおねがいします」

仙号小劇場の体制の混乱がどういうものだったのか、私は詳しくは知らない、また知る必要もなかった。問題は、私たちの力が仲間として必要だと、求められた秋、いくらでも力を貸そうということだった。正確には忘れてたが、三、四年まえ、私の脚色の「キユーポラのある街」を演りたいという話があり、

私からも是非とお願ひしておいた。その後、劇団の言う、体制の混乱がおこったのではないだろうか、そう私は記憶している。だから、三月上旬、労音・労演の税金問題で仙台へ行き、仙台労演の事務局で早川氏に会い、「キユーポラのある街」公演にやっそこぎつけたと言われた時、ある種の感動を感じないわけにはいかなかった。良く困難を克服してきた、仲間劇団の再起に對してであり、一つの作品が（「キユーポラのある街」が）挫折と再起の橋渡し（B・G）になっていることに對してであった。〈東リ演〉への復帰は、年内は無理だと思いが、来年までには、劇団の意志を統一して参加したいとも言っていた。今年は、やっこ青森の〈劇団支木〉が加盟したし、八戸には、青年劇場の研究所にいた、新堂君を中心とした〈劇団東風（やま）〉が生まれて、今後〈弘演研〉とも兄弟劇団としてやっここうとうということになった

〈東リ演〉内での〈弘演研〉の孤獨も（奥羽B、東北Bで一集団だった）もなんとか解決しそうだ。

さて私は、六月十八日朝、弘前をたち午後には仙台に着いた。あとで聞いたが、〈劇団山形〉が前日に観にきていて、会えず残念であった。しかし、八月の「ねぶた祭り」に、研修旅行とかで〈劇団山形〉の若い人が会いにきてくれて、いろいろと、〈東リ演〉についても話しあうことができた。

劇場である、市公会堂は六百人ほどの座席で、舞台の奥行きはすこし足りないが、私たちの芝居には適当な所である。ところが、近くとりこわされるという。あとに、千数百人席数の、市民会館が建てられるのだそう。弘前でも私たちは劇場としては市民会館しかないから、劇場費を最低七万を計上しなければならぬ、仕込み費の殆どである。この事がどれほど、私たちの、労演も同様、演劇運動の障害になっていくかわからない。〈仙台小劇場〉も今後、会場探しにそのエネルギーの多くをさかなければならぬだろう。

舞台である。私は、私の作品を客席でじっくりと観るのは、観せつけられるのは、これで二度目である。正直なところ、気持ちの良いものではない。舞台の欠陥が、すべて手前への本の所為みたいな気になってくる。客

席のさわがしさに肚がたったり、遅れてくる客に、はやく席を見つけてくれないかと、気をもんだり、幕間の廊下やロビーでの客の会話に耳をそばだてたり、すぐく生理的に厄介なものである。その日は、そうでなかった。静かな暖かさみいたものが客席にあった。ほとんど若い人が占め、セエラー服が目立っていた。仙台小劇場の再建の幕あきを、じっと待っている、友情のようなものを、人いきれに感じた。

客の反応は素材であった。舞台も素材であった。二、三の俳優さんをのぞいては、みな初舞台だと、あとで早川氏に聞いた。だから演る術を持たないから、それを匿そうともしない熱演だから、ある意味で新鮮に感じた。私はいつもうちの連中に、演る力もないくせに、あるふりをすると言っている。労演の例会の舞台でも、そういうふりの演技を観ると、たちまちシラける。下手は下手なりに、役に生きることが出来るのだ。下手を匿す必要はない。しかし、勿論、下手は下手ですむものではない。基本的なものには身につけられない。それは稽古の仕様に身につけられる。例えば、相手役の台詞が聞けない（自分の台詞だけで芝居する。台詞を喋ることだけが芝居だと思っている）だから間がとれない

い。先読みする（段取り芝居）等々が、仙台小劇場の舞台にも散見させられた。初舞台だから無理もなかった、としようか……。いや矢張り初めてであればあるほど、基本的なものには大事にして欲しかった。これは演出者が責められる問題かもしれない。

もっとも、そんなことにはお構いなく、トリも御愛敬で、客席は若い笑い声がよくおこり、またある時は、シンとして、目頭へ指をはこぶ女学生たちもいた。もともと、此の

「キユーポラのある街」は、若者たちに距離のある芝居ではない。その意味では、客席のほうで相乗作用があったかもしれない。だから逆に今度は、朝鮮人への差別の問題、朝鮮人の父、日本人の母をもつ、ヨシエ、サンキチ姉弟の痛み悲しみの問題、朝鮮への掃蕩の問題が、どれだけ若い客席に突き刺さっていたかとなる、疑問だと言わざるを得ない。上演意図に此うある。「この劇のなかには朝鮮人が出てくる。それがどういう意味をもっているか、それをここでへたに解説しようと思わない。日本人として、日本の働く者として、観て下さった方々の一人ひとりがそれぞれに受けとめて下されば幸いである」

確かにそれは、そうであるのだから、私は、演出における消極性を例えれば此の文章からも改めて感じる。だから、演じる側も、林永均（瀬川龍夫）、ヨシエ（阿古さとえ）、サンキチ（孝乃りえ）に、もう一つのツッコみが足りなかったと思う。尤も、私にはこれからかかる、こぼやし・ひろし作「湿地帯」が、デンと頭にあったからかもしれないが……。ジュン（勅使河原妙子）は暗さが目立っていた。タカユキは、二十才前後の青年が（大沢勝）が小学生を演じたのだから、とやかく申しあげられないが、随分と客席の笑いを誘っていた。しかし、ワルのりする人だ。しかし皆ゆたかな可能性をもった人たちだと感じた。その素材な力を大切にして欲しい。次の舞台がたのしみである。

東リ演の総会で、本がない、ないとの声を聞いたが、私は最近いたく感じるのだが（東リ演内で）本がない、書き手が少ないというより、演出家はいつたいどうなんだ、ということだ。毎年のゼミで出逢うモデル上演というやつ、職演祭の数々の芝居、いちばんの不足は演出である、と私は感じて来た。もちろん私も演出をやるから、私をもひっくり返すの談である。芝居を生かすも殺すも、演出次第であることは、今更いうまでもないことながら、矢張り東リ演各集団に、演出監視の風潮がまだ残っていないか……。

「泰山木」(京浜)「フェードル」(はぐるま)

「寝太郎」(協同)について

萩 坂 桃 彦

「泰山木」で京浜は、なにがしか賑らんできたかに見えた。

それは、いろいろとディテイルをおろそかにできないこの本の効用でもあるらしかった。やや簡做すぎる云方になるが、かつて京浜はストリートな説得型を、その芝居作りでの体質として持っているかのように、ほくには見えていた。どこか、怖いもの知らずみたいなところがある。

それがゆるいカーブで揺らいだようにおも。まだ感じとしてしかそれは云えないが、そんな気がやんわりとする。

たとえば△髪を垂らした女△などは、やはり、これまでの京浜のいきさつでは出て来ぬのだった。この役は、「泰山木」の人物の中でも厄介なしろもので、顔半分のケロイドと保育所の保母と娼婦という三つの相容れぬものを、身一つに表現してみせることは、どこ

でも余り成功していない。「泰山木」は、東リ演だけでも、ほくにとっては四ツ目だが、この役に限っては、京浜のが一番いい。

例の、神戸ハナ婆さんでも、この役の室野定子は、かなり、従来の足腰、声音が矯められていた。これらのことは、どうやら、横田治(演出)の気のはいった仕事として出て来たのだろうとおもう。

「泰山木」を、京浜が、一年中で原爆投下について、最も関心の高い八月にえらんだことは、賢明以上のことだった。そのことだけで、それは行動になった。

こういうことは、京浜はなかなかうまいとおもう。

そういう時期でなければ、この芝居の熱い情感はかもしにくいところがあるのだ。近く労芸がこれを、十月にみせてくれるが、目に見えぬハンディはあるだろう。

た程度)

「泰山木」を、その劇団に根づかせることはむづかしい。土の会(初演)の演出構成など、一定の成果はあったが、観客の胸に、匕首を突き刺すような確かさば、この本では、むづかしいとほくはみている。

(8月12日所見)

ところではぐるまの「フェードル」を、いまでもほくは愛惜している。それは岐阜が遠かったというだけではない。あの芝居もとうとう、大道具がバタバタと片づけられて、やっぱりおわってしまったのか、という愛惜である。

劇団の第32回公演として、見たひとなら分るが、あのさして広くもない稽古場を根城に一ヶ月ほど打ちつづけるという、一寸考えられぬことを、かれらはやったのだった。それも、ラシイヌの古典悲劇「フェードル」である。

ここでラシイヌ論をするつもりはないが、シェイクスピアと並び称せられた大劇作家位の知識で云っても、沙翁の壮大なロマンチズムに対して、ギリシャ美とキリスト教的情緒の混然としたラシイヌの古典悲劇。その大

「泰山木」については、ほぼ、ほくの感想は出つくしている。

単一の劇団で、これを全うして見せてくれたところはなかったようだ。一つの思想として、この本を押さえることはむづかしい。また作者もそれは避けているようだ。自然、その抒情性にもたれて、ヒューマニズムをうたうことに身を寄せがちである。そこに一種の通俗性が生まれ、舞台の人物が妙にきれいになってゆく。にくめない、ユーモラスな、かわいいうハナ婆さんの話に、話はおちてゆく。

木下刑事のりんかくなども、つくりにくいもの一つである。これは甲府やまなみのがよほど良かった。京浜の団のぼるは、分つてはいるらしいのだが、からだはほぐれない、言葉がほぐれない。振幅に乏しい。

それにしても、それは京浜だけではなかったが、瀬戸内海の離島の情緒、くずれてゆく漁民の生活の切口が、意外に見えてくぬ不思議さだった。警察の小使と東京に憧れる食堂の出前持ちのたたずまいに、それが、追って来ぬ。このことは、作者小山祐士の「瀬戸内海の子供ら」(昭和11年)以来の資産なのだ。(しいて云えば、わずかに、創芸と青年座の合同公演の舞台に、その片りんがのぞけ

回見たらもう一回見たいということである。おそらくこの人は、ラシイヌなど知らぬ人たちがいない。そして、見終って、ラシイヌを知ることができた人たちがいない。

ほくはこの事象を、はぐるまの、地域に根ざした創造体制のメリットと踏みたいのだが(実際に財政的にも破綻がなかったそうだが)それが、劇団のスローガンやアピールだけなしに、あの、うっすらと落ちた照明の下でもつれた糸玉をほぐすようにして、長い口説を語ったフェードル役の武藤幸子と観客との間で、念入りにでき上ったのであろうことを重く見る。

この場合、武藤幸子というのは必ずしも個有名詞でなくていいのである。むしろ、それは、はぐるまの創造のトータルである。つまり、登場人物十人ほどのこの芝居に、はぐるまは複雑な全力投入をしたのだった。あの稽古場をフルに利用して、客席を丸ごと包みこんだムード作りや、縦横に駆使した。効果・照明の鮮やかなアンサンブル、また、たとえば、「小さな駅」を書いた島源三が、セリフの一つもない石ころのような人物として坐っていたり、制作部の姐さん、加納美千子がい

ともあどけない少女役で出ていたり、「仕置場」の作者大谷護が、苦心さんたんの二枚目を発揮したりで、つまりかれらは、腕まきの藤沢伸二、武藤幸子らとともに、悉くこの芝居で洗ひ抜かれていたのである。多少とも内輪をのぞけるほくには、それがなかなかおもしろかった。

それはもう、「フェードル」ということで問題は限れぬかもしれぬ。よくは分らぬがはぐるまにしてからが、いまや、「創造的危機」に直面しているのらしい。そう云っている。いまだ少し正確めいて云えば、こぼやしひろしの危機感の先どりか、このところで古典劇をくぐることで、創造的エネルギーの回生を考えたのらしい。つまり末然に歯ごためをかけたのである。

地方劇団が、その実力の可能性を、どこにそしてどんな風にかけるか。かけることで地域の観客とどうきり結ぶか。考えなければならぬ問題だ。

はぐるまの「フェードル」はそのことをほくに示唆以上のこととして教えたのである。

(7月14日所見)

七月、三多摩を活動範囲とする劇団協同が「多摩のとらやん」と「三年寝太郎」で氣勢をあげていた。ほくの見た日は、夏休みのこともたちで、立川社会教育会館の場内は湧き返っていた。しかし児童劇ということで徹しきれぬ演目ではないので、厄介なお客を前にしたものだと思つた。

ここには、協同の演劇的任務のようなものが、袖の下の甲冑として出ている。たとえば幕間の「おとなのためのおとぎ話」といったたけいくふもの注目すべき試作が、殆んど客席に入らない。気の利かない佐藤栄作弥次におわつてしまった。

功を急ぐということはあるだろう。機を逸するなというものはあるだろう。ほくなどにも経験のあることなのだが、そのハネ返りがこわい。成功したと思える分だけ、そっくり臍を噛むおもいで、空しさとして返ってくることもある。このくりかえしが、劇団を疲弊させるのではないかとおもう。

やはり、演出として、「寝太郎」の随所にみられた、ああいう場当りの演技を矯め直す必要があるし、怠け者の悪知恵者がごどもたちからよこはれる程度の諷刺からもう一歩踏みこむ必要があるし、「多摩のとらやん」

のとらやんが、ああ易々とスターになってはこまるだろう。(だがとらやん役の黒田利夫はよくやっていた)

しかし、これを云うことはむづかしい。協同が久しぶりに盛り上つて来ている時だけに云うことが憚られるほどに、むづかしい。

ただ、地域の観客に根付くということは、自明のことだが、落ちていっているものを拾うようになわけにはいかぬということだ。

東り演の総会で、ほくは「創造の停滞」に就て提案した。それはどうやら頭ごなしで事実こそわぬことのようにもあるらしかつたがしかし、ほくには東り演の創造状況を見渡してみて、現状でいいという風にはやはりおもえぬ。

いま、成行きとしても、地域劇団が、生きながらえる条件として、そのシーズンデートルがきびしく問われる時期に来ているようである。それは、その劇団独自の個々であつていいし、またそうでなければならぬだろう。一つでもいい、かけがえないものを、形のあるものとして根に据えること、それが何であるかを知り、魅力をおぼえたときに、観客は離れぬだろうと、ほくはおもう。

演劇状況を現地に見る

——中国・四国の労演めぐり——

こばやし・ひろし

(劇団はぐるま)

九月二日

中国四国の労演講座で米子から始まり、福山・広島・松山・高知・徳島・香川・玉野・岡山・九洲演をめぐり歩くことになった。かつて東北を廻ったことがあるが、一つは多くの活動家に接し、また地域劇団と話合えることが楽しみでもあった。ただ、私のような労演と余り縁のない作家に会員が集つてくれるか、それだけは不安である。それに劇団では十六日から第十二回小劇場として「木口小平は犬死」の幕があくが、島源三の初演出でもあり、いささか心配。

岐阜羽島まで金森君に送ってもらい、新大阪で十一時三三分発出雲行特急「おき」にのりかえた。来年の三月十五日には新幹線が岡山までのびるそうだが、そうなれば「こだま」で二時間半だろう。

山陽線のうちは「おき」も特急らしく走っ

ていたが、倉敷から伯備線に入るや、とたんにスピードが落ちた。余り険しくはないがカーブが多いせいだろう。

中国山脈はもうすっかり秋だ。

米子の街からは何も山陰の味は感じられな。自動車の氾濫とどこでも見かける広告。個性のある街は、もうどこへいっても日本では見かけられなくなった。

労演の事務所は市民会館の前向いで、それも表通りに面した実に地の利をえた場所にある。こんな所に余り立派でない平家建が存在するのは人口十一万の米子の強味といえよう。

山陰は松江・米子・鳥取の三労演で形づくられていた。会員一〇〇か一二〇〇をよろし、もっとも健全な組織を米子は誇っている。人口比では三労演のみでなく、全国でも

二・三位であるという。

松江は小泉八雲(ラフカジオ・ハーン)以来の文化都市で、上品でもあり、バイタリティにかけ、鳥取は結成日も浅くこれからだろうだ。

サークルとしては鳥大医学部の看護婦さんを中心とした病院プロックが五分の一をしめもつとも強いそうである。

地域劇団はぐみ、ゆりかご、がもめ、蟻の四劇団であるが、ぐみが一番古く、ゆりかごはそこから別れ、かもめはさらにゆりかごから別れ、蟻は国鉄の後藤工場の職場サークルから出発した劇団である。

ぐみはかつて土屋清の「河」を松江の劇団あらぐさと合同して労演の特別例会で上演したこともある。

ゆりかごは鳥取、倉吉の地域劇団と年一回廻りもちで合同公演をもっている。

蟻は座付作者宮倉義文さんをもち、秋に劇作劇を上演するという。直接宮倉さんにぜひ作品を見せて欲しいとお願ひした。劇団の島源三とは国鉄文化で会っておられるということである。もう四十をこした口数の少ない、温和な方だ。

「蟻は黒沢さんの「巢はなれ」を昨年上演した。」

労演講座には二〇人くらい集った。私は今日の創作劇の不毛と観念劇の横行の背景をのべ、今後の演劇運動のあり方について思つたままを話した。その中で次の三点に重点をおいた。

(一) 観客に根づいていない日本の新劇の歴史的体質からの脱皮。

(二) マス・コミ文化との関係。

(三) 極めて散文的で日常性の中に埋没しやすい今日の現実が、主観的観念的な形での異常化認識を生みだしやすい状況にある点。

とくに理想と現実との間に矛盾のなかつた五十年代六十年代と、両者の関係が極めて稀薄になった七十年代の相違点についてはわかつてもらえたようである。

こうした状況の中では、観客の中から観客

だか、と電話かけてきて「じゃけえ」と事務の女の人の明るい笑顔で迎えられた。

福演は会うたびに小さい小さいといわれるから、福山市も小さい都市かと思つていたが駅をおりて驚いた。駅前の広い通りは車の洪水であり、大きなビルの並びたつ近代都市である。人口は二五万という。むろん、労演も一八〇〇から二〇〇〇の会員をもち、二ステージの堂々たる労演である。

九月十四・十五日と「ガラスの動物園」の例会前でもあり、事務所は明るい活気に満ちあふれていた。

十分もたたないうちに福演の柏原さんがとんできてくれた。

「柏原むさしです。やあー」

すぐ相手のふところにとびこんで脇腹をくすぐるような勢いである。私はその点だめだ。どうも切口上である。こういうことではとても組織者でもある東リ演の事務局長なんて大役はだめだと頭をかすめた。

先手をうたれた以上、相手のふところへ入ろうと焦つてもおつつかない。福山にいる間ずっと柏原さんのベースでいってしまったと

いっただ方がいい。さすが福演である。

の腫を通じて、質の高い劇評が生れてこないといけない。そうでない限り浮草文化となり観客と無関係に演劇ジャーナリズムや劇評家に動かされることになる。

労演も量の拡大と同時に質の追求を必要とされている段階にきている。創造者はそれを求めているのであり、それによって日本の演劇状況も切開かれるし、創造者と観客の正常な関係は生れる。

以上の要旨で一時間半ぐらひ話し、あと、いろいろな質問をうけた。

十一時頃まで野引事務局長や宮倉さんを含め、数人と交流して、皆生温泉の鶴乃湯に泊った。

九月三日

ふたたび伯備線で中国山脈をこえて、倉敷へ昼ごろついた。ここから福山まで二・三十分だから、大原美術館でもと街へ出た。一三二三年頃だと思ふが、学生演劇の移動で三九度以上の高熱で苦しむ、氷もなし、アイス・キャンディで冷したのは倉敷だった。他の連中は大原美術館にいったが、私は宿でうなっていた。

この頃苦勞を共にした仲間の中には、今で

講座は九時までにして「獅子」の稽古を見てくれという。公演は九月十七・十八日である。

「眠れる獅子の稽古じゃけえ」先日の西リ演の総会で同じ福演の坂本君にあつた時、そういわれていたから、そのつもりでいたが、労演とも話合いがいつたらしい。

労演講座は民商会館四階で行われた。民商というとむさくるしくて雑然としていると思ひこんでいた私は、この堂々たるビルに驚いた。これも二〇人くらい。

福演は公演前で稽古に追われ一人もきていない。司会の牧本さんが、私を紹介するにあつた山口のはぐるま座との相違を説明「野火」の話から始めて非常に苦勞されたようである。もう少し、大作家ならこんなことおきないが、三文作家だからどうしようもない。どこでも私の作品紹介では「郡上の立百姓」の他に「湿地帯」が出るが、もう十年前。殆どの会員は知らない。やはりかかればならないと痛切に思った。

話は終つて福演の稽古場につけた。労演の委員長、事務局長等も見学、いささか緊張気味であつたが、誰もくせがなく、りきん

は商業美術の大家となつた田中一光・衣裳デザイナーとしてバレー・オペラから各劇団の仕事をしている緒方規矩子、読売テレビの美術部長で装置家の板坂晋治、劇作家の宇津木秀甫、京芸の藤沢薫がいた。彼らが劇団はぐるまの創造面で骨身を惜しまず支えてきてくれたのである。

考えてみれば中国筋は夏休み毎に二・三年移動公演を重ねた懐しい土地である。

倉敷はあの当時と余り変つていない。何となくほつとした。大原美術館のあたりは船着場であり、備中天領の米の集荷場として栄えただけであつて、米倉が今もその当時の姿を残している。

また、倉紡・倉敷レーヨンで財をなした大原孫三郎社長が大原美術館、大原社会科学研究所をつくつたことは余りにも有名である。しかし、今日では大原文化人といわれる人々が、倉敷の文化の実権を握つているという。いい意味なのか、悪い意味なのかわからなないがいささか気になった。

福山へは四時頃ついた。

労演の事務局へいったら、

「福演の柏原さんがなんども、まだか、ま

でいないのに感心した。人数も五・六人どころか、十数人の堂々たる劇団である。話によれば始めてといつてもいい自主公演で応援出演を労演その他に頼んだのださうだ。しかしかつては女優さんが一人もいなかったのが、二人いる。こうした公演を重ねれば、劇団員が増えることは間違いない。

私が二・三具体的にダメ出しをしたが、吸収もものすごい。なかなか仲間の劇団といつてもだしにくいものである。演出の権威を傷つけることもあるし、役者の創造的自信を失わしめることもある。だから、ものすごく気を配らなくてはいけない、ここでは、途中から遠慮なくいえる雰囲気が出てしまったから不思議である。

何しろ、広島島の土屋さんへ夜中長距離電話をかけ、ながながとセリフをきかせてダメはないかというんだから、吸収欲はすざましいといわねばならない。

さすが、柏原さんは、柏原さんというよりむさしさんといった方がいい。むさしとは武蔵とかくというからいかめしい。まさに二刀流三刀流の活躍である。演出をやり、役者をやり、立看、ポスター、パンフの編集をやり「人を喰つた話」では女形でおかね婆さんま

でやったというから驚く。

むろん、役者としても劇団風の子の舞台をふんでいただけに実にくまい。こうした演技指導者をもつ福演はのびるにちがいないと思つた。

その後、深夜までむさしさん宅を会場に労働・劇団員十数名で一こんかたむけた。「獅子」公演の前祝みたいなものである。奥さんも大へんである。もう一〇〇〇枚のチケットは売りつくしているから、あと二週間一五〇〇人は固い。製作責任の杉原さんも、舞監の坂本君も気炎をあげていた。

一時すぎに労働の人々も去り、坂本君が公演パンフが一時にできる約束と印刷屋へ走った。刷り上ったパンフを前に、また乾杯。ダウンしたのが三時頃だったと思うが、覚えがない。

翌朝、目をさますと天井一杯に大きな映画看板がかかっている。名前は知らないが美男と美女がよりそって。

「これはむさしさんの作品？」

「いや、これは師匠の遺作じゃけえ」

看板に遺作があるのか、どう知らないが、すでになくなった看板屋のオヤジの遺作を天

労働組合の体質が文化運動の大きな壁となつていくことはどこでもいえるようである。

上田修作「ひろしまの冬」は土屋清のプロット報告「種なし葡萄と草履テキ」(演劇会議十七号)にくわしいのでここではぶくが、労働としては始めての自主企画だったのである。

月曜会、木々の会、国鉄演劇サークルが中心になり、合同公演として取組んだのであるが、作品検討は三者の間で論争し、もめていても、労働としては創造上の問題にどこまで入りこんでいいのか、遠慮もあって十分なされないまま踏切った点で準備不足だったようである。会員は二七〇〇が一六〇〇に減少したが、これは年間の予算で考えたので別に苦にはなっていない。次の自主企画例会の展望が一つは開けたという点で大切にしたいと植田事務局長はいつておられた。

ただ、いえることは、労働と地元劇団の正しい関係は、まだまだ定着しきっていないというところである。地元劇団は労働のためにどんなプラスをもたらし、労働は地元劇団にどんなプラスを生みだすかの関係がない以上、育成とか、意義とかいっても限界があるといえる。運動の意義が両者に意義として生きて

井一杯に貼りつけておくというのも、柏原むさしの人間味を思わせる。

むさしさんは「むさし工房」といって看板屋をやっているのである。

「風の子時代、移動じゃ装置の補修係みたいなもんじゃったけえ。福山へ帰っていろいろな仕事もやってみたが、これじゃ思っている屋に弟子入り、何が身を助けるか分らんもんじゃのう」

早速、隣のアトリエというか、作業場へ案内してもらい、獅子の看板を見せてもらった。どんな大劇団の立看板よりも福演のは立派である。

十時過ぎ、車で鞆へ案内してもらった。

万葉の時代から歌われている風光明媚な漁村のイメージなんてとんでもない。金属団地を中心にカスガイをつくる家内工業がひしめいていた。

カスガイ、芝居ではガチという。その殆んどが、この風光明媚な鞆の町でつくられるとは知らなかったのである。まさに異様である。

かつて魚臭が鼻をついたであろう狭い露路の軒下は、どこもかしこも、ガチッ、ガチッと熱棒を叩く音が続く。多くはお内儀さんの

くる関係は何かをさぐらなければならぬといえないと思う。

労働講座は五十人くらいであった。会場に吉川清さんがわざわざこられた。

広島には十数年おつきあひさせていたでいる方が二人いる。私の作品「風化」(三幕)の資料調査でお世話になった被爆者の方々である。

お一人は原爆一号といわれ、背中から全身にわたり大きなケロイドを残し、奇跡的に助かった吉川清さんであり、もうお一人は検山征代さんである。

吉川清さんは知っている人も多いと思うが、平和運動に、あるいは被爆者救援運動にすべてを投げうって活動せられ、土門拳の写真集でも、その生々しいケロイドが紹介されている。

また映画「ひろしまの証人」の製作にも尽力され、文化人との接点も非常に広い。先日も全国の自治体を行脚、被爆者救済立法の陳情——情を陳べるなんて、いかにもお上の權威を認める嫌な言葉だが適当な言葉がない——に廻られたのである。

むろん岐阜にも寄られ一晩おつきあひさせ

仕事らしい。

それと対称的に十階建ぐらいのシーサイドホテルが建っている。鞆は小山さんの心の故郷であり、作品の故郷である、小山さんは「とんでもないものをつくってくれた」と怒っていたそうだ。

京浜協同劇団が「泰山木の木の下で」の公演の時、現地調査にきたそうである。

九月四日

広島道路とビル、見事に立ち上がった国際都市広島に入った。われわれはヒロシマというだけで心に緊張を覚える。広島市の民の中には日常生活に埋没している人もいるだろうし、われわれ以上に心に重荷を背負っている人もいるだろう。ただ、この痕は二十世紀が残した人間の汚点としてアウシュビッツの虐殺と共に永久にぬぐい切れないだろう。

労働の会員数は二八〇〇から九〇〇〇、三ステージを維持するためには三四〇〇はどうしても欲しいと植田事務局長はいう。基幹産業である東洋工業、三菱造船が弱いが、このサークルに力がついたら、その下請を含めても、まだまだのびる可能性を十分もっているということである。

ていただいた。

「広島は私にまかせなさい」
労働の人々と吉川さんの好意に甘えることになった。

とぐるをまいたのは、吉川さんの経営する「原始林」である。原木をあらしい垢ぬけした気品のあるパーである。デザインは吉川さんがしたというから、なかなかのセンスといえよう。

十一時すぎまで御馳走になり、宿に帰った。

もう一人の検山征代さんは、全く身寄もなく、自宅と原爆病院を往復しておられる気の毒な方である。

たびたびお便りをいただくが、必ずといっていいほど、短歌がしたためてある。短歌によつて心の空白をうめておられるのである。先日血をわけてもらえらる人が、もう身近かにいない、何とかお力をかりたい、と切々とした手紙がきた。

早速お応えせねばならなかったが、血圧が極めて低いため、私が卒先して出せないことになってしまった。

せめて広島へ行く時にはと思い、出発直前

劇団に献血を訴えたのである。十数人の協力を得たが、出発に間わなかった。広島労演宛に速達を頼んで家を出た。

松山さんは数年前、共に原爆病棟に苦しむ病友と恋をされたことがある。六十に近い松山さんの妻子ある病友との恋。

原爆によって蝕ばまれ、焼きつくされた組織をつねに意識しなければならぬ肉体を背負う、この松山さんの恋は、ちょうど埋れ火のようなものである。夕暮のそよ風になめられ、残された淡い炎のように、松山さんの胸に、その血管にうずいたのである。

「先生、恋をしたんですよ」と綴られた文面に、私はまるで少女のようなはじらいを感じた。しかし、「恋も大切にしてください。体も大切にしてください。人間として生きることがあなたにとって大切なのでから」と返事をだす以外なかった。

こんどの広島行は、その松山さんに会うのが一つの楽しみだったのである。

九月五日

昨夜からぐずついていたが、朝、雨になった。台風の影響だろう。実際旅行で雨というのは嫌なものだ。

よる首切り、その撤回斗争をくぐりぬけ、自立性を強めてきたことについては土屋氏の「演劇会議」十七号に詳しいがより、創造の厚味を加えてきたことも事実だと思ふ。そうした中で、西リ演加盟を近く決定することである。

私は東リ演セミの報告をしながら、この三劇団の結集がある以上、創造、組織、経営のすべての面で正しいブロック交流ができると思った。

その後、源蔵という飲屋へ流れこんだ。土屋氏は「やはり飲まにや」と生々した顔でいう。

そこではぐるまのことがいろいろ聞かれた。確かに他の地域劇団に比べ、稽古場も含めて財産も多いし、地域での定着度は強いが組織的に力があるといえない。まさに矛盾に満ちているといった方がいいだろう。

「どうしてそこまで成長したか」ということも各地で言われた。それは創作劇を軸にした地域での演劇運動である。ただ、創作劇だと逆に観客が減るといふことも聞いたが、それは積重ねの不足と、舞台成果の弱さによるであろう。

ちょうど、土屋氏が今年の西リ演の総会で

今日は日曜でもあり、芝居でいえば〆のりしる〆で講座はなしである。その代り、月曜会、木々の会、国鉄演劇サークルとの交流会が午後計画されている。午前中は〆ひろしまの冬〆の作者上田修氏と作品についてじっくり話合うことにしていた。

朝九時約束通りきっちり宿にこられた。今日は雨だし、日曜だから、と思つてトイレで新聞を読みながら、九時五分頃、部屋にもどつたら、上田氏は部屋に座っている。几帳面な人らしい。それは作品にもあらわれている。誠実さはわかるが民族問題を何を通じて描こうとしているか、作者の中で混乱しているのである。

韓国に帰った被爆者を取材したカメラマン重彦を芯にして朝鮮人被爆者の問題を扱うのか、また、重彦の挫折を扱うのか。妹千鶴を中心とした日本人と朝鮮人の恋愛を扱うのかはつきりしないために本がしまつてこないのである。それに日朝友好のための作者の啓蒙意識が作品の説得力を弱めたといえる。

それらの点を具体的に上田氏と喫茶店で話合ひ。「モレーツ教育」等のコントで示された作者の鋭さは、長編戯曲第一作には表われなかつたが、今後の大きな手がかりになった

「演出もボロ、演技もボロなのになぜ、作品だけ完璧を求めなければいけないか」と問題提起したが、重要な問題を含んでいる。

それだけ作品の責任は大きいといえるが、完璧でない作品だとしても補う舞台成果があれば、次の創作に刺激を与え、作者をもえ上らせることもできる筈である。しかし、逆に舞台が作品の足をひっぱるとき、次の創作は苦痛なのである。

作者と舞台創造は極めて重要な因果関係をもっている。ということば、劇団の創造的発展がない限り、創作も生れてこないということでもある。

月曜会と木々の会は合同公演を重ねており密接な関係にあるから、私が「いっそ合併したら」と提案したら、酒のせいもある。「合併は困る。吸収じゃ」とお互いに和気あいあいの中で張合ひ。実に楽しい晩であった。

上田さんの宅にお世話になる。中国放送の首切りから今日までの斗いの軌跡を聞く。奥さんも大へんだったと思うが、それが充実した家庭へのスタートでもあったのだ。

二人のお嬢さんの可愛い寝顔に、ふと家

にちがいない。

午後、月曜会、木々の会、国鉄演劇サークルの西リ演セミの報告会に出た。参加者は十四名。

劇団と自分の関わりの問題から始まり、劇団内に緊張感がなく、ぬるま湯のような空気がただよっていることが、いろいろ討議された。とくに岩井さん(月曜会)に「演出と役者の緊張感がなければ、作者との緊張感も生れる筈がない。作者をどうつき動かすか、その劇団体制ができていない。作者が身近にいるから、何かかいてくれるだろうという待ちの姿勢になっている」とどこでも悩んでいる問題をだせば、「もえん、もえんというが、どうもやしたらいいのかわからん」と若い層に何を要求していいのかわからん」と若い層が受身でいる苦しみが出されていた。

ここでも新旧のズレが見つけられるが、木々の会は今までの指導部が全面的に運営委員をやめ、若い層に移したそうである。これは古い層の引退でなく、組織強化の積極策としてである。しかし、ここにも問題はあろう。組織上の清算主義でなく、要は若い層のエネルギーを引きだすことだからである。B C C (中国放送) 劇団から出発し、合理化に

の子供のことを考えた。

九月六日

翌日、上田さんにおくられ労演の事務所へ行く。相変わらず雨が激しい。

岐阜からの献血カードはやはりついていない。せめて松山さんにお会いするだけでもと思ったが「この雨で段原中町というのは大へんですよ。複雑な街ですから」という。

諦めて、宇品港に向った。しかし、心残りである。まだ時間もあると引返した。段原中町というのは比治山の東で原爆の被害はうけていないから、昔のままで建こんだ地域なのだ。

見当らないままタクシーをすてたが、ついに断念し、宇品からフェリーで松山へ向った。

松山へついたら雨はやんでいた。

船の中から、かつて活躍していた仔鹿座のことが気にかかっていた。

労演の門田事務局長も仔鹿座の出身だそうである。松山労演は四国の中ではもっとも安定した力をもっている。人口三三万で会員は一八〇〇から九〇〇〇、むろん二ステージだ

が、あと五〇〇人は欲しい所である。

労演講座は私の話だけでなく、仔鹿座の運営委員長畑野稔さんの「松山における自立演劇の歴史」があった。

松山は夏目漱石の「坊っちゃん」で知られているが、その他正岡子規、高浜虚子の活躍に見られるように短詩形の盛んな地域でもある。それだけに文化運動も戦後火をふいた。

いち早く、かもめ座がT氏を中心に、児童劇団ブランコが発足した。かもめ座はT氏が「明治零年」を発表、文部大臣賞をえて東京明治座で上演されるや、作家活動を志し上京中心を失い解散。ブランコも行きつまり、仔鹿座として再発足したのである。

その他、演劇人クラブ、あおい座、実験劇場、第二次かもめ座が生れてはつづれていった。その殆んどが、中心となるべき指導者がT氏同様上京したり、マス・コミに入ってしまったため行きつまったのである。

そうした中で第二次仔鹿座が結成され、始めて県民に支えられた自立劇団として旗幟を鮮明にした発足。七人が常時活動に入り、学校移動を重ね、大へんな支持をえた。ところが愛媛県は全国にさがけて動評を実施した有名な教育反動県である。たちまち教育委員

礎固めをされ、今や松山文化の支柱といつてもいい。

「いや、小林さん、疲れましたよ。余り出すぎちゃいかん。もう一度自分に帰ってね」白髪をかきわけ、笑いながら語られる言葉の裏には、真の知識人としての自信と重みを感じた。それでいて情熱的である。杯を重ねる中に仔鹿座の再建に入っていた。

「仔鹿座の再建は絶対創作劇というから、僕がまだ使えるかどうか知らんよ。しかし、役に立てたら立ちたいと思ってるんよ。だから畑野君立ちが、しっかりしてくれにや、あんたたちに期待してるんだから」

坂本さんが「自分に帰る」ということは、これだったのである。ところが、かつて書かれた放送劇を戯曲にしたが、みんなの意見を聞きたいと提出されたが、その原稿がどこで宙に浮いたのか、畑野さんに渡ってはいない。

「これだからね、小林さん。何もやってくれといっているんじゃないよ。意見が聞きたい。この本でもえてくれるならね、僕は仕事始めてもいいんだけど、なしのつぶてじゃね」

畑野さんは穴でも入りたような気持だっ

会の圧力がかかり、学校移動はしめだされ、常時活動をしていない劇団の活動家は各地に配転されては活動不能に陥入った。

運営委員長の畑野さんも七〇キロもある新井浜にとばされ、その日も勤務を終って車ではしてこられたわけである。

二階建三六坪の稽古場ももっている。「仔鹿座は必ず再建します」と畑野さんは力強く私に語ってくれた。

労演の前事務局局長亀井さんが、そのために同じ劇団員の門田さんに事務局長をゆずり、今前進座と八田研究所で、創造的な力を身につけるため勉強しているそうである。私は仔鹿座の再建に確信をもった。

松山にはそれ以外職場劇団があり、今年第一回職場演劇祭を開いた。国鉄サークルだるま座、藤本文雄「われらの海」

伊子鉄サークル劇団ねむの木 真船豊「水泥棒」

劇団もず 宮本研「僕らが歌をうたう時」「われらの海」の作者藤本さんも仔鹿座であり、ねむの木で「水泥棒」の演出もしている。こうした人材をかかえている仔鹿がたくましくならない限り松山の演劇運動は発展し

た。仔鹿座も知事選で追われ、また、組織的に力になっていないためである。

しかも、坂本さんは嫌味でなく、ここにこしながら叱っておられるのだ。この坂本さんの力強い支えは仔鹿座に欠かせない力にちがいない。

「明治零年」の作者Tさんと比べると、人間の生き方というものを考えさせる。全く過去にのみ生きるか、過去を現在に生かしているかである。人間はつねに自己をさぐりだそうとする努力を放棄してならない。坂本さんは見事にそれを教えているといっている。

ちょうど、別れぎわ、映画運動について若い人が訪ねてきたというので席をたたれた。今も多くの若者の相談相手になっておられる坂本さんの一面を見た。

これはこんどの旅行でした大きな収穫である。

九月七日

国鉄バスで四国山脈をこえ高知に向う。相変らず雨こそ降っていないが、三坂峠は霧に包まれ展望はきかない。ただ、三三号線沿の仁淀川の溪流が見事である。

ないと思った。

それにしても、これまでに実に多くの劇団が生れ、解散していった歴史を聞くとか胸がうずく。「坊っちゃん」以来の文化的伝統が逆に中央文化への憧れとなるためか、一人去り、二人去り地域の活動家のエネルギーを拡散させていったわけである。

かもめ座のT氏も、今は松山に帰っておられるが、もはや創造的エネルギーもなく隠棲の身である。これが松山に根づく文化活動を重ねておられたらと思わずにいらぬ。

講座がすんで労演や仔鹿座のメンバーと坂本忠土さんの経営する「田都」という小料理屋へ案内された。

坂本さんは戦後、日本映画でトップをきり「別れもたのし」という映画でヒットされたシナリオ作家である。数多くの作品をつくられたが引退。郷里松山へ帰られたのである。この坂本さんが、今年の愛媛の知事選で二万票まで追いつめた革新統一の原動力の役割を果たされたそうである。

即ち、「愛媛をよくする学者・文化人の会」の代表として。

また、労演の初代委員長で、三期つとめ基

高知はやはり南国の街である。鹿児島にある亜熱帯樹の並木がきれいである。

労演の事務局長と共に高知新聞に友人であり、作家の土佐文雄を訪ねる。ちょうど今取材に出て留守という。やむなく、高知城を一人ぶらつく。どこの城も戦災でやけて模擬城と思ったが、重要文化財高知城であった。

高知市は一望の中に入るが海が山に閉ざれてみえない。ただ、河口港がかすかに見えるだけである。

労演は今年は一四〇〇平均の会員で苦しいということである。去年は「女の一生」「もう一人のヒト」で二〇〇〇をこえ、平均一七〇〇だったから、相当に落ちこんである。高知の文化会館はキャバ九八〇〇というから、芝居にとっては理想的な会場といえよう。

市役所・県庁のサークルは強いが、金融関係は職場の圧力で苦しいということである。広島でもそんなことを聞いた。

労演講座のあと笛の会と交流した。

笛の会は池さん、岡村さんを中心に「河」とか、土佐文雄の創作劇等上演してきた歴史のある劇団である。労演事務局の影山さんも劇団員であった。

こんど「郡上の立百姓」を上演するという

ことで池さんが六月岐阜へ資料調査にこられ、映画「郡士の立百姓」のシナリオも一〇〇部売切っていたのである。

池さんは絵もやり、体育も教える中学校の教師で、高知での激しい勤評斗争を闘いぬいた活動家である。岡村さんは京芸にいたことがあり、私の作品「風化」に出ていたそう。そういわれて私は想いだした。

「郡士の立百姓」の上演も、まだ条件が整わなく、秋を目ざしておられるとの事である。ここでも歴史が古いだけに新旧の断層があるようだ。若い劇団の人から、それを訴えられたが、池さんや岡村さんもたじたじである。これをどう埋めるかは、うちの劇団も含めて大きな課題である。

高知の名物タタキを御馳走になった。生カツオのさしみみたいなものだが、皮を軽く強火で焼き、身は赤いのがうまい料理の仕方だ。そうである。いろんな薬味とニンニクが入っているが実においしい。

九月八日

朝、宿へ土佐文雄が訪ねてくれた。学生時代の悪友で本名は藤本幹吉という。カンキチノカンキチとよんでいた。まさに二十年ぶ

むことは聞くが、経営の重圧との矛盾に苦しむ四宮さんは珍しいケースといえる。

地域劇団は未来とつくしの二つである。

講座には両方共々おられた。

未来は労演の前幹部の黒沢さん、斎藤さんを中心につくられ、田中茂「伍市は死んだ」を上演、五〇〇の観客を集めたという。

ここでも労演との間がうまく調整されていないようである。松山の仔鹿座、高知の笛の会のように労演の創立に劇団自体が役割を果し、事務局長を送っている労演と異なり、立場は逆のようである。

地域劇団が労演の観客に期待するのは、当然の心情であるが、それが労演にどうはねかえってゆくかである。利害のみではいけないし、意義の押しつけであってはならない。どこもその調整で苦しんでいる。

斎藤さんとお話したが、西リ演とも連絡をとりたいし、「演劇会議」も購読したいとのことである。

私は「西リ演は特効薬でないので、急に劇団に変化はないかも知れないが、共に連帯して、力を強め、方向をさぐりあうことが大切だから、ぜひ加盟して下さい」と頼んだ。

つくしは今年はまだ上演していないようだ

りである。土佐犬よりも精神な面構えをした男だが、女性にはもて、すごい美人をつれて土佐に帰ったのだ。ちっとも変っていない。

高知の勤評斗争で当時教師であった共産党の山原代議士と共に真先にブタ箱の御厄介になり、クビになった猛者である。その後、作家活動に入り、植木枝盛の生涯をえがいた「熱い河」を始め、多くの作品を発表、今は押しも押されぬ作家である。

今は高知新聞の囑託をしながら、地方の文化運動のリーダーの役割を果たしている。よほど人気が高知ではあるのだろう。彼の作品は高知だけで三〇〇〇部売れるという。その点出版社もあきれているそう。それにちがいない。出版物の七割は東京から京阪神の表日本でさばかれ、他の県は一巻に満たないのが常識だからである。

二人で街を歩いていると、あちらからも、こちらからも声をかけられる。なるほどと思った。

彼は私の二年後輩であるが、地方で根づいた作家活動をしているだけに偉いと思った。

急行のよしの四号ののり、大歩危(おおぼけ)の景観をみながら徳島についた。

が、集って基本練習を重ねておられるそう。私は自主公演を重ねないと、組織的にも強くないと訴えた。

九月九日

海岸線沿いにバスで高松までいった。

鳴戸大橋の建設運動の看板が目立つ。

高松労演は七〇〇から九〇〇で、新井浜と共に四国ではもっとも苦しい労演であるという。県庁の所在地であり、四国の玄関として各商社も集っているにもかかわらず、これではたしかに弱い。出入りが激しく拡散しているのではあろうか。

今年の春、市長は革新統一によって獲ちられたが、まだ文化面では影響はないということである。一度、話し合いをもったが、文化行政については全く関心がないといった態度であったののがっかりしたこと。また市会でも与党が弱いので共産党を除いて、民社公明、社会三党で革新クラブがつけられたので、実に妙な関係だそう。

革新統一も、つねに市政に参加し、つき上げてゆく姿勢がないと、中身がなくなる危険があるようだ。

この地域劇団は運動意識は弱いようであ

事務局常任には若い三宅さんがいた。

事務局長は織機の本管製造をやっているのだが、工場が焼失、この所、金策にとび廻って出てきておられないということである。

会員は一二〇〇で低迷しているという。それで二ステージである。赤字が累積するのは当然であろう。一ステージで十分であるのに運動というものは難しいものである。拡大目標を一五〇〇なり六〇〇にすると、一ステージでは矛盾が生れる。興行師なら、こんな馬鹿なことはしない。

私は岐阜労演でも、つねに「恥も外聞を忘れて興行師的にならなければならぬ時がある。労演は貴重な大衆の財産だからだ」といっているが、それでも、後退する時の活動家の意識調整がなかなか難しい。その意思統一なしに後退すれば、全面的な後退になってしまうからだ。

夕方、事務局長の四宮さんが車で迎えにこられた。織機の本管はドル・ショックで極めて見通しが暗いので廃業すべきか迷いに迷っているというのである。約四十人の従業員がいるということであるから、工場の焼失は経営者として痛烈な打撃であろう。

労演の活動家が職場の活動との矛盾に苦し

る、NHK放送劇団とRNC(西日本放送)放送劇団、ドラマ・サロンの三劇団である。

それぞれ座付作者もっている。NHKは南四郎、RNCは八木亮造、ドラマ・サロンは佐々木正美氏を中心になっている。

年一・二回公演をもっているが、RNCは別に土曜劇場として一ヶ月間土曜日毎に子供劇場、または一般公演をやることがあるそうである。

講座には満濃町の青年団が十数人参加、話がすんで創作劇「まんのう護摩壇」の上演で苦しんでいるからと、うどん屋で名物さぬきうどんをすすりながら交流した。

この青年団は作者の豊田ささをさんの指導によって精力的に公演をしている集団である。「まんのう護摩壇」は町会議員に青年団から立候補させたが、部落の圧力などもあって落選する問題を扱った作品である。構成上その他に難もあるが、セリフは生きており、豊田さんはかける人だと思った。

行きづまっている点をだしてもらったが、みんな素直にセリフをいって、ここがかみ合わないのだしてくる。それに私は思ったままダメをだした。みんな本当に芝居が好きだということ、すく肌でわかる。これを青年団

のサークルだけで止めておくのは惜しいような気がした。

豊田さんは社会教育の仕事をしているが、役人という匂いは全くない。同じ芝居の仲間である。これが何より大切だ。どんな組織でも愛情のある指導者をもつことによって固まる。

「こんなすばらしい集団なら、劇団にしたらどうですか」というと、

「やるか」

と豊田さんのあっけらんかとした表情で受けこたえに、みんなどっと笑った。

うどん屋も、もうとっくに看板である。楽しい晩だったのか、ぐっすり眠った。

九月十日

高松から宇野まで連絡船で一時間、時間があふるので小豆島へ寄ろうかと思ったが、あいにく朝から雨である。

宇野に十一時についた。ここは専従事務局長がいらない。玉野造船につとめている津守事務局長に電話して五時半に労演の事務所であうことにしたが、それにしても六時間もあ

る。雨では鷺羽山どころではない。駅で映画館

を聞いたら「玉橋に一軒あるが、何をやるか、岡山へ出られた方がいいですよ」という。一応玉橋まで行くことにした。

バスを降りて大衆食堂で昼食をとりながら「小母さん映画館はどこ」というと「さあ、今やっとなるじゃろうかのう」という返事。細かい話を店を出た。

運よくやっていた。やぐざ映画だが、迷うことなく入った。それでも十数人入っていた。

玉野労演は会員わずかに四五〇で多い時は七〇〇というから、中国筋では尾道労演と共に苦しい労演である。

宇野市自体が実にまとまりのない人口七万の合併都市で、四国との交通の要衝宇野と、造船所をもつ玉野とを中心に、山をこえては点々と町がある奇妙な都市である。

労演の中核は三井造船で下請を含めば一万四千人の労働者がいる。町全体が三井造船に支配されているといっている。

劇団炎も伊藤硬三氏を中心にした職場サークルだったが、組合が同盟系に変わってしまった。今では地域劇団になっている。

こうした三井の圧迫は、むろん労演の活動

に困難を加えることは当然である。男性会員が多いというのも、玉野労演の特徴である。

しかも、二〇軒以上はなれた児島に四五〇のうち二〇〇以上の会員がいるというから始末が悪い。やむなく、会場を交替に使い、事務所も二ヶ所もつけるつもりだという。大へんなことだ。こういう中で労演を支える活動家に全く頭が下る。

講座には十数人の会員が集ったが、殆んどが職場の活動家らしい。ちょうど組合大会があった日で、「とうとう人事課長まで出席しやがった」と話合っておられる。去年まで出さなかつた人事課長が、社長のメッセージの代説という形で出席したというのである。ここでは労演活動はまさに闘いの場だといっている。

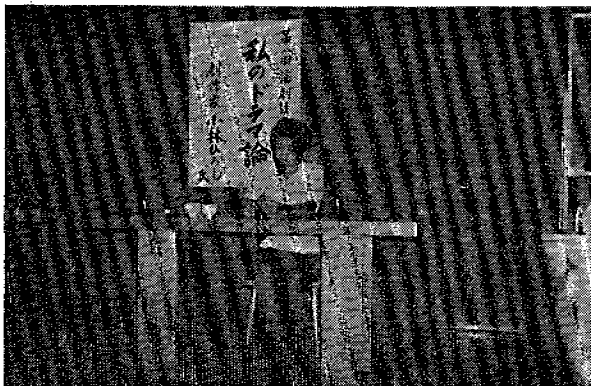
こういう切実な闘いを背負った人々にとつて芝居とは何か、問いつめてみると全く説得力がない。むろん、それに即応し、効力を発揮するドラマであることは必要ではないが、少くとも、そうした観客との対話を創造者は決して忘れてはいけないということである。ともすれば、日常の中に創造者も芝居馬鹿で流されているのではなからうか。

九月十一日

いよいよ最後の日である。

岡山は目と鼻の先である。雨も上ったので鷺羽山へ上ることにした。

瀬戸内海国立公園の中では、最もすばらしい景観であるという。たしかに西に水島、軻を、東に宇野をのぞみ、正面に大小の島々から四国の眺めは絵のようである。欲をいうな



(岡山労演で講演中の筆者)

ら出来すぎて嫌なことぐらゐである。漁船、貨物船、タンカーが行きかう。いや海もラッシュだと思った。

修学旅行がきていた。「ワァー、きれい」と女学生が歓声をあげていた。

岡山労演は人口四万で三〇〇〇名近くの会員をようし、来年は倉敷会場をもうけて、一挙に四五〇〇から五〇〇〇をめざすということである。広島と共に中国・四国の中心的事業を果している。

「労演研究」「感想文集」「サークル誌」等数多くだされ、サークル活動も地について感じをうけた。

小生の小論「複雑な文化状況と十五周年」(演劇会議十一号)が大きな刺激となり、運営委員会で学習会を開き、七〇年度の運動方針に大きく取入れたとの乾事務局長の言葉に恐縮する。

演劇の質的追求をサークル活動の大きな柱にする運動が中国・四国で取上げられたのも、この小論の影響が大きいということである。それとは別に、こうした運動は大切だと思ふ。むろん、いろいろの摸索もあるが、今日のように一方的な受身でなく、観客が創

造者と対等に会話できる関係が必要なのだ。「見せてやる、寄らしむべし、知らしむべからず」ではないけない。大橋喜一さんが「ああ野麦峠」で岡山労演の感想文に対し、一人一人返事がかかれたそうだが、できることではないと感動した。

岡山には宗政敏尾氏を中心とした岡山新劇場がある。いうまでもなく「人間裁判」などの創作劇などを上演、来年二〇周年を迎える古い劇団である。かつては西リ演に加っていたが、まず内部を固めるということも現在もそのままになっている。一時の停滞は十二分に克服しているようだから、ぜひ加って欲しい。

その他には、小山祐士さんとのつながりのあるアカンシャの会や、ひびき、どろんこの三劇団がある。

講座には三十人近くが集った。

最後の講座である。

徳島労演でも出たが、同じような質問が出た。

創作劇が充実しなければならぬのはわかるが、創作劇の方が面白くない。何か大義名分が前提にあって、それを押しつけられるよ

うな気がするので、人間の苦惱なり喜びが伝つてこないというのである。

これはわれわれに共通する欠陥のような気がする。進歩的文化を背負うという意識過剰が邪魔になり、ともすれば、前向きな人間を美化、類型的な人間を生みやすいのである。逆に、マイナス面をえがくことが大切かも知れない。それによって平凡な人間の平凡な生活の斗いがより身近になるからである。

労演の役員の人々と講座を終つて交流した。民芸のことが話に出た。鈴木瑞穂が出るが、出ないかというのである。最初から新田昌文とダブルであるが、瑞穂の体の条件と、四国が新田昌文の出身地であるため、だが事情は異つてきた。私は最後までつきあうというような話だといったが、自信はない。

九月十二日

いよいよ岐阜へ帰る日。

朝、後樂園を見て駅へ向つた。

高松の栗林公園よりスケールは小さい。それにしてもこんな広大な庭園を一人占めするとは、昔の殿様とはとんでもない野郎だと思つた。しかし、今日では考えられない。当時の倍、何十倍の財力をもつ資本家でも資本主

義の法則からいけば実に無駄な投資だからである。

資本がすべてではなかった時代の産物である。

特急〃しおじ二号〃にのつた。

十一日間、九労演を廻つて思うことは、労演と創造者との間にはまだまだ断絶があると

いうことだ。

某劇団の経営部が

「〃告発〃だとかヘガラスの動物園〃なんて東京じゃ、もう時代おくれの作品ですよ」といつたそうである。

作品のよしあしは別にして婦人服や自動車じゃあるまい、時代おくれという言葉が出る

ことが問題である。何よりも観客が何を要求しているかである。確かに今日は何を描いて

いいかわからない複雑な時代である。

共通の理想が失われ、拡散した現実は極めて散文的であり、しかも、具体性に乏しい圧力にしめつけられている。何をやっても空しい。ドラマチックな素材に欠けている時代なのである。

それはわかるが、かといって主観的観念的な人間を生み出すことによつて脱出できるだろうか。

それもいとしよう。

自虐的刹那的になり、人間否定を謳歌し、オッパイを出し、セックスをさらけだして現実はどうしようもないというのでもいいだろう。

しかし、それで観客に説得力をもたないとするれば、自動車や婦人服のモデル・チェンジ以下である。

労演が活動家の努力にもかかわらず停滞気味があるとすれば、こうした状況に切れ切れの創作劇の不振であろう。いわんや冷笑する創造者がいるとしたら、それは自ら首をしめることに他ならない。

観客との対話、観客への責任が日本の演劇人には乏しいのではないだろうか。マスコミ演劇ジャーナリズムというフィルターを通じることなく、じかに生みだす関係こそが今求められているといつていい。創造者の主体性オリエンテーションはその上につくられるべきなのである。

もう一つは労演と地域劇団との正しい関係である。共に地方文化の発展を目ざしているのは事実であるが、必ずしもうまくいっているとはいえない。労演の創立に大きな役割を果たした松山の仔鹿座、高知の笛の会は、ともすれば労演の成立によつて、肝心の劇団活動

は停滞気味である。

そうした関係にないその他の劇団にしても、労演は劇団には直接的なプラスになつていない。逆に、技術的に創造的に質の高い芝居が容易に見られるようになり、観客の減少すら生みだしている。

労演にすれば、労演活動にのみ専心してくれるサークルと異なり、劇団サークルは不良サークルでもある。

いふならば双方の利害が一致していないのである。例えば悪いが、中央の大企業に荒される地元の中小企業みたいなもので、大企業を取りもつのが労演ということになる。ところが、電気冷蔵庫やテレビのような商品と異なり、共に地方文化の発展を求める運動であり、芸術運動である。両者の正しい関係こそ必要なのだ。

まず、労演という観客組織を考えなくてもいい。地域の観客が何を求めているかである。いうまでもなく、それは地域劇団でなければ發揮できない個性である。没個性の劇団があれば、何も地域劇団を見る必要がないからだ。われわれが創作劇運動の大切さを再認識しなければならぬのは、まさにこのためである。これは前述したように舞台創造力と

相関関係にあることも忘れてはならない。

では、舞台の創造力を強めるためにはどうしたらいいか。地域劇団は「演出も、俳優もポロ」であることの徹底的な自覚である。専門劇団の創造をたんなる技術と断じて自己のポロを合理化することは犬の遠吠でしかない。無論、技術もある。しかし、商業劇団の役者にしても敵しいトレーニングを重ねているのである。その上にしつかりした生活感覚なり、労働感覚なりをもっている強味を發揮すれば、より豊かな創造が生れる筈である。

そのためには、組織なり、演出なり、俳優なりのゆがんだ主体性・自我を捨て去り、吸収のために食欲になることである。それは恥ではない。

また、劇団の活動形態も個性的でなければならぬ。一年に一・二回大きな芝居をやるよりも、手軽な小さな芝居を何回も舞台にのせ、厚味のある舞台経験を重ねることである。それこそが、労演に組織されていない文藝的空白を埋める仕事であると同時に、演出・俳優・舞台美術を含め、創造力を豊かにする仕事なのだ。今日では地域劇団の任務はこの文化的空白を埋めることだと断定してもいい。

こうした積重ねの上に、労演が求める地域でしか生みだせない、創造豊かな舞台を生みだす道が開かれると思う。

年一本の創作劇が、各地の劇団で生みだされ、それぞれの労演の例会にのるようになつたら、どんなに日本の演劇状況が変わるだろうか。

それは夢ではない。

戦後二十数年、地域で芽が出始めると上京し、逆に才能を枯渇させられ、挫折した人がいかに多いことか。

これからは、そうした才能が地域で根を張るように労演も努力して欲しい。その定着は劇団のみでなく労演にも大きな力となつてはねかえってくるからである。むしろ、劇団の労演活動が不活潑だということ、不良サークルとみることも間違いない。劇団にとつては創造活動を発展させることが本務だからだ。

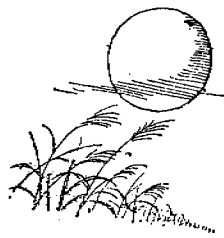
こうした双方の努力は今日緊急な課題であり、抽象的な論議でなく具体的につめかねばならない。それによつて、地方の文化状況は必ず開けてくると思う。

各地の劇団で創作劇が生れ、労演に支えられる！この道程はいうまでもなく苦しい道程

である。東西リ演は、その一端の任務を背負っているが、模索と挫折をくり返すだろう。私自身も創造者であると同時に、地方の文化活動家の一人として、責任の重さを痛切に感じた。

わが家へついたのは四時だった。つくなり劇団へ電話を入れた。今日は日曜だから「木口小平の犬死」の最後の追いこみをしているという。劇団員が衣裳を着たまま車で迎えにきてくれたので、岡山の土産きび団子をもって稽古場へいった。

「お帰りなさい」
「お帰りなさい」
みんなの声のひびきに公演前の活気が感じられた。それだけで島源三初演出の不安は私から一掃されたといつていい。(了)



感想 — 評論活動へ

中堅層の積極的参加を!!

黒 沢 参 吉

(編集委員会)

さいきん、運動方針―活動計画を討議する東リ演四役会議で、運動の理論化の必要性、中堅層への期待、「演劇会議」の編集の強化などについて話合うち、それがひとつに纏いあわされて、劇団、東西リ演、「演劇会議」のそれぞれの、また総合的な発展のために中堅といわれる人たちが、劇評、作品評など評論活動をおこすこと、編集のわからいえば、そういう人たちにドンドン書いてもらうことが非常に大切だ、ということになりました。

もっとも編集者の方も、その大切さに気づかなかった訳ではないので、従来も誰に何を書いてもらうかというとき、そういう着意は一応してきたし、その反映は誌面にもあらわれてきたとおもいます。

しかし、中堅といわれる人たちが、とくにそれぞれの劇団で果たしている役割の量と質

毎度のように、途中から割付けがくずれ、しよむないと、次々と印刷屋さんへ原稿を送りつけているうちに、こんなところにボカッと余白が出た。

一刻を争う時なので、誰かれに相談のしようもない。批難覚悟で、悪態めいた編集室だよりを、一言、二言、三言。

原稿でほしかったのは、「てのひらの詩」(閑芸)「みんなわが子」(名芸)の劇評。

劇評の原稿依頼は、西リ演総会のまとめを猿渡さんという風には参らず、何となくそへんがあいまいになってゆくことはあるが一つには、「演劇会議」の劇評に権威がないということもある。困ったことである。

こう、劇評軽視では、折角の仕事が、どこで記録になって残るといふのだから。

京都の劇団「橋」から、ニュースが送られて来た。9月20日付で52号である。いつの間にか、ぼくは愛読者になっている。

目下、黒沢氏の「金魚修羅記」が、秋のレパートリーとして取組まれているとあるが、話は、そのことではない。そこに、「てのひ

らの詩」の観劇記がある。ははア、ここにあったかと、熟読はしたが、一寸借用しがたかった。筆者は、谷田章三さん。

なかなか愛嬌のある「橋」のご自慢話に、話はオチているが、一寸、劇評としては世間を罷り通らぬと、ぼくはみた。

劇評は、批評の相手者にも、第三者にも納得されるものがないと困るのである。

劇評といえは、締切すぎからの公演のため、青年劇場の「ロミオとジュリエット」劇団労芸の「泰山木の木の下で」が活字にしえなかつた。これなども次の20号に組んだのでは、色腿せる。季刊の限界である。

誌代については、もはや申上げたくない。何故なら余りにも分り切ったことだからだ。それに、さすがに、些か疲れた。むしろ、途絶状態にあつた四国松山のこじか座から、かれこれ三年ぶりで、少女のように恥らいを含んだ手紙と昔の滞納誌代がとどいたのは新鮮な喜びを感じた。仲さんの飽きない努力、こんどの小林さんの旅が生んだ貴重な成果だつた。

(秋坂)

れること、また編集の方でたのんでも、ご本人が「書くのは苦手と」逃げる人が多いので、一緒に意義を説き、執筆時間を保証してあげるほどの熱意を、まず劇団にもってもらいたいです。

編集者としては、そうした劇団のあとおしをたよりに、魅力ある誌面づくりを実現していきたい考えです。

その上で、いままでの経験から、執筆投稿してくる仲間へそっ直な要求をのべます。簡単なことなので十分守ってもらえるし、守ってもらいと編集、印刷の能率が上がり、大きく全体の利益になります。

(1)まず、四百字詰の原稿用紙を使ってください。雑誌をひらいてかぞえてもらえばわかりますが、「演劇会議」は普通一段が二〇〇字で組まれています。一段の行数は二五行、一頁では七五行ですから、四百字詰原稿用紙なら三枚と一五行で一頁です。これが字詰のちがう原稿用紙や便箋を使われると、どれだけ頁におさまるのか計算が厄介になるため全部、四百字に書き写さねばならず、横書きも同様で縦書きに書きなおすのです。「劇団通信」はハガキでくるため、必ず原稿用紙に浄

書しますが、係にこれ以上のムダ骨はおらせ
ないで頂きたいのです。

(2)原稿の文字は楷書でていねいに。乱暴な
よめない字には泣きます。活字を拾ってこれ
るのも仲間の労働者です。かきだしと行をか
えた頭の一字は、あけるのがまじりです。よ
みやすくするには、適度の行かえがほしいと
おもいます。も、も「も」も、みな一本の
活字ですから、原稿も一字分とりまします。この
辺は、雑誌を注意してみてもらえばわかると
おもいます。原稿はナンバーをふって、題名
と執筆者の氏名を入れて、ホチキスか糊で必
ずとじてください。

(3)しめきりを守ってください。いまのとこ
ろ、しめきり日に三分の二の原稿が届けば良
い方で、そのため発行日が予定より一〇日、
半月とおくれていくのは、全体のマイナスだ
し、東西リ演の作風にてらしてもよくありま
せん。タダですむ答の「劇団通信」が、しめ
きり後速達で届くのも、何だかドンブリ勘定
的なゆるみを感じさせます。

(4)「演劇会議」の原稿送付先は、発行所
です。必ず、川崎市小田四一八二一七・萩坂
桃彦方へおってください。

× × ×

//文章を書くのは苦手//という人が、われ
われの仲間が多いのは事実ですが、それは、
喰わず嫌いのように、書きもせずに苦手と避
けている場合が多いようです。必要にせまら
れて書いてもらおうと、説得力も魅力もある文
章で吃驚させられることが沢山あります。

東リ演のこししの活動計画で、観劇交流の
仕上げとして、感想文を書きあうことをきめ
ましたが、その狙いは、われわれの周囲に不
足している劇評、戯曲評など評論活動をさか
んにするところにあります。

評論などといえれば尻ごみする人も必ず、自
分なりの感想はもつし、仲間同志ではそれを
喋りあいもします。ただ、言葉で喋りただけ
では言葉の綾も多く、曖昧になりやすいし、
また話合う人たちの間で消えてしまいます。

文章に書くとなると、感じたものを整理して
自分の論点を明確にする必要が生じますが、
実はその作業が、創造者としてのわれわれに
たいへんよい勉強になるとおもいます。同
時にその文章が、上演した劇団なり、戯曲の
作者を裨益することはいうまでもないでしょ
う。

さきに説得力も魅力もある文章とかきまし
たが、そういう文章はうまく書こうというよ

り、読んでくれる相手と読んでもらう目的の
二つがはつきりしているときに、生まれてく
るものようです。その意味で、感想文は手
紙の一変型といえるかもしれません。

東リ演の劇団の人たちは、芝居の上演直後
編集部の萩坂氏から、批評なり感想なりの手
紙をもらった経験をきつとおもちでしょう。
どんな小さな劇団のささやかな上演にも、欠
かさず手紙を書きおくる、いわば習慣化した
この実践に、その劇団の成長への援助である
とともに、萩坂氏じしんの重要な創造活動で
もあるのです。仲間の創造により多く接し、
そこから学び、正しい評価をかえしていく作
業をぬぎにして、「演劇会議」をわれわれの
現場の機関誌にはできないからです。

その萩坂氏の手紙は、(観劇の印象のもつ
ともつよい、その夜のうちに)書かれるとい
うことです。どこかの市役所ではありませ
んが、すぐやることは、いいことです。

現実の国民の要求、たたかいに背をむけ、
リアリズムを古典的流派の孤城へ幽閉しよ
うとする風潮が、演劇ジャーナリズムを壟断し
ているいま、われわれの現場からの中堅層の
健康な発言が、「演劇会議」の誌上にあふれ
ることこそ期待されるのです。

あとがき

八月のゼミ・総会は、東西リ演の活動に新たな活力を付与しまし
た。秋に入り、全国のなかまたちは、一齋に活潑な公演活動を開始
しています。

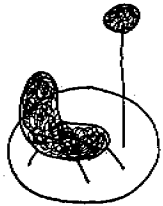
私たちは今、「新潟水俣病の勝訴」「南ベトナムの末期のフアッ
シィ化」「沖繩国会や国連総会で予想される波瀾」等々、慌しくも
劇しい歴史の変移の真只中に、立たされております。

こうした情況であればこそ、三たび四たび、「われわれの演劇と
は」「劇団の地域における任務とは」が、一そう重要な課題として
問われなければなりません。本号はそれに役立つとおもいます。

かねてから念願しつつも果たされなかった、労演との「問題」が
この号でその緒ぐちをつかむことができました。小林ひろし氏の「
中国・四国の労演めぐり」の熱誠をお願いする次第です。

(もも)

- 演劇制作スタッフ派遣 ● 舞台用器材貸出・販売
- 舞台照明操作・プラン作製・一式引受



組合や会社の文化祭・サークルの発表会るとき
どんなご相談でも気軽にお申越してください。

特にサークルのしごとは、サークルの身になって
いろいろな経験を生かし、経費の点もご便宜をは
かります。……………ぜひどうぞ!!

株式会社 第一ステージサービス

代表・川崎ひろし

東京都渋谷区代々木2-12・西原ビル TEL.03-370-0487(代表)

演劇会議 第一九号 一九七一年十一月一日発行

定価 二〇〇円(送料三五円)

編集委員

萩坂桃彦・塚越松雄・黒沢参吉
こばやしひろし・新木祥之

発行所

藤沢 薫・猿渡公一・栗原 省

演劇会議 発行所

川崎市小田四一八二一七
萩坂方

電話 〇四四 〇七七五